



TITLE:

京大生の文化資本

AUTHOR(S):

太郎丸, 博

CITATION:

太郎丸, 博. 京大生の文化資本. 2019: 1-131

ISSUE DATE:

2019-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/240989>

RIGHT:

京大生の文化資本

京都大学文学部 社会学研究室

2018 年度 社会学実習 報告書

太郎丸 博・編

2019 年 3 月

目次

調査の概要と尺度の検討（太郎丸博）	1
第1部	
京大生アンケートから見るクラシック音楽視聴の変遷（都筑洋介）	20
京大生のクラシック音楽視聴頻度と文化的雑食性（水野幸輝）	24
「読書頻度」の文化資本指標としての妥当性および性質の検討（福居昇真）	29
演劇鑑賞者の文化的傾向の検討（荒井佑介）	38
美術鑑賞に親和的な文化活動	
—京大生へのアンケート調査に基づいて—（今村光一郎）	44
理系の女性と文化資本の関係性（高垣嶺）	53
第2部	
親の音楽嗜好性と子供の文化資本（西村基）	60
親を含む家庭環境、または先天的・後天的要素による文化資本への影響（青塚楓）	66
映画館に行く頻度に応じた文化消費・家庭環境の差異（小島啓）	74
文化資本と父母の子育てへの参加態度の関係（小野紘子）	89
両親の学歴と家族イベントの開催頻度との関係（吉住愛）	93
親の学歴による本人の文化資本のジェンダー差（友田朝子）	98
子供時代の文化活動による影響の性別差	
—大学生時の音楽的志向との関係において—（岡田祐佳）	105
親子の性差は文化資本相続に影響を及ぼすのか？	
—京大生を対象とするアンケート調査結果を用いた検討—（佐藤慧）	110
調査票	118
単純集計表	123

調査の概要と尺度の検討

太郎丸 博

1 問い：文化資本をどう測定するか

今年度は文化資本の測定をテーマにした。文化資本の測定について学生に講義すると、よく「クラシック音楽を聴くと文化資本があることになるのに、レゲエを聞いても文化資本があると認められないのはおかしいのではないか」といった素朴な疑問を聞くことがある。確かにその通りなのだが、すべての音楽ジャンルについて尋ねるわけにもいかないし、かといってどんな音楽でも視聴してさえいれば文化資本がある、とは言いにくいので、悩ましい問題である。そこで、学生自身に文化資本の測定法について考えてもらう、というのが2018年度の調査実習のテーマであった。

なお、文化資本論では客体化された文化資本、制度化された文化資本、身体化された文化資本、の三種類すべてを文化資本と呼ぶが、本調査では、身体化された文化資本を主に調べている。それゆえ、以下では特に断りのない限り、「文化資本」という言葉を「身体化された文化資本」の意味で用いる。これは文化資本の測定がこれまで身体化された文化資本中心に検討されてきたということを踏襲してのことである。蔵書数など出身階層については多少の客体化された文化資本についても調べてある。制度化された文化資本については、父母の学歴以外は尋ねていない。

また、学生には「京大生の文化資本をどう測定するか」を考えるように指示してある。例えば、日本の有権者を調査対象者とする場合、ジャズやブルースの視聴頻度を尋ねても、大半がほとんど聞かないであろうから、分布が著しく偏ってしまう可能性が高いが、京大生の場合、比較的文化資本の高い家庭の出身者が多いと考えられるので、ジャズやブルースについて尋ねても、その回答は文化資本の尺度構成に使えるかもしれない。そういった点が考慮されている。

2 授業と調査の概要

授業では例年通り、研究課題に関連する論文をいくつか読み、さらに5月と6月にJGSS2008と東京大学社会科学研究所の若年パネル調査のデータを簡単に分析させている。分析にはSSJDA（Social Science Japan Data Archive）のリモート集計システム（Nesstar, <https://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp/access/remote-alysis/>）を利用した。これらの作業の後、班に分かれて質問文案を検討してもらった。各班の担当した質問項目は以下のとおりである。

1. 音楽
2. 読書とその他の文化資本
3. フェイスシート、出身階層と出身家庭の文化資本

音楽ジャンルの問題は、この調査の出発点でもあるし、クラシック音楽の視聴と読書は文化資本

の定番の測定項目でもあるので、担当をさだめた。また、文化資本は文化的再生産と分かちがたく結びついた概念なので、出身階層や幼少時の文化資本についてもたずねた。

これを受講学生自身にプリテストしてもらい、さらに微修正を行ってから質問紙を完成させた。質問項目の選定にあたっては、上記のような大枠を私が決め、あとは学生に自由に選ばせてある。重複した質問を削除したのと、案を検討している段階で多少のアドバイスをした以外は、最終的な質問項目の選定に私は関与していない。そのため私自身は「これはダメなんじゃないか？」と思う質問項目も含まれているが、自由を奪って安全な道を歩かせるよりも、自由に歩かせて失敗させたほうが教育効果があると考えて、そのまま実査を行っている。

実査は京都大学の授業（受講人数の多い講義）の前または後に出席している学生に対して配布し、回答してもらった。有効回収数は 474 で、すべての変数に関してリストワイズで欠損値のあるサンプルを除去すると、420 になる。以下の分析はこのリストワイズしたサンプルを使う。調査に協力してもらった授業は学生に自由に選ばせているので、サンプルは京大の学生からの無作為抽出にはなっていないことはもちろんである。ただし、この調査の目的は文化資本を尋ねる質問項目間の相関をみることであり、上記の質問項目が授業に出席するかどうかや授業の種類と強く相関しているとは考えにくいので、この調査は今後の研究の参考になるパイロット・サーベイであると考えることができよう。

10 月の後半に実査を行い、その後データの入力、クリーニングを経て分析を行った。授業では基礎的な集計の他に、95%信頼区間付きの平均値のプロットと主成分分析、重回帰分析の基礎を教えたので、そういった手法を用いたレポートが書かれている。この後に続く章は学生のレポートのうち学生がこの報告書への掲載（つまり京大のレポジトリでのレポートの公開）を許諾したものに限られている。

なお、以下ではこの調査で調べた学生本人の現在の文化資本、15 歳以前に親から与えられた（あるいは親自身の）文化資本（これは制度化、客体化された文化資本を含む）の質問項目に関して、それぞれ因子分析を行い、どの程度うまく測定ができているか検討する（すべて連続変数として扱う）。

3 尺度構成

連続変数として扱う問 2～問 7 の変数のうち、分布が短鋒形でなかったのは 邦楽ロックの聴取頻度、学習参考書、専門書、雑誌の読書頻度、であった（図 1 を参照）。これらについては正規分布からの乖離が特に激しいといえ、2 種類の性向の異なるグループが存在する可能性が考えられる。また、コンサート・ライブの参加頻度や 15 歳までのバードウォッチングの経験も、行ったことがないという選択肢に極端に偏っている。これらの変数に関しては、正規分布を仮定するような分析（例えば相関係数の検定や最尤法による因子分析）は歪んだ推定値になってしまう可能性がある。

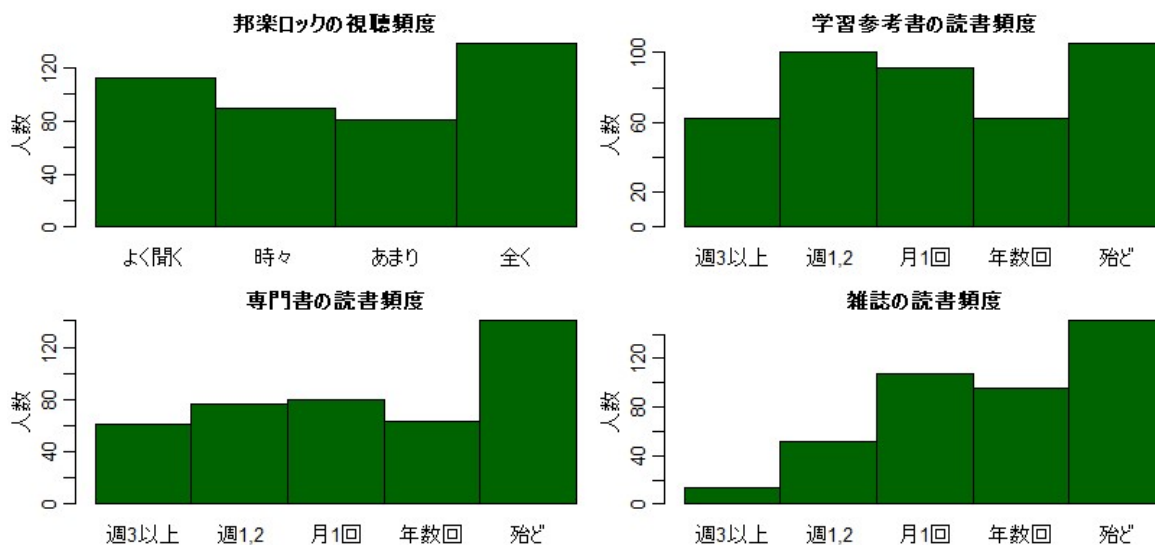


図 1：峰が複数ある変数の分布

また、問 2～問 7 の変数間のゼロ次の関連を見るとおおむね線形であるが、6.77% の組み合わせで曲線的な関係が見られた。具体的には、回答者 i の j 番目の意識項目への回答を X_{ij} とすると、すべての変数間の組み合わせで（合計 1122 通り）、

$$X_{ij} = \beta_0 + \beta_1 X_{ik} + \beta_2 X_{ik}^2 + \epsilon_i \quad (j \neq k)$$

というモデルを OLS で推定し、 β_2 が 1% 水準で有意になるかどうかを調べた。その結果が 6.77% の組み合わせで有意になった。帰無仮説が正しくても 1% の確率で有意な結果が出てしまうが¹、6.77% という数字はこれを大きく超えている。偶然という可能性も排除できないが、慎重な検討が必要である。独立変数または従属変数として、5 回以上 1% 水準で有意な結果が出ている変数は、表 1 のとおりである。これらの変数を分析する際には特に注意が必要であろう。

表 1：独立変数または従属変数として 1% 水準で有意な非線形関係が 5 回以上あった変数

	q2x2	q2x3	q3x5	q3x7	q4x2	q4x3	q5x1	q7x1	q7x2
従属変数のとき二次曲線的関係のある独立変数の数	2	5	6	7	1	3	6	0	0
独立変数のとき二次曲線的関係のある従属変数の数	5	4	3	2	5	5	2	5	5

3.1 音楽聴取頻度

本調査では、以下の 7 つの音楽ジャンルの聴取頻度とコンサート・ライブへの参加頻度をたず

¹ 1122 回 β_2 の検定を行ったが、「 β_2 がすべてゼロ」という帰無仮説のもとで偶然 1% 水準で有意な結果が出てしまう比率は、1122 個の β_2 の分布は独立ではないが、期待値としては 1% になる。

ねている。以下リストのカッコ（ ）内は、それぞれのジャンルの略記号で、図表のスペースが足りないときはこれらを使うことがある。

1. J-POP (JP)
2. 洋楽ポップ (WP)
3. 邦楽ロック (JR)
4. 洋楽ロック (WR)
5. ジャズ (JZ)
6. クラシック (CL)
7. アニソン (AS)

聴取頻度については、「まったく聞かない」=0, 「あまり聞かない」=1, 「ときどき聞く」=2, 「よく聞く」=3 として分析した。コンサート・ライブの参加頻度は「一月に一回以上」=12, 「半年に一回程度」=2, 「一年に一回程度」=1, 「数年に一回程度」=0.3, 「行ったことがない」=0 として分析した。これらの記述統計が図2と図3である。平均視聴頻度では J-POP が一番多いが、コンサート・ライブに行く平均頻度は邦楽ロックやクラシックとほぼ同じである。逆に洋楽ポップやアニソンは、平均視聴頻度は J-POP に次ぐぐらいに多いがライブ参加頻度は低く、薄く広く聞かれているがコンサートに行く人は少ないジャンルと、あまり広く聞かれていないがコンサートに行く人は多いジャンルがあることがわかる。

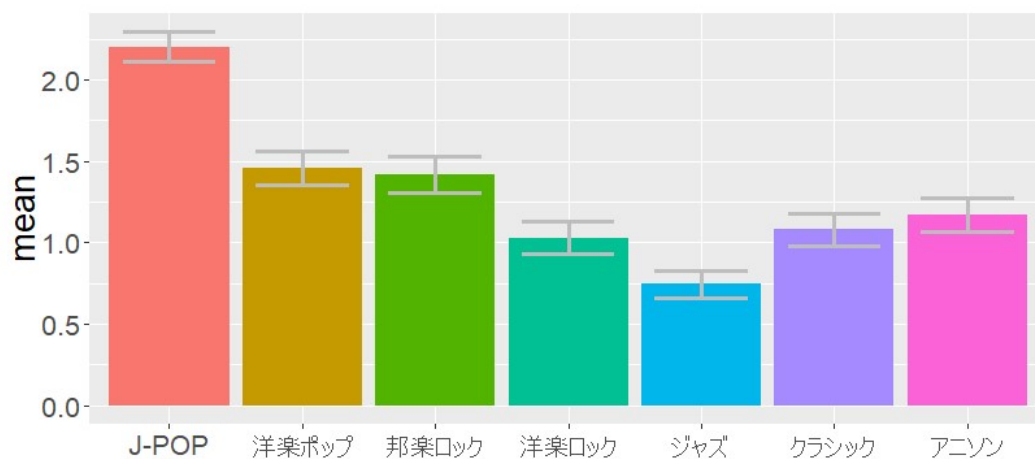


図2：音楽聴取頻度の平均値（注：エラーバーは平均値の標準誤差を示す）

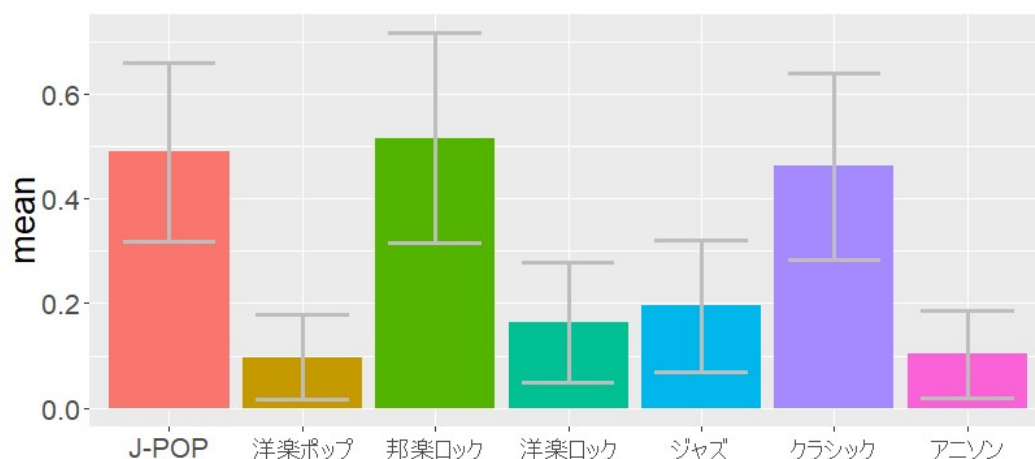


図 3 : コンサート・ライブに行く頻度の平均値 (注 : エラーバーは平均値の標準誤差を示す)

これらの変数の相関行列を示したのが表 2 である。ライブやコンサートに行く人はふだんからそのジャンルの音楽を聞いていると考えられるが、普段聞くからといってコンサートには行くとはかぎらない。普段の聴取頻度とコンサートやライブに参加する頻度の相関を見ると、クラシックの .38 が最大で、洋楽ポップの .09 が最小、平均すると .22 で、意外に小さいという印象である。聴取頻度のあいだのたがいの相関を見ると、平均で .16 なのに対して、ライブ参加頻度の相互の相関の平均は、.32 なので、ライブやコンサートによく行くライフスタイルというものがあり、そういう人は色々なジャンルのコンサート・ライブに参加するということのようである。ちなみに、ふだんの聴取頻度とライブ参加頻度の相関係数の平均は .07 である。

表 2 : 音楽聴取・ライブ参加頻度の相関係数 (前半の 7 つが聴取、後半がライブ)

	JP	WP	JR	WR	JZ	CL	AS	JP	WP	JR	WR	JZ	CL	AS
JP		.28	.33	.06		-.08	.08	.13					-.14	-.05
WP	.28		.19	.45	.21	.12	-.09		.09		.09	.07		
JR	.33	.19		.52	.16					.26	.07	.08	-.07	
WR	.06	.45	.52		.39	.17	-.07		.14	.27	.22	.15		.11
JZ		.21	.16	.39		.49	.08		.16	.16	.16	.31	.23	.18
CL	-.08	.12		.17	.49		.13		.10		.06	.20	.38	.13
AS	.08	-.09		-.07	.08	.13		-.06		-.07	-.07	.08		.14
JP	.13						-.06		.44	.19	.32	.26	.16	.06
WP		.09		.14	.16	.10		.44		.40	.71	.62	.42	.16
JR			.26	.27	.16		-.07	.19	.40		.48	.25	.15	.21
WR		.09	.07	.22	.16	.06	-.07	.32	.71	.48		.43	.29	.11
JZ		.07	.08	.15	.31	.20	.08	.26	.62	.25	.43		.42	.41
CL	-.14		-.07		.23	.38		.16	.42	.15	.29	.42		.28
AS	-.05			.11	.18	.13	.14	.06	.16	.21	.11	.41	.28	

絶対値が.05 未満の相関係数は表示していない

次にこれらの 14 変数を使って、探索的因子分析をした結果の適合度が表 3 で、並行分析の結果が図 4 である。変数の分布が偏っているので、最小二乗法で推定し、オブリミン法で斜交回転した。因子数の適合度指標を見ると、最低でも 4 因子は必要という結果だが、4 因子以上になると、いずれもヘイウッド・ケースが発生してしまうし、並行分析の結果を見ても、4 因子以上では、ランダムに発生させたデータと固有値はほとんど同じなので、3 因子解を採択する。

表 3：音楽聴取・コンサート・ライブ因子分析の適合度

因子数	RMSEA	BIC	SRMR
1	.157	399.083	.128
2	.135	156.178	.090
3	.105	-26.665	.054
4	.094	-58.809	.040
5	.082	-70.412	.029
6	.070	-67.827	.019

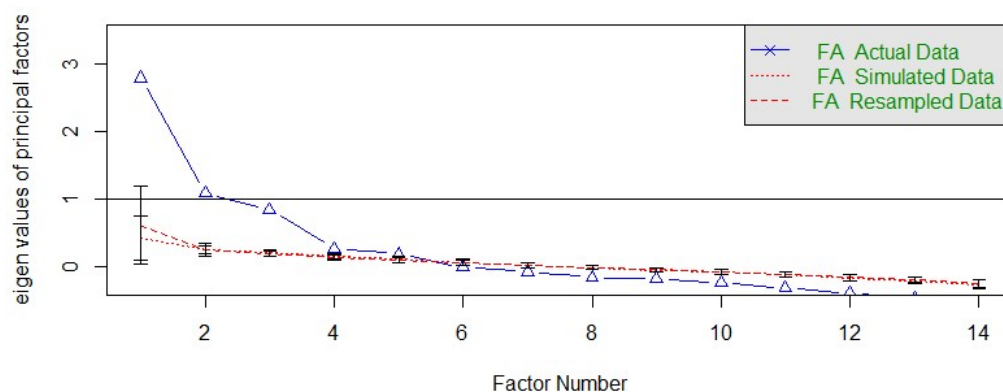


図 4：読書の探索的因子分析：並行分析の結果

3 因子解の因子負荷量が表 4 である。第一因子は、コンサート・ライブの負荷量が全般に高いので、「ライブ志向」と名付け、第二因子は、ロックやポップの聴取頻度の負荷量が高いので「ロック・ポップ聴取」、第三因子は、ジャズとクラシックの聴取頻度の負荷量が高いので、「ジャズ・クラシック聴取」と名付けた。第一×第二、第一×第三、第二×第三因子間の相関係数はそれぞれ .16, .31, .1 であった。

表 4：音楽聴取・ライブの因子負荷量

	ライブ志向	ロック・ポップ聴取	ジャズ・クラシック聴取
J-POP 聴取		.22	-.19
洋楽ポップ //		.47	
邦楽ロック //		.63	-.13
洋楽ロック //		.84	
ジャズ //		.30	.57
クラシック //			.72
アニソン //			.19
J-POP ライブ	.50		-.14
洋楽ポップ //	.95		
邦楽ロック //	.44	.25	
洋楽ロック //	.75	.11	
ジャズ //	.59		.29
クラシック //	.37	-.18	.46
アニソン //	.14		.30

.1 未満の因子負荷量は表示していない

3.2 読書頻度

本調査では、以下の 6 つのジャンルの読書頻度をたずねている。図表のスペースが足りないと

きはこれらの最初の一字（例えば「文」「実」）を略称として用いる。

1. 文芸書（小説・エッセイ・詩など）
2. 実用書（料理、趣味、スポーツ、美容、冠婚葬祭など）
3. ビジネス・経済・経営書
4. 学習参考書（資格対策書、語学書、辞書など）
5. 専門書（人文科学、社会科学、理工科学、医学、芸術など）
6. 雑誌

読書頻度については、年間の読書回数の概算値に置き換えて計算した。すなわち、「週に三回以上」 = 144, 「週に一、二回ぐらい」 = 48, 「月に数回ぐらい」 = 12, 「年に数回ぐらい」 = 1, 「ほとんど読まない」 = 0 として分析した。これらの記述統計が図 5 である。文芸書、学習参考書、専門書が年間平均 30 日ぐらいで、相対的によく読まれている。平均値が高いほど標準偏差も大きくなっており、よく読む人が増えることで、平均値も分散も大きくなることがわかる。

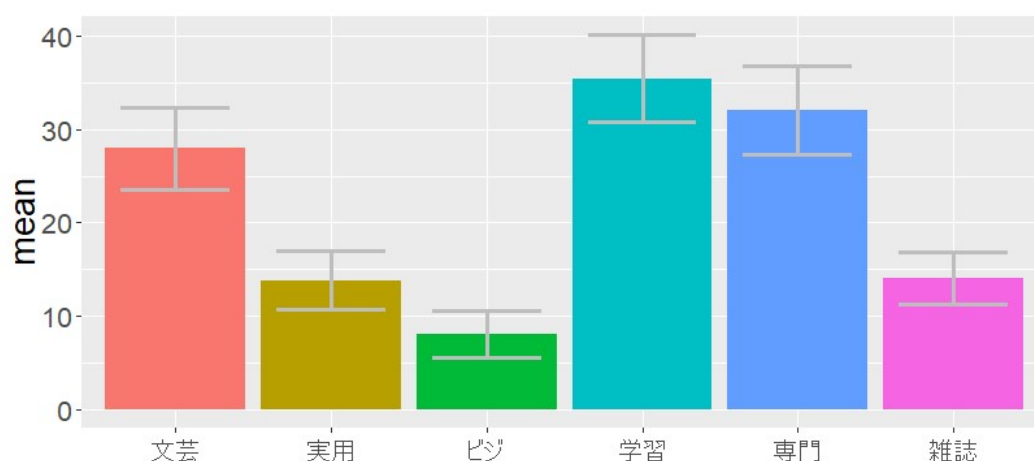


図 5：読書頻度の平均値（注：エラーバーは平均値の標準誤差を示す）

各ジャンルの読書頻度間の相関係数を示したのが表 5 である。これを見ると、音楽聴取に比べれば強い相関がみられる。学習参考書と専門書、実用書と雑誌、実用書と文芸書のあいだに特に強い相関がある。この相関行列をもとに探索的因子分析を行った。因子数ごとの適合度を示したのが表 6 で、並行分析の結果を示したのが図 6 である。これらの結果を見ると、2 因子以上が示唆されるが、スクリープロットのヒジを見ると一因子も考えられる。因子負荷量をみると、2 因子以上はヘイウッド・ケースとなるため、一因子解を採択する。因子負荷量は、これまでの表記順に .45, .53, .38, .51, .52, .46 であった。

表 5：読書頻度の相関係数

	文芸	実用	ビジ	学習	専門	雑誌
文芸		.33	.13	.19	.23	.15
実用	.33		.16	.21	.17	.37
ビジ	.13	.16		.23	.18	.23
学習	.19	.21	.23		.41	.14
専門	.23	.17	.18	.41		.21
雑誌	.15	.37	.23	.14	.21	

すべて 1%水準で有意

表 6：読書頻度の探索的因子分析の適合度

因子数	RMSEA	BIC	SRMR
1	.116	4.719	.073
2	.076	-10.659	.033
3			.014

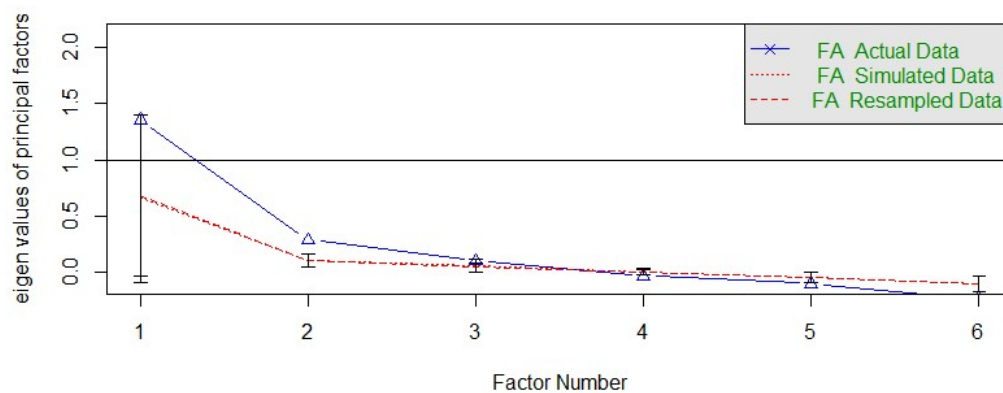


図 6：読書の探索的因子分析：並行分析の結果

3.3 その他の文化活動

音楽と読書以外にも、演劇、美術館、映画館に行く頻度をたずねている。これらも年間の鑑賞頻度の概算値に置き換えて計算した。すなわち、「週に一回以上」=48, 「月に数回ぐらい」=12, 「年に数回ぐらい」=1, 「ほとんど読まない」=0 として分析した。これらの平均とその標準誤差は図 7 のとおりである。一番多い映画で年間平均 3 回程度、演劇が 0.5 回、美術館が 1 回という結果である。

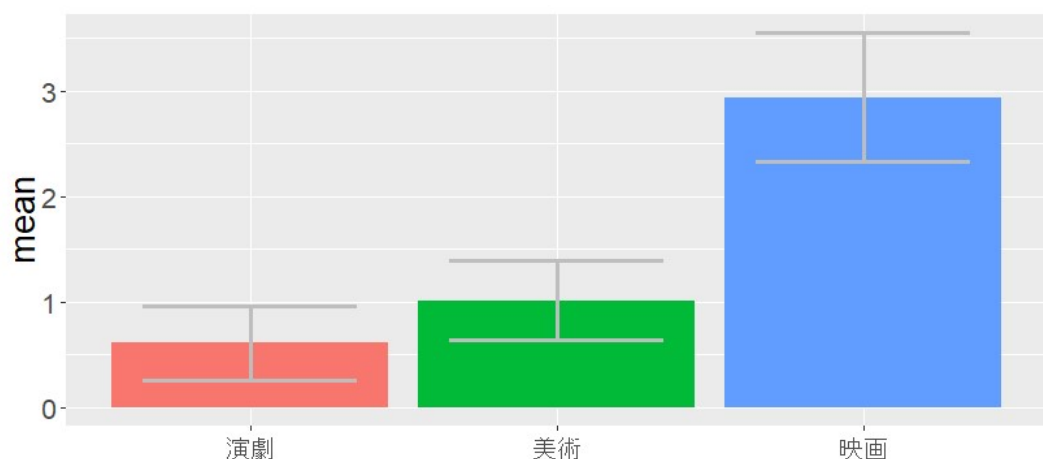


図 7：鑑賞頻度の平均値（注：エラーバーは平均値の標準誤差を示す）

これらの相関係数は、表 7 のとおりで、演劇と美術の相関が相対的に高いことがわかる。さらにこの相関行列をもとに因子分析をした。項目が三つしかないので、一因子を仮定するだけで飽和モデルとなり、 $BIC=SRMR=0$ で $RMSEA$ は自由度がゼロなので計算できない。それゆえ一因子以外には選択肢はないと言ってよかろう（主因子法のような探索的因子分析の場合、二因子解を推定することは可能であるが）。一因子解の因子負荷量はこれまでの表記順に .62, .8, .34 であった。

表 7：読書頻度の相関係数

	演劇	美術	映画
演劇		.49	.21
美術	.49		.27
映画	.21	.27	
すべて 0.1%水準で有意			

3.4 15 歳までの文化活動

文化資本の継承の尺度として 15 歳までの文化活動について、以下の 10 項目をたずねている。

1. 本の読み聞かせ
2. 勉強を教えてもらう
3. 美術館・博物館に連れて行く
4. クラシック音楽のコンサートに連れて行く
5. 海外旅行に連れて行く
6. 地域のイベントに連れて行く
7. 写真館に連れて行く
8. 山登りに連れて行く

9. いっしょに天体観測する

10. いっしょにバードウォッチングする

以下では、「よくある」 = 3、「ときどきある」 = 2、「あまりない」 = 1、「まったくない」 = 0と置き換えて計算をしている。これらの平均値は図8のとおりである。活動の性質がまったく異なるので、これらを比較してもあまり意味はないように思える。

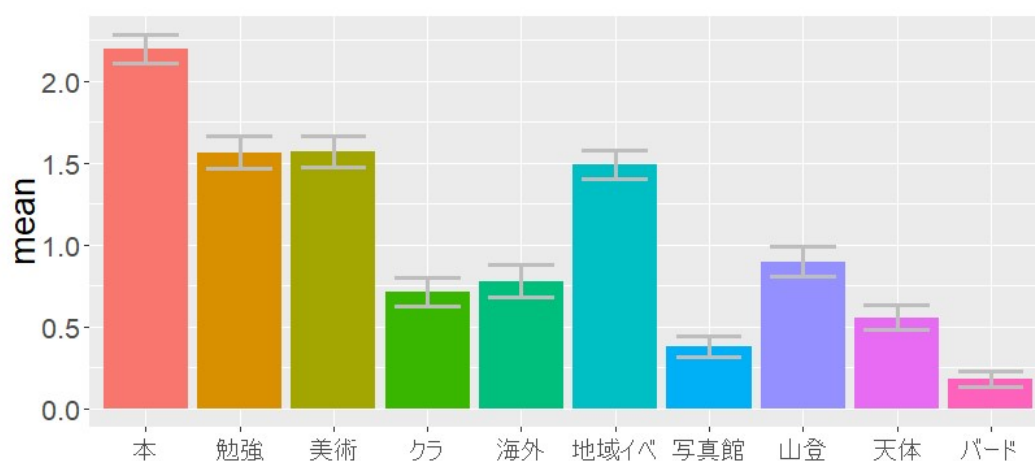


図8：15歳までの文化活動頻度の平均値（注：エラーバーは平均値の標準誤差を示す）

15歳までの文化活動間の相関係数を計算した結果が表8である。薄く広い正の相関が見られるが、特に最初の3変数（本の読み聞かせ、勉強を教える、美術館に連れていく）、最後の3変数（山登りに連れていく、天体観測、バードウォッチング）のあいだの相関は比較的高い。

表8：15歳までの文化活動間の相関係数

	本	勉強	美術	クラ	海外	地域イベ	写真館	山登	天体	バード
本		.41	.34	.12		.20	.08	.21	.18	.10
勉強	.41		.36	.17		.10	.16	.16	.13	
美術	.34	.36		.40	.11	.14	.20	.32	.20	.14
クラ	.12	.17	.40		.09	.09	.24	.19	.13	.17
海外			.11	.09		.05	.16	.05		
地域イベ	.20	.10	.14	.09	.05		.19	.23	.27	.12
写真館	.08	.16	.20	.24	.16	.19		.32	.27	.31
山登	.21	.16	.32	.19	.05	.23	.32		.35	.27
天体	.18	.13	.20	.13		.27	.27	.35		.46
バード	.10		.14	.17		.12	.31	.27	.46	

絶対値が.05未満の相関係数は表示していない

上記の文化活動のほかにも 15 歳時の自宅の蔵書数も尋ねており、その回答の分布は図 9 のとおりである。回答者がどの程度正確に本の冊数を把握しているのかはいささか不安だが、概算値としては使えるのではないだろうか。

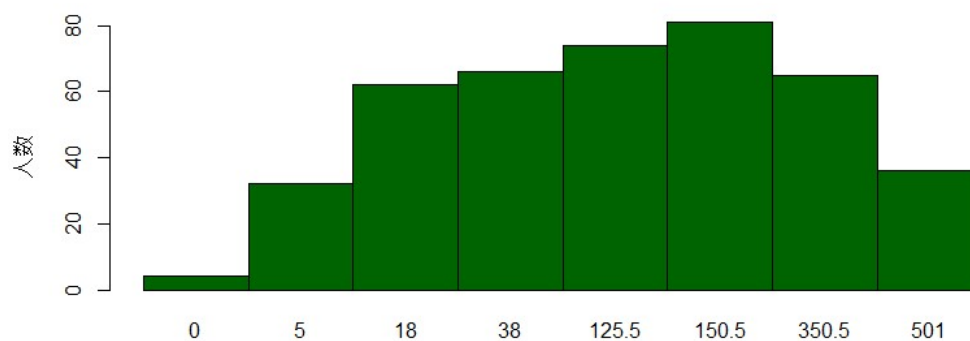


図 9：15 歳時の本の蔵書数のヒストグラム

本調査では 15 歳時に自宅にあった資産に関して尋ねているが、その中には客体化された文化資本とみなせそうな項目がいくつかある。以下については上記の文化活動や蔵書数との相関を検討する。

1. 文学全集
2. 百科事典
3. ピアノ
4. オーディオ機器
5. 美術品・骨董品

これらの保有率は図 10 のとおりである。

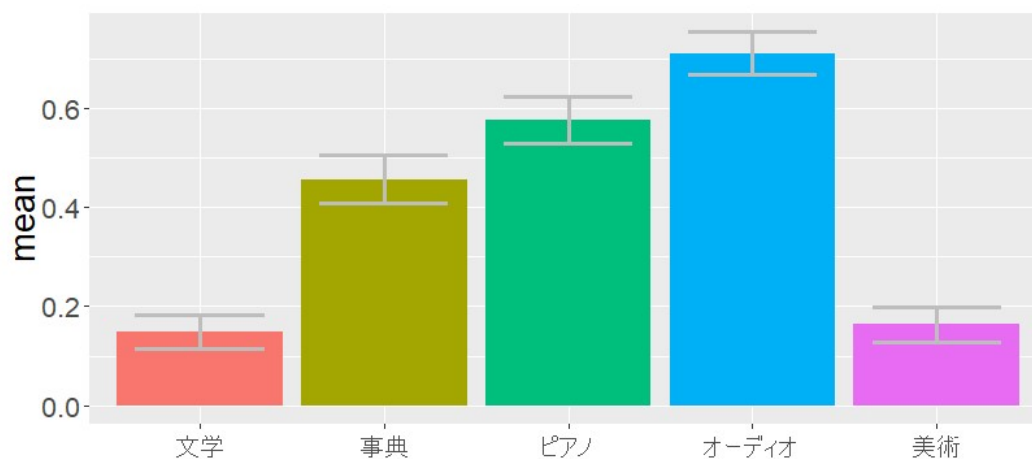


図 10：15 歳時の文化資本関連資産保有率、その 95%信頼区間

蔵書数とあわせた 6 変数の相関行列は表 9 の通りである。ただし、二値変数も含まれるため、蔵書数だけを連続変数として扱い、残りは離散変数として、離散変数どうしはポリコリック相関係数、離散変数と連続変数はポリシリアル相関係数で相関係数を推定した。

表 9：文化資産のポリコリック相関係数

	文学	事典	ピアノ	オーディオ	美術	蔵書数
文学		.53	.37	.29	.40	.46
事典	.53		.19	.25	.30	.28
ピアノ	.37	.19		.32	.26	.14
オーディオ	.29	.25	.32		.30	.24
美術	.40	.30	.26	.30		.21
蔵書数	.46	.28	.14	.24	.21	

絶対値が.05 未満の相関係数は表示していない

文化活動と上記の資産をあわせて探索的因子分析をおこなった。ただし、ポリコリック相関係数を計算すると、美術館への訪問と美術品の所蔵のポリコリック相関係数が .98 で、因子分析にかけるには強すぎるため、美術品の所蔵のほうは因子分析からは除外した。文化活動も離散変数とみなして上記と同じように計算している。各因子数の適合度を示したのが表 10 で、並行分析の結果が図 11 である。

表 10：継承文化資本の探索的因子分析の適合度

因子数	RMSEA	BIC	SRMR
1	.146	340.016	.114
2	.123	87.499	.076
3	.105	-32.440	.054
4	.092	-80.886	.040
5	.076	-108.494	.028
6	.076	-81.045	.022
7	.055	-80.652	.015

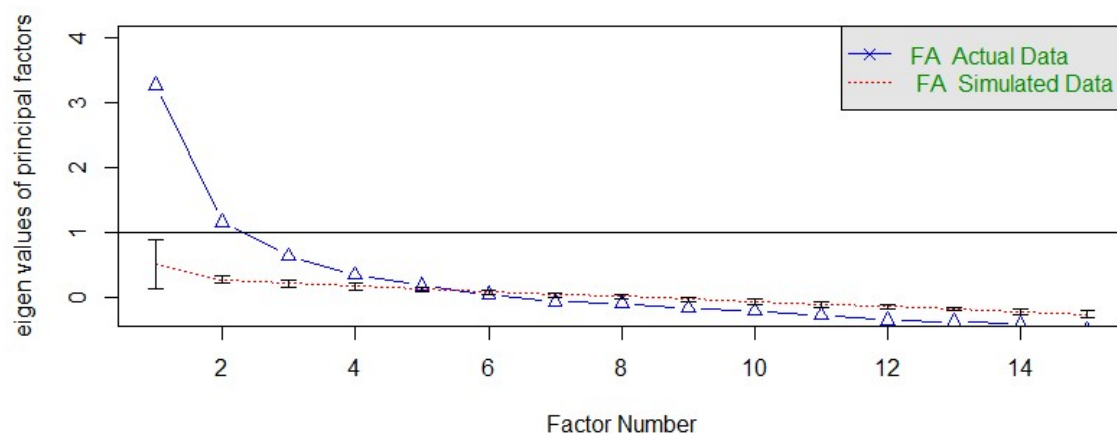


図 11：継承文化資本の探索的因子分析：並行分析の結果

RMSEA や BIC を基準とすれば 5～7 因子が最適ということになるが、第三因子の固有値はすでに 1 を下回っているし、ヒジを基準にすれば 1～2 因子で十分とも考えられる。SRMR と並行分析の結果は 3～4 因子が最適であることを示している。ここでは単純さを重視して 3 因子解を採択することにする。3 因子解の負荷量は表のとおりである。

表 11：継承文化資本の因子負荷量

	文化活動	文化資産	勉強・芸術
本			.68
勉強			.67
美術	.12	.13	.59
クラ	.15	.40	.21
海外	.10	.11	
地域イベ	.34	-.19	.20
写真館	.57		
山登	.57		.24
天体	.75		
バード	.83		
文学		.83	
事典		.51	
ピアノ	-.16	.51	
オーディオ		.48	-.11
蔵書数		.44	.16
.1 未満の因子負荷量は表示していない			

4 因果モデルの推定

最後に、上記で概観した因子間の因果関係について図 12 のような構造方程式モデリングで推定してみた。この図では測定モデルの部分と外生変数間の相関関係に関する矢印が省略されている。15 歳時／までの文化資本を媒介変数として、現在の文化資本を従属変数と考えている。

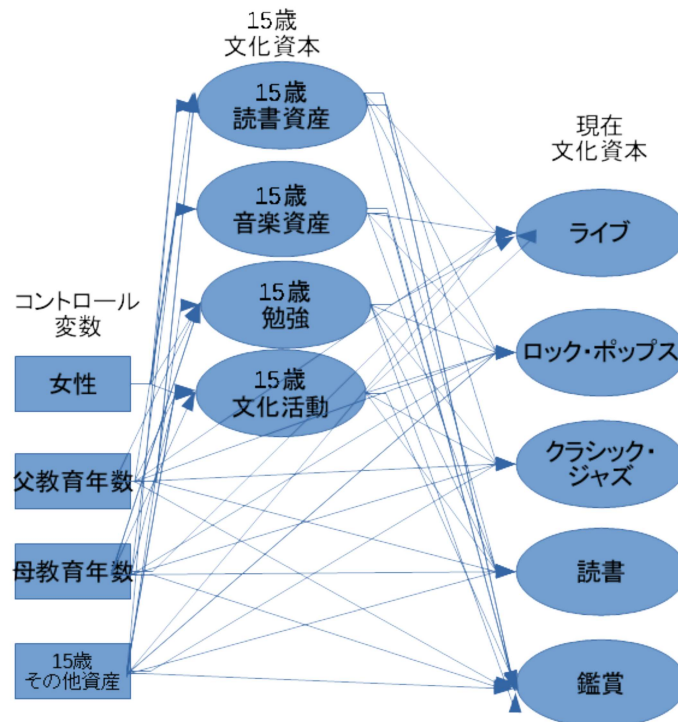


図 12：外生変数と潜在変数間の因果モデル

具体的には以下のようにモデルを組んでいる。相関係数はピアソンの積率相関係数を用い、パラメータは最尤法で推定している。探索的にいろいろなモデルを推定したが、まず、因子負荷量が低く、因果モデルの推定でもアノマリーが多々生じた J-POP、アニソン、ビジネス書は分析から除外した。音楽関係ではライブ、ロック・ポップス、クラシック・ジャズの 3 因子を設定し、ライブ参加は J-POP、アニソン以外のライブ参加頻度で測定されており、ロック・ポップスは J-POP 以外のロック・ポップスの聴取とライブ参加とジャズの聴取で測定され（ジャズを加えるのは探索的因子分析の結果を踏まえている）、クラシック・ジャズはクラシックとジャズの聴取頻度とライブ参加頻度で測定されている。このように音楽聴取については単純構造を仮定していない。15 歳読書資産は、蔵書数、百科事典、文学全集からなり、15 歳音楽資産はピアノ、オーディオの所有とクラシック音楽のコンサートへ行った経験からなっている。さらに 15 歳勉強は本の読み聞かせ、勉強を教えてもらった経験、バードウォッチングからなり、15 歳文化活動は上であ

げなかったすべての 15 歳時の文化活動からなる因子である²。

15 歳文化資本の 4 変数のあいだにはすべて誤差相関を仮定している。また、現在の文化資本のあいだにもすべて誤差相関を仮定している。もちろん外生変数である 4 つのコントロール変数のあいだにもすべて相関関係が仮定されている。

上記のモデルを Model 1 と呼ぶ。表 12 のようにこの Model 1 の適合度が悪いので、以下の変数のあいだに誤差相関を仮定したのが Model 2 である。以下リストの末尾の数値は Model 2 の相関係数の推定値。

- ジャズのライブ×演劇の鑑賞, .46
- クラシックのライブ × 演劇の鑑賞, .41
- 邦楽ロックのライブ × 洋楽ロックのライブ, .30
- 雑誌 × 映画の鑑賞, .28
- 邦楽ロックのライブ × 15 歳美術館, .29
- 15 歳天体観測 × 15 歳バードウォッチング, .27
- 学習参考書 × 専門書, .28

Model 1 の修正指数が最大の誤差相関を Model 1 に加え、その修正モデルの修正指数が最大の誤差相関をさらに修正モデルに加え、という作業を順次おこなって Model 2 をえた。

Model 1 の推定結果のうち、因果関係の部分をもとめたのが表 13 で、因子間の誤差相関を示したのが、表 14 と表 15 である。因子負荷量は割愛するが、15 歳までのバードウォッチング経験への「勉強」因子からの負荷量だけがマイナスで、それ以外はすべてプラスであり、洋楽ポップのライブ参加頻度への「ロック・ポップ」因子からの負荷量だけが有意ではなく、それ以外はすべて 5%水準で有意であった。

表 12：構造方程式モデリングの適合度

	X ²	df	BIC	SRMR	CFI	RMSEA
model 1	1088.495	511	54691.21	.056	.796	.053
model 2	876.294	505	54514.96	.053	.869	.043

² 因子の命名にはいろいろ問題があるが、暫定的にこれらの名前を使っておく。

表 13：Model 2 の標準化パス係数（因果関係の部分のみ）

	15 歳文 化活動	15 歳勉 強	15 歳読 書資産	15 歳音 楽資産	ライブ	ロック	クラシ ック	読書	鑑賞
父教育 年数	.16 *	.38 ***	.2 **	.09	.02	-.09	-.14	-.19 *	-.09
母教育 年数	.01	.06	.18 *	.3 ***	.03	-.05	-.05	-.02	.1
女性	.11	.09	.07	.19 **	.05	-.16 **	-.18 *	-.13	.09
その他 資産	-.09	-.04	.16 *	.23 **	-.12 *	-.06	-.33 ***	-.06	-.14 *
15 歳 文化活動					-.01	.11	.09	.23 *	.1
15 歳勉強					-.07	.02	.03	.09	-.19
15 歳 読書資産					.31 *	.04	.12	.24	0
15 歳 音楽資産					-.19	.27 *	.81 ***	-.08	.11

表 14：Model 2 における現在の文化資本のあいだの誤差相関

	ライブ	ロック	クラシック	読書	鑑賞
ロック	.04				
クラシック	.2	.19			
読書	.07	.11	.41 *		
鑑賞	.05	.08	.13	.22 *	

表 15：Model 2 における 15 歳文化資本のあいだの誤差相関

	15 歳文化活動	15 歳勉強	15 歳読書資産	15 歳音楽資産
15 歳勉強	.35 ***			
15 歳読書資産	.39 ***	.33 ***		
15 歳音楽資産	.02	.08	.51 ***	

性別の効果を見ると、女性のほうが親から多くの音楽資産を与えられる傾向があり、音楽資産の多さは現在のロックやクラシックの聴取頻度を高める傾向がある。しかし、性別のロック因子やクラシック因子の直接効果はマイナスであり、直接効果と間接効果が打ち消しあっている。

父母の教育年数は 15 歳文化資本を高める傾向があるが、現在の文化資本には直接効果をほとんど持たず、有意な直接効果はすべてマイナスである。例えば父教育年数の読書因子への直接効果はマイナスであるが、父教育年数は 15 歳までの文化活動を高め、15 歳までの文化活動が頻繁であるほど読書因子の値も高まる傾向が見られる。つまり、これも直接効果と間接効果が打ち消しあっているが、間接効果は $.23 \times .16 = .04$ 程度なので直接効果よりもずっと小さい。

その他資産の効果を見ると、15 歳時の読書資産や音楽資産を高めるものの、現在の文化資本には一貫してマイナスの効果を持っており、京大生限定で考えると、15 歳時に多くの経済資本を持っていないほうが、大学時代の文化資本を高めるようである。これは低階層出身者がかつての教養主義の担い手であったという竹内洋の説を彷彿とさせる。

15 歳文化資本の誤差相関のほとんどがプラスの有意な値を示しているのに対して、現在の文化資本の誤差相関はあまり有意になっていない。尋ねている文化活動の内容や尋ね方が違うので比較してもあまり意味はないが、親が子供にどんな文化資本を継承させようとするのか、という点では階層文化らしきものがあるのかもしれないが、子供が大学生になった時点では階層文化といえるほど明確なライフスタイルの分断があるという感じはしなかった。もちろんこれは京大生限定であるし、就職した後はまた事情が一変するので、一般化する気はまったくない。

5 議論

先行研究でよく用いられているクラシック聴取や美術館などへの訪問が、文化資本の指標として適切だと仮定し、なおかつ因子分析的な考え方にしたがうならば、ジャズや演劇の鑑賞も文化資本の指標となりうると感じた。ライブ因子と鑑賞因子のあいだには誤差相関もかなりあるので、因子負荷量の低い映画を指標から外して、美術館、演劇、ライブを一つの因子にまとめてしまうという選択肢もあるのかもしれない。ただこれらの文化活動は 15 歳文化資本との関連があまりないので、文化的再生産とはあまり関係ないライフスタイルなのかもしれない。クラシック・ジャズ因子と読書因子は相関しており、これらは 15 歳文化資本の一部から有意な影響を受けているので、文化的再生産論にあう文化活動という印象はうけた。

ただ、文化資本の指標を作る際に、因子分析的な考え方がほんとうに適切なのかどうかは、議論の余地があると思われる。因子分析では、潜在変数（この場合は文化資本）の値が大きいほど観測変数群（この場合はクラシック聴取のような個々の文化的な活動の頻度）の値も 大きくなる、という仮定をおく。しかし、高い文化資本を持つ人はクラシック聴取も美術館訪問も読書の頻度もすべて高くなる、と仮定して本当によいだろうか。クラシックは聞かないし読書もしないが美術品の造詣が非常に深い人は、因子分析の枠組みではあまり文化資本が高い人とはみなされない可能性が高い。日本では、ミドルクラスが持つておくべきたしなみのようなものはあまりはつきりしていないため、こういった疑問が出て来るのかもしれない。

第 1 部

京大生アンケートから見るクラシック音楽視聴の変遷

都筑 洋介

1 問題設定

本稿では京大生アンケートから、文化活動に対する分析として音楽視聴頻度を扱う。これまでの先行研究においても、音楽は人の好みや趣味をはかる指標として活用されてきた。そこで、過去の大卒者の音楽視聴頻度と現役京大生の音楽視聴頻度を比較し、特に文化資本の指標と考えられるクラシックの視聴頻度を中心に検討する。過去の大卒者には様々な大学出身者が含まれるのに対し、今回のアンケートは京大生のみが対象であるため、単純に数値を比較することは難しいが、過去と現在の音楽視聴の差異を分析するうえで参考にはできると考えられる。音楽視聴がどのように変遷したか、その変遷の要因は何かについて考察し、過去と現在での文化資本指標の在り方はどうであるかを提示することが本稿の目的である。

2 方法

過去のデータとしては、片岡（1998）による 1992 年に行われた神戸市での文化活動に関する調査及びその分析を用いる。表 1 はその調査結果の引用である。ただし、一部京大生アンケートでは扱っていないジャンルについては省略している。また、ポピュラー音楽について京大生アンケートにはない項目だが、JPOP や洋楽 POP の比較対象として参考になると考え省略していない。

表 1：大卒者の音楽視聴頻度割合（よくきく・まったくきかない）

	よくきく	まったくきかない
ポピュラー音楽	25.5	3.3
ロック	6.0	37.5
ジャズ	9.2	22.8
クラシック	21.1	9.7

出所：片岡（1998）（一部省略）

また、京大生アンケートについては、音楽の視聴頻度に関して、JPOP、洋楽 POP、邦楽ロック、洋楽ロック、ジャズ、クラシック、アニソンの 7 つの項目を扱ったが、上述のものと比較するため、アニソンは省略し、JPOP と洋楽 POP、邦楽ロックと洋楽ロックはそれぞれ合算したうえで「よくきく」と「まったくきかない」の割合を示すこととした。現役京大生の「よくきく」と「ま

まったくきかない」の割合を示したのが表2である。

表2：京大生の音楽視聴頻度（よくきく・まったくきかない）

	よくきく	まったくきかない
ポップス	35.0	15.6
ロック	20.0	36.4
ジャズ	5.5	50.6
クラシック	11.0	38.8

表1と表2を比較すると±10以上の変化をしたのが、ポピュラー音楽・ポップス、ジャズの「まったくきかない」、ロックの「よくきく」、クラシックの両方とかなり変化していることがうかがえる。

また、回答に用いた数値を「まったく聞かない」が0、「ほとんど聞かない」が1、「ときどき聞く」が2、「よく聞く」が3となるように加工し、JPOPと洋楽POP、邦楽ロックと洋楽ロックはそれぞれの数値を足し2で割った数値をそれぞれポップス、ロックとした。ポップス、ロック、ジャズ、クラシックの視聴頻度の相関を示したものが表3である。

表3：音楽視聴頻度の相関

		ポップス	ロック	ジャズ	クラシック
ポップス	Pearson の相関係数	1	.371**	.142**	0.041
	有意確率（両側）		0.000	0.002	0.375
	度数	470	469	466	467
ロック	Pearson の相関係数	.371**	1	.301**	0.072
	有意確率（両側）	0.000		0.000	0.119
	度数	469	471	467	468
ジャズ	Pearson の相関係数	.142**	.301**	1	.480**
	有意確率（両側）	0.002	0.000		0.000
	度数	466	467	467	467
クラシック	Pearson の相関係数	0.041	0.072	.480**	1
	有意確率（両側）	0.375	0.119	0.000	
	度数	467	468	467	468

**．相関係数は1%水準で有意（両側）。

ポップスとロック、ロックとジャズ、ジャズとクラシックでそれぞれ.30をこえる有意な正の相関があることがわかる。

3 分析

ここからは、現役京大生の音楽視聴頻度の結果について分析していく。上記 4 つの音楽ジャンルを主成分分析にかけたときの固有値と累積説明率が表 4 である。固有値が 1 以上なのは第 2 成分までなので、2 次元空間にプロットする。それが図 1 である。なお、図 1 の q2np はポップス、q2nr はロック、q2n5 はジャズ、q2n6 はクラシックをそれぞれ示す。

表 4：音楽視聴頻度の固有値と累積説明率

成分	初期の固有値		
	合計	分散の %	累積 %
1	1.730	43.248	43.248
2	1.174	29.354	72.602
3	0.638	15.946	88.548
4	0.458	11.452	100.000
因子抽出法：主成分分析			

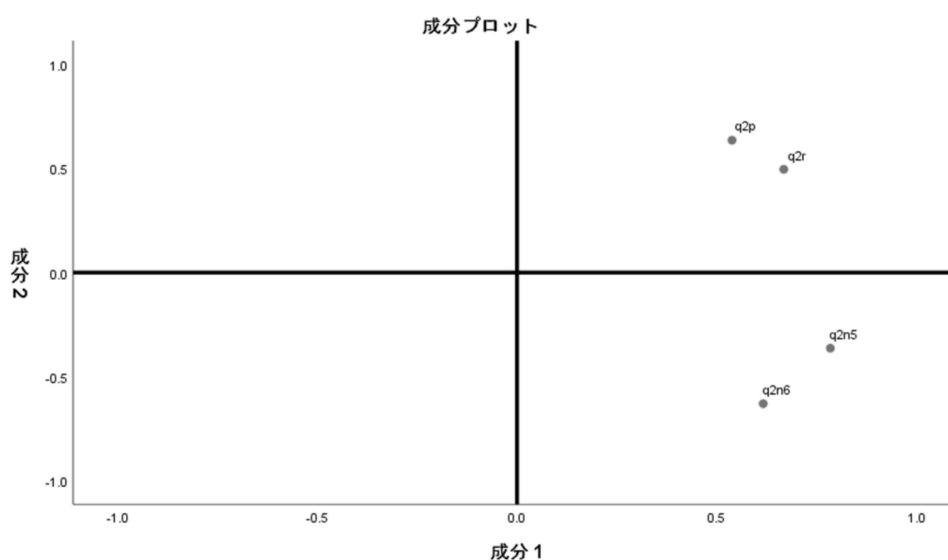


図 1：音楽視聴頻度の主成分分析の結果

これらの図表から、分析対象とした 4 つの音楽ジャンルはポップス・ロックとジャズ・クラシックと 2 つのグループに分けられそうである。前者は大衆音楽で「よくきく」の割合が増えたものになる。後者は過去と現在を比較したとき、「よくきく」の割合が減り、「まったくきかない」の割合が増えた 2 つとなっている。

4 考察

最後に分析結果からの考察を述べる。これまで見てきた通り、現役京大生は過去の過去の大卒者の音楽視聴頻度に関して、片岡（1998）は中卒者・高卒者と比較して大卒者にクラシックを聴いているのは学校教育でクラシック音楽が「学校的」知識、「学校的」教養として伝達されていることが要因であると指摘する。また、高学歴層がクラシック以外の大衆向けの音楽も聴く要因としては、文化的なオムニボアに代表される文化的寛容性をもつことが高い文化資本の要件となっていることを挙げている。しかし、現在も学校教育でクラシックは教えられており、正統文化の代表であることは変わっておらず、現役京大生のクラシックを聴く人の割合が減り、聴かない人の割合が増えていることの要因は他にあると思われる。要因としては、以下のようなことが考えられる。調査結果の比較から、ロックを聴く人の割合が増えていることからかつてよりも様々なジャンルの大衆音楽を受容する機会が増えた結果としてクラシックを聴くことが減ったという可能性や、大衆音楽として長く高い評価を受けたものを「教養」として聴くようになり、クラシックを聴く人が減ったという可能性が考えられる。前者に関してはジャズについても同様のことが考えられる。後者の可能性について検討するには文化活動の評価するような質問項目を加え、過去のデータと比較することが必要になりそうである。

本稿では、過去の大卒者と現役京大生の音楽視聴頻度を比較した。結果として、かつてよりクラシックを聴く人の割合は減少し、ロックのような大衆音楽を愛好する人の割合が増えていることが分かった。しかし、その要因を詳細に検討するにはアンケート内容を更新してさらなる調査が必要である。また、問題設定でも述べたようにアンケート対象が京大生のみであり、データが偏ったという可能性もある。いずれにせよこれらは今後の課題といえる。

文献

片岡栄美, 1998, 「音楽愛好者の特徴と音楽ジャンルの親近性——音楽の好みと学歴・職業」, 『関東学院大学人文科学研究報』 22, 147-162.

京大生のクラシック音楽視聴頻度と文化的雑食性

水野 幸輝

1 Introduction

文化資本の高さを測定する際にしばしば利用されるデータの一つに「クラシック音楽の視聴頻度」があり、今回の調査でも質問文の中にクラシック音楽の視聴頻度を問うものが含まれている。調査結果を見てみると、京大生の中にもクラシック音楽を頻繁に視聴する人々は一定数いることが分かり、京大生の文化資本の高さが垣間見える結果となった。しかしながらクラシック音楽を視聴することがあるとはいっても、専らクラシック音楽ばかりを好んで視聴している人々は少ないのではないかとと思われる。つまり京大生でクラシック音楽を視聴している人々は、ハイカルチャー文化のみならず雑多な文化に属する文化的オムニボア（片岡 1995）にすぎないのではないかとすることである。スマホの爆発的な普及により、幅広いジャンルの音楽に接する機会は増えており、それを購入する際の金銭的成本も以前に比べて低くなった。そのことによってのみ自分の嗜好するジャンルのみならずクラシック音楽を視聴するようになった人々が京大生の中にもいるのではないかと考えられる。そこで本レポートでは、「クラシック音楽を視聴する人々であるほど、文化的雑食性が高い」という仮説を立て、京大生のクラシック視聴頻度と文化的雑食性の関係を分析していく。

2 Method

2.1 データ

本研究で用いるデータは、2018年に京都大学の学部生および院生を対象に実施された質問紙調査「文化活動に関する意識調査」の結果である。

2.2 変数

回答者には以下の質問を「J-POP、洋楽 POP、邦楽ロック、洋楽ロック、ジャズ、クラシック、アニソン」の7つのジャンルに分け、「よく聞く」から「まったく聞かない」までの4点尺度で尋ねた。

- あなたは以下のような音楽を好んで聴いていますか。

2.2.1 従属変数

従属変数である「文化雑食性の高さ」のデータを得るため、これらの質問から得られたデータに加工を行った。具体的には、それぞれの回答において肯定と否定の数値を反転させ、肯定側の

数値が大きくなるような 0 を始点とした関数を作った。(0. まったく聞かない 1. あまり聞かない 2. 時々聞く 3. よく聞く)

これを「音楽視聴頻度」とする。

さらに、全ジャンルにおけるこの回答の数字の和を与えるような関数を作成し、これを本レポートでは「文化雑食性」とする。

2.2.2 独立変数

独立変数の「クラシック音楽の視聴頻度」に関しては先ほど作成した「音楽視聴頻度」を使用する。

3 Results

まず、「クラシック音楽の視聴頻度」が文化的雑食性に関連があるかどうかを調べるため、クラシック音楽視聴頻度別に文化雑食性の平均値を計算した。その結果をそれぞれエラーバーにして示したものが図 1 である。

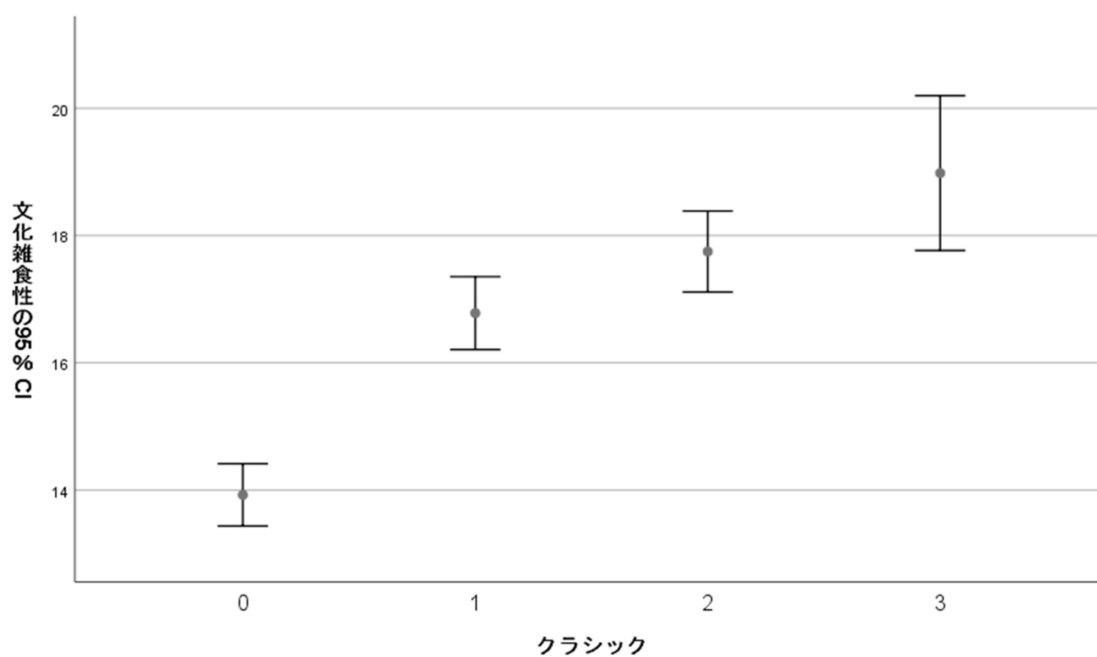


図 1：クラシック音楽視聴頻度別の文化雑食性平均値（エラーバーは 95%信頼区間）

図 1 の結果からクラシック音楽の視聴頻度と文化雑食性の間に関連は見られることがわかる。次に、クラシック音楽の視聴頻度と文化雑食性の相関関係の結果は以下の表 1 のようになった。

表 1：クラシック音楽の視聴頻度と文化雑食性の関係

クラシック	文化雑食性	
	Pearson の相関係数	.465*
	有意確率（両側）	0
	度数	466

*相関係数は 1% 水準で有意（両側）。

表 1 のように、クラシック音楽の視聴頻度と文化雑食性の相関係数は 0.465 を示しており、強い相関がみられる。しかしながら使用しているデータの内容から、両者に相関がみられること自体は想定可能である。そこで、その他音楽ジャンルを含めた文化雑食性との相関関係を調べ、その結果が表 2 である。

表 2 の結果を見てみると、クラシック音楽以上に文化雑食性と強い相関を持つジャンルが多いことが分かる。具体的には、洋ロックが 0.680 と最も高い相関を示し、続いて邦ロックが 0.623、ジャズが 0.588 という結果を出した。

表 2：ジャンル別音楽の視聴頻度と文化雑食性の関係

	文化雑食性
クラシック	Pearson の相関係数 .465** 有意確率(両側) 0 度数 466
pop	Pearson の相関係数 .463** 有意確率(両側) 0 度数 466
洋楽pop	Pearson の相関係数 .582** 有意確率(両側) 0 度数 466
邦ロック	Pearson の相関係数 .623** 有意確率(両側) 0 度数 466
洋ロック	Pearson の相関係数 .680** 有意確率(両側) 0 度数 466
ジャズ	Pearson の相関係数 .588** 有意確率(両側) 0 度数 466
アニソン	Pearson の相関係数 .333** 有意確率(両側) 0 度数 466

** 相関係数は 1% 水準で有意(両側)です。

* 相関係数は 5% 水準で有意(両側)です。

4 Discussion

4.1 結果のまとめと考察

クラシック音楽の視聴頻度と文化雑食性の間に比較的強い相関が見られたことから「クラシック音楽を視聴する人々であるほど、文化的雑食性が高い」という仮説は支持されたといえる。しかしながらその他のジャンルと文化雑食性の間の相関関係と比べてみるとそれほど強いとは言えず、洋ロックや邦ロックの方が強い相関関係を持つ結果となった。この理由としては、ジャンルがほぼ同一または類似していることにより「どちらかを視聴していれば自ずと他方も視聴している」関係にあり、それが文化雑食性の高さへと繋がってしまったためであると考えられる。一方で洋楽 POP と J-POP の間にもそのような関係がみられてもよいものの、J-POP の相関係数がそれほど高くない結果となったことは興味深い結果である。

4.2 今後の課題

今回の文化雑食性を示すデータでは、単純に全ジャンルの視聴頻度を足し合わせていく方法を採用してしまったがために、ある特定のジャンルを頻繁に視聴する人々と幅広いジャンルを少しずつ視聴する人々の区別ができていなかった。また似通ったジャンルが多かったために、現実よりも文化雑食性が高く評価されてしまっている恐れがある。京大生の文化雑食性をさらに正確に判別できるような関数と音楽ジャンルの設定を行い再び分析することを今後の課題としたい。

文献

- 片岡栄美, 2018, 「文化的オムニボア再考——複数ハビトゥスと文脈の概念からみた文化実践の多次元性と測定」、『駒澤社会学研究』第 50 巻, 17-60 頁.
- 太郎丸博, 2005, 『人文・社会科学のためのカテゴリーカル・データ解析入門』ナカニシヤ.

「読書頻度」の文化資本指標としての妥当性および性質の検討

福居 昇真

1 はじめに

代表的な文化資本の指標としては、クラシック音楽の鑑賞頻度や美術館への訪問頻度などが考えられる。その一方で、「読書」習慣を直ちに文化資本と見なすかどうかは一考を要する。本稿では、そのような読書習慣（読書頻度）が文化資本を代表する指標と見なすことができるか否かについて検討したい。また、読書頻度が文化資本の指標と見なされるとすれば、その指標は他の文化資本の指標と比べどのような性質をもつのかも併せて検討したい。

先行研究においては、読書習慣は文化資本であると前提されることが少なくない。そのうえで、それを形成する原因やそれが与える影響を分析するものという手法が用いられる。たとえば、片瀬（2004）は高校生を対象とした調査で、芸術文化資本が親の文化資本の影響を相対的に受けやすい「相続」された文化資本であるのに対し、読書文化資本は高校ランクの影響を受けやすい「獲得」された文化資本であることを明らかにした¹。

一方、読書習慣を直ちに文化資本と見なすことを困難にしている背景として、読書趣味が大衆化していることがある²。たとえば、橋本（1988）による文化評価スコアでは、「クラシック音楽のコンサートへ行く」のスコアが 82.8、「美術館や美術の展覧会に行く」が 80.0 である一方、「芸術や歴史に関する本を読む」は 65.1、「若手作家の小説を読む」は 50.5 であった³。

このように、読書趣味をもつことがクラシック音楽鑑賞などに比べ、高度に文化的なものとみなされていないことが分かる。すなわち、読書趣味を持つことは、文化資本の指標として不十分であるか、文化資本と見なされるとしてその中での位置づけは低いとみなされても十分な理由があるようにも思われる。

つまり、先行研究では読書習慣を文化資本と前提することが多い一方で、一般的には読書の文化的地位は高くないという現状がある。したがって、読書習慣の文化資本としての位置を確定することには一定の意義があるだろう。そこで、本稿では「読書」という習慣について、他の文化資本との関係を確認することで、その文化資本の指標としての妥当性を検討する。そのうえで、

¹ ここでの芸術文化資本は「クラシック音楽を聴く」頻度で、読書文化資本は「文学作品や歴史の本を読む」頻度で計測される。また、高校ランクとは入試時の偏差値や大学進学率を基に設定されたものである。

² たとえば、総務省の行った「平成 28 年社会生活基本調査」によると、趣味ごとの行動者率（過去 1 年間に該当する活動を行った人の割合）は、「音楽会などによるクラシック音楽鑑賞」が 9.9%、「美術鑑賞」が 19.6%であるのに対し、「趣味としての読書」は 38.2%である。

³ いくつかの文化活動について「上品である」から「上品でない」までの 5 段階の評価で回答を求め、それに基づき各文化活動の文化評価スコアを算出したものである。

読書習慣を文化資本とみなせるとすれば、先行研究と同様に「獲得」された文化資本とみなせるかについても検討する。

2 方法

2.1 仮説と分析方法

本稿では上述のような観点から、次の2つの仮説について検討する。

仮説1：読書頻度という指標は、他の文化資本指標と相関関係から文化資本の指標とみなすことができる。

仮説2：本調査においても文化資本としての読書習慣は、他の身体化された文化資本に比べれば「獲得」された文化資本といえる。

今回の調査では、「文芸書」や「専門書」といった本のジャンルごとに、どれだけの頻度で読書を行うかを尋ねている。本稿では、得られた読書頻度の回答を年間のおおよその読書回数に換算し、さらにすべてのジャンルの読書回数を足し合わせた「全ジャンルの読書頻度」と、文芸書と専門書の読書回数を足し合わせた「文芸書・専門書読書頻度」の二つの変数を作り、この変数の有用性の検討も行う。

文化資本の指標としての妥当性は、既に文化資本の指標として広く認められているクラシック音楽の愛好度や芸術鑑賞の頻度などとの相関関係の確認によって行う。また、両親の学歴や出身家庭の客体化された文化資本との相関関係も確認することで、その性質、つまり獲得された文化資本であるかどうかについても検証する⁴。

2.2 変数

本稿で用いる変数は原則として、程度（頻度など）が大きくなるほど数字も大きくなるように数字の置換を行うものとする。

読書に関する変数

読書の頻度については、「文芸書（小説・エッセイ・詩など）」(q4x1)、「実用書（料理、趣味、スポーツ、美容、冠婚葬祭など）」(q4x2)、「ビジネス・経済・経営書」(q4x3)、「学習参考書（資格対策書、語学書、辞書など）」(q4x4)、「専門書（人文科学、社会科学、理工科学、医学、芸術など）」(q4x5)、「雑誌」(q4x6)の6つの項目について「あなたは以下のジャンルの本をどれ

⁴ ここで仮説1と仮説2の関係を整理しておかなければ混乱が生じるかもしれない。つまり、仮説2では読書習慣は「獲得」文化資本であることを予想している一方で、仮説1では「相続」文化資本との相関によって読書習慣を文化資本として基礎づけようと試みているからだ。そのため次の点に留意する必要がある。つまり、「獲得」や「相続」とはあくまでも相対的にその側面が強いということの意味するのであって、ある文化資本が全的に「獲得」や「相続」されるわけではない。また、高度な文化資本（文化的趣味）同士は互いに親和性が高いと予想できる。だとすれば、読書習慣は相対的に「獲得」されて文化資本でありながら、クラシック音楽鑑賞などの「相続」された文化資本とも相関関係を持つという予測は必ずしも矛盾しない。

くらいの頻度で読みますか」と尋ね、「週に三回以上」、「週に一、二回ぐらい」、「月に数回ぐらい」、「年に数回ぐらい」、「ほとんど読まない」の選択肢から回答を求めたものである。

これらの読書頻度を、年間を通してのおおよその読書回数に換算し、「週に三回以上」を 260、「週に一、二回ぐらい」を 78、「月に数回ぐらい」を 24、「年に数回ぐらい」を 3、「ほとんど読まない」を 0 と置き換えたものを、本稿では変数として用いる。

また、上記のジャンルのうち、特に文化資本と関連がありそうな「文芸書」と「専門書」の年間読書回数を足し合わせた変数（「文芸・専門」）と、すべてのジャンルの年間読書回数を足し合わせた変数（「全ジャンル」）を作り、それらについても検討する。

身体化された文化資本に関する変数

回答者の現在の文化資本の指標としては、クラシック音楽の聴取頻度、美術館および演劇に行く頻度を用いる。クラシック音楽の聴取頻度は、「あなたは以下のような音楽を好んで聴いていますか。」という質問の「クラシック」の項目について、「よく聞く」、「ときどき聞く」、「あまり聞かない」、「まったく聞かない」の4段階で回答を求めたものである。この「よく聞く」から順に4~1の数字を割り当てたものを変数として用いる。美術館と演劇に行く頻度は、「あなたは以下の文化活動をどれくらいの頻度で行いますか。」という質問の「演劇を観に行く」と「美術館へ行く」の項目について、「週に一回以上」、「月に数回ぐらい」、「年に数回ぐらい」、「ほとんど行かない」の4段階で回答を求めたものである。そして「週に一回以上」から順に4~1の数字を割り当てたものを変数として用いる。

出身家庭の文化資本に関する変数

また、両親から受け継がれた文化資本の指標としては、両親の学歴、実家にあった本の冊数、実家にあった資産、両親から受けた文化教育を用いる。学歴は、「大学院、大学、短大、高専、高校、中学校」（「わからない」は欠損値として除く）の選択肢について順に6~1までの数値を割り当てたものを用いる。実家にあった本の冊数は、「あなたが15歳のころ(中学卒業時)、あなたのお宅には本がどのくらいありましたか。雑誌、新聞、教科書、漫画、コミックは含めないでお答えください。」という質問に「家に本はなかった」、「10冊以下」、「11冊~25冊」、「26冊~50冊」、「51冊~100冊」、「101冊~200冊」、「201冊~500冊」、「501冊以上」の選択肢から回答を求めたものについて、それぞれ0、5、18、38、75、150、350、500と数値を割り当てたものを変数として用いる。

文化資本と関連のありそうな実家の資産については、「あなたが15歳だったころ(中学卒業時)、お宅には次にあげるもののうち何がありましたか。」という質問への回答で、「文学全集」、「百科事典」、「美術品・骨董品」、「学習机」のそれぞれを保有していた場合1、していなかった場合0とした変数を用いる。親から受けた文化教育については、「あなたが15歳までに、次のようなことをご両親にしてもらったことがありますか。」という質問の「本の読み聞かせ」、「ク

ラシック音楽のコンサートへ連れていく」の項目に、「よくある」、「ときどきある」、「あまりない」、「まったくない」の四段階で回答を求めたものである。これも「よくある」から順に4~1の数値を割り当てた。

3 結果

3.1 仮説1の検討

まず、ジャンルごとに読書頻度が文化資本の指標となりうるかを確認する。クラシック聴取、美術館の利用（美術鑑賞）、演劇鑑賞といった他の文化資本の指標と考えられる変数との相関を確認したものが表1である。

表1：ジャンル別読書頻度と文化資本指標の相関係数

	文芸書	実用書	ビジネス書	参考書	専門書	雑誌	クラシック視聴	美術鑑賞	演劇鑑賞
クラシック視聴	.120**	.113*	.080	.112*	.120**	.099*	1.000	.251**	.259**
美術鑑賞	.118*	.112*	.093*	.148**	.167**	.117*	.251**	1.000	.399**
演劇鑑賞	.076	.067	.123**	.052	.050	.045	.259**	.399**	1.000

**．相関係数は 1% 水準で有意 *．相関係数は 5% 水準で有意

表1から、ジャンル別での読書頻度と他の文化資本（クラシック、美術館、演劇）の指標との相関は強くないことが分かる。このことは、他の文化資本同士の相関関係（表1右部分）に比べるより明確になる。つまり、なにか一つのジャンルの読書頻度をとったとき、その変数だけでは文化資本の指標としての妥当性が弱いといえる。ただし、文芸書、専門書、参考書などは文化資本を示す他の指標との間に若干の相関関係を持つ。

ここで、各ジャンルの読書頻度同士の関係性を、主成分分析を用いて確認しておく。その結果が表2および図1である。図1から分かるように、一般的な読書傾向は、「文芸書」「実用書」「雑誌」を好むグループと、「ビジネス書」「参考書」「専門書」を好むグループの2つに分けられる。このことから、一つのジャンルの読書頻度のみでは、読書全般の読書頻度を代表したものとはいえない。つまり、どちらのグループのジャンルも読む人の動向を反映できていない。そして、そのような「雑食的」な人たちこそ高度な文化資本の所有者である可能性がある。

表 2：読書ジャンルに関する主成分分析の結果

成分	固有値	説明率	累積説明率
1	2.092	34.867	34.867
2	1.066	17.771	52.638
3	0.888	14.806	67.444

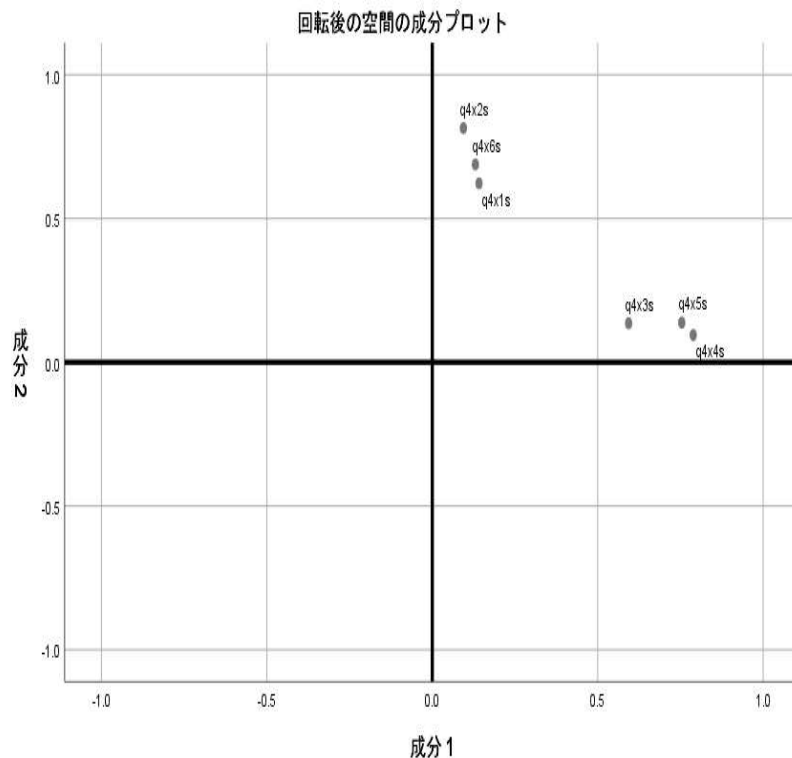


図 1：読書ジャンルに関する主成分分析の結果（バリマックス回転後）

それでは、「変数」の項で説明した変数、「文芸・専門」と「全ジャンル」は文化資本の指標として機能するだろうか。先ほど同様、これら（および参考のために「文芸書」、クラシック音楽視聴取、美術館鑑賞も加える）と他の文化資本の指標との相関関係を示したのが、表 3 である。また、文化資本の形成に資すると考えられるいくつかの出身家庭的要素との相関を示したのが表 4、表 5 である。

表 3 から、「文芸書のみ」、「文芸書と専門書」、「全ジャンル」と読む本の対象ジャンルが広がるほど、他の文化資本の指標との相関関係は高まることが分かる。そして、全ジャンルの読書頻度と美術館訪問頻度の相関関係（.231）などは、クラシック聴取頻度と美術館訪問頻度（.251）や演劇鑑賞頻度（.259）との相関係数と同等の水準であるといえる。このことから、その対象を「全ジャンル」とした場合、読書頻度は文化資本の指標として用いることが可能だと考えられる。ただし、それ以外の文化資本の指標間の相関関係と比べれば、全ジャンルの読書頻度の文化資本指標として妥当性は相対的に低いといえるだろう。

表 3：読書頻度と文化資本指標の相関係数

	クラシック聴取	美術鑑賞	演劇鑑賞
文芸書	.120**	.118*	0.076
文芸・専門	.156**	.189**	0.082
全ジャンル読書	.181**	.231**	.116*
クラシック聴取	1	.251**	.259**
美術鑑賞	.251**	1	.399**

**．相関係数は 1% 水準で有意 *．相関係数は 5% 水準で有意

3.2 仮説 2 の検討

全ジャンルの読書頻度という変数が、文化資本を測る指標として用いることができそうであることをこれまで見てきた。ここでは、表 4 と表 5 に示した文化資本と家庭環境の相関行列からその文化資本としての性質について検討する。

まず、家庭での文化教育と現在の文化資本の関連についてみていく。表 4 より、両親の学歴は子どもの文化資本形成にあまり関係がなさそうである。親からの「本の読み聞かせ」の経験は、子どもの読書（とりわけ文芸書の読書）習慣とはやや相関関係がある一方、クラシック音楽や美術の愛好傾向とは無関係である。逆に「クラシックコンサートに連れていく」という教育は、クラシック音楽と美術の愛好度と相関関係があり、読書頻度とは無関係である。そして、「美術館に連れていく」という教育は、読書、クラシック音楽聴取、美術鑑賞のいずれにも影響を与えているようだが、読書習慣への影響は相対的に弱い。

表 4：読書頻度と文化的家庭環境の相関係数

	父親の学歴	母親の学歴	読み聞かせ	クラシック連れていく	美術館連れていく
文芸書	-0.019	-0.015	.166**	0.018	.123**
文芸・専門	0.022	0.033	.163**	0.049	.198**
全ジャンル読書	-0.007	-0.015	.142**	0.072	.186**
クラシック聴取	.109*	.164**	0.085	.380**	.249**
美術鑑賞	0.057	0.047	0.072	.245**	.314**

**．相関係数は 1% 水準で有意 *．相関係数は 5% 水準で有意

続いて、表 5 より出身家庭の文化的資産（客体化された文化資本）と現在の文化資本の関係をみていく。「実家の本の冊数」は、読書頻度ともやや相関があるものの、クラシック音楽聴取との相関関係のほうが強い。同様に「文学全集」の有無は、読書頻度よりもクラシック音楽聴取や美術鑑賞と強く相関している。これらの結果は、素朴な予測に反し、一見読書と直接関係がありそうな実家の資産が、子どもの現在の読書頻度よりもクラシック音楽聴取や美術鑑賞の度合いと強く関係していることを示すものだ。また、「百科事典」や「美術品・骨董品」は文化資本形成とほとんど関係がないといえる。

表 5：読書頻度と実家の文化的資産の相関係数

	実家の本の冊数	文学全集	百科事典	美術品・骨董品	学習机
文芸書	.140**	0.028	0.010	-0.055	0.011
文芸・専門	.168**	.105*	0.020	-0.016	0.009
全ジャンル読書	.146**	.113*	0.078	0.072	-0.026
クラシック聴取	.240**	.193**	.104*	0.080	0.001
美術鑑賞	.138**	.177**	0.033	0.076	-0.058

**：相関係数は 1% 水準で有意 *：相関係数は 5% 水準で有意

4 考察

以上の分析から、読書頻度の文化資本指標としての妥当性については次のことがわかった。読書の頻度という変数は、「文芸書」といった一つのジャンルのみで見れば、いずれのジャンルも文化資本の指標としては妥当性が弱いといえる。しかし、全てのジャンルにおける読書頻度を合計した変数であれば、文化資本の指標として有効であると思われる。つまり、ジャンルを総合するという条件のもとで仮説 1 は支持できるだろう。ただし、文化資本同士の相関に着目すれば、読書習慣の文化資本としての妥当性は、他の文化資本（クラシック鑑賞、美術鑑賞）に比べ、相対的に低い。

このことは、「はじめに」で述べた橋本（1988）の評価などと符合しているといえる。そして、読書に関する変数を文化資本の指標として用いる際には、読書趣味の有無やジャンル別での読書頻度（量）では恐らく不十分であり、全ての書籍ジャンルでの読書頻度（量）を変数として用いることが重要であることを示せた。全ジャンルの読書頻度は、多くの場合で単一ジャンルの読書頻度や文芸書・専門書の読書頻度よりも、文化資本の指標として妥当性が高い。このことから、文化資本の保有者の読書傾向は特定のジャンルに捕らわれない「雑食的」なものである可能性がある。そして、先行調査では「文学や歴史の本を読む」といった質問が、読書文化資本の指

標として用いられることが多々あったが、このようなジャンルを限定した質問文では不十分だといえるかもしれない。

また、上述のように全ジャンルでの読書頻度を文化資本の指標の一つとみなした上で、その文化資本としての性質を家庭環境との関連で検討し、次のようなことが明らかになった。まず、クラシック音楽のコンサートや美術館へ連れて行くという高度に文化的な教育との相関はクラシック聴取や美術鑑賞と弱くない相関があり、文化資本の再生産が行われていることが伺えるが、こういった文化教育と読書頻度との相関は相対的に弱い。さらに、「実家の本の冊数」や「文学全集」といった出身家庭の客体化された文化資本は、一見すると読書頻度に直接的な影響を与えそうにも思えるが、実際には読書頻度よりもクラシック聴取や美術鑑賞との間に相関関係を持つ。

こうした結果から、両親の文化資本は（たとえそれが読書に関するものであっても）、クラシック聴取や美術鑑賞といった子どもの文化資本へ継承される一方、読書習慣の形成にはあまり参与しないと考えられる。つまり、読書習慣を文化資本の一つとみなすならば、それは「相続された文化資本」というよりも「獲得された文化資本」としての性質を持つといえるだろう。これは片瀬（2004）の研究結果と符合する。ただし、「読み聞かせ」教育と読書頻度の間に若干の相関関係がみられたことから、読書頻度が完全に「獲得」されたものであるともいえない。

この「獲得」された文化資本としての読書習慣という概念は、竹内（2003）による教養主義についての議論を援用すればより理解しやすいかもしれない。彼によると、かつての教養主義は、農村出身者による都市的・西洋的なブルジョア文化への憧れと葛藤によって支えられていた。このような枠組みで分析結果を解釈すれば、文化資本の低い家庭の出身者が意識的・主体的に文化資本を獲得する手段として読書＝教養が用いられるという図式は、今日においても成り立つかもしれない。ただし、大学という空間においてこのような志向が特に盛んであるかについてはさらなる研究が必要であろう。

本稿では、読書頻度の文化資本指標としての妥当性およびその性質の検討を行った。その結果、仮説1および仮説2は支持されたといえる。そして、これまで文化資本としての位置づけが曖昧であった読書習慣について、指標としての妥当性や性質をある程度明らかにすることができたといえるだろう。

ただし、本稿で明らかにした結果が、どの程度社会全体や大学生全体について当てはまるかを知らするためには、さらに調査を重ねる必要があるだろう。文化＝教養と結びついた読書という観念は大学という空間において特に強調される可能性があり、さらにそのような観念はある大学固有の学風等（教養主義的エートスやエリート意識）の影響を受ける可能性があるからだ。

文献

片瀬一男、2004、「文化資本と教育アスピレーション——読書文化資本・芸術文化資本の相続と獲得」『人間情報学研究』9、15-29

竹内洋、2003、『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』中公新書

橋本健二、1988、「文化評価の構造と文化の階層性」『静岡大学教養学部研究報告（人文・社会
篇）』24(2)、151-166

演劇鑑賞者の文化的傾向の検討

荒井 佑介

1 はじめに

1.1 演劇の現在と研究の意義

世界中で古くから愛されてきた娯楽である演劇は現在、かつてほどの存在感が薄れてきているといわれている。娯楽の多様化はもちろんのことだが、インターネットの発達とともに娯楽を時間・場所の制約なしに無尽蔵に楽しむことが可能になったのが最大の理由であろう。わざわざ劇場まで足を運び、チケット代を払って決められた時間に上演されるプログラムを見るという演劇の楽しみ方は、いつでもどこでも楽しめるネットの娯楽とは対照的だ。

しかし、現在演劇は衰退するどころか再び脚光を浴びようとしている。それは上で述べたように演劇鑑賞が時間・空間の制約を受けるものであることに関係している。いつでも誰でもどこでもアクセスでき理論的には無限に複製可能なネットの娯楽とは違い、演劇はステージやホール、公園など限られた場所でしか上演されず、それを見ることができるのはチケットを持っている人だけだ。そのことが、客に「これを楽しめるのは自分たちだけだ」という特別感を与える。また演劇は生身の役者が演技するので、同じものを再現するということは厳密には不可能だ。これもまた、演劇の唯一無二性を高める効果を持つ。このように、ネットの発達によってかえって演劇の『場所・空間の限定性』が価値を持つようになったのである。

これは決して筆者の個人的推測ではない。現在アニメやゲームのキャラクターに扮した役者がステージで歌や踊りを披露する『2. 5次元舞台』が次々に公演され、女性を中心に多くのファンを獲得している。鈴木（2011）は漫画『テニスの王子様』のミュージカルが女性ファンの根強いファンを獲得していることに触れ、「現代演劇の枠組みの中で、一つの『世界』を作り出しているとみることができないだろうか。」と述べている。また、2018年の紅白歌合戦にブラウザゲーム『刀剣乱舞』のキャラクターに扮した役者たちが出演したのも記憶に新しい。演劇という娯楽の経済的・文化的価値が高まっていることの証左といえよう。将来ネットが発達するにしたがって演劇の価値は今以上に高まっていくと予想される。そのため、演劇を鑑賞する人々の傾向を調査することには大きな意義があると私は考える。現在どのような人々が演劇を見ており、どのような人々が演劇を見ていないかを分析することは演劇鑑賞者数のさらなる拡大に役立つであろう。

1.2 本論文の仮説

調査にあたって演劇を鑑賞する人々の傾向について仮説を立てることにする。劇団四季など大型劇団、地方劇団、オペラなど従来型の演劇を鑑賞する人は幼少期より文化的なものに囲まれて

育ち、そうしたもののへの関心が高いと予測される。また昨今人気を増している 2.5 次元舞台の演劇を鑑賞する人はアニメ文化への造詣が深いと考えられる。よって今回検証する仮説は 2 つである。

仮説 1：演劇を鑑賞する人はアニメ文化への関心が高い。

仮説 2：演劇を鑑賞する人は幼少期から文化的なものに関心が高い。

2 使用するデータと変数

本研究で用いるデータは、社会学実習の授業で行った調査を基にしている。太郎丸博先生の指導の下で製作した質問紙『文化活動に関する調査』を 2018 年 10 月に京大生 474 人に回答してもらい、データを集計し適切なクリーニングを施したうえで分析に使用した。

分析に当たって変数の値に変化を加えている。「あなたは以下の文化活動をどれくらいの頻度で行いますか」という質問の『演劇を観に行く』という項目で「週に一回以上」には 52、「月に数回ぐらい」には 24、「年に数回ぐらい」には 8、「ほとんど行かない」には 0.2 を当てはめている。これは各選択肢ごとに演劇を観に行く回数を年単位で換算したものである。数値の割り当てが強引であるとの批判もあるかもしれないが、より正確な分析のためにこの数値を採用する。

3 分析

3.1 仮説 1 の検証

「演劇を観に行く人はアニメ文化への関心が高い」という仮説を検証する。演劇を観に行く頻度がどのような要因に影響されるのか重回帰分析で検討する。

従属変数

演劇を観に行く頻度を尋ねている。選択肢は「1、週に一回以上」「2、月に数回ぐらい」「3、年に数回ぐらい」「4、ほとんど行かない」である。これらに 2 節で述べた数値を当てはめて変数としている。

独立変数

独立変数には、各音楽ジャンルのコンサートに行く頻度を用いた。J-POP、洋楽ポップ、邦楽ロック、洋楽ロック、ジャズ、クラシック、アニソンに対して「一月に一回以上」「半年に一回程度」「一年に一回程度」「数年に一回程度」「行ったことがない」の中から頻度を答えてもらった。正確性を期すために「一月に一回以上」は 12、「半年に一回程度」は 2、「一年に一回程度」は 1、「数年に一回程度」は 0.4、「行ったことがない」は 0 に値を変換した変数を用いた。

表 1 が重回帰分析の結果である。

表 1：演劇を観に行く頻度の回帰分析

	係数	標準誤差	
(定数)	1.166	0.224	***
J-POP	0.617	0.119	**
洋楽 pop	-1.954	0.419	***
邦楽ロック	0.215	0.118	**
洋楽ロック	-0.299	0.266	**
ジャズ	0.614	0.192	***
クラシック	0.935	0.131	**
アニソン	2.028	0.273	***
決定係数	0.331		
N	461.000		

*** p < .001, ** p < .01, * p < .05

表 1 を見ると、アニソンのコンサートに行く頻度がその他の音楽ジャンルと比較して有意な効果を示しておりアニソンコンサートに行く人ほど演劇を観に行く頻度が高いことがわかる。またクラシックコンサートに行く頻度も有意な効果を示しており、クラシックコンサートに行くという文化的素養の高い活動をする人ほど演劇を観に行く頻度が高いこともわかる。しかし、音楽のコンサートに行くという行為自体が演劇に行く頻度に影響を与えるのではないかという疑問があるだろう。確かに、コンサートに行くことと演劇を観に行くことは、ステージやホールに足を運ぶという点では性質的に等価である。音楽のコンサートによく行く人は行為的性質の近い演劇にもよく行くかもしれない。そこで、音楽コンサートに行くよりも敷居が低い「音楽を聴く」という行為に基づいて演劇鑑賞者の文化的傾向を重回帰分析する。よって従属変数は変えず、独立変数を以下のように変更する。

独立変数

各音楽ジャンルを聞く頻度を用いた。J-POP、洋楽ポップ、邦楽ロック、洋楽ロック、ジャズ、クラシック、アニソンに対して「よく聞く」「ときどき聞く」「あまり聞かない」「まったく聞かない」の中から答えてもらった。

表 2 が重回帰分析の結果である。

表 2：演劇を見に行く頻度の重回帰分析

	係数	標準誤差	
(定数)	6.500	1.252	***
J-POP	0.574	0.290	*
洋楽 POP	-0.607	0.273	***
邦楽ロック	0.012	0.252	***
洋楽ロック	0.218	0.313	***
ジャズ	-1.077	0.325	***
クラシック	-0.596	0.269	***
アニソン	0.292	0.224	**
決定係数	0.090		
N	463.000		

*** p < .001, ** p < .01, * p < .05

表 2 を見ると J-POP を聞く頻度とアニソンを聞く頻度が有意な効果を示しており、J-POP やアニソンを聞く人ほど演劇に行く頻度が高いことがわかる。よって仮説 1「演劇を鑑賞する人はアニメ文化への関心が高い」は正しいとわかる。

3.2 仮説 2 の検証

仮説 2「演劇を鑑賞する人は幼少期から文化的なものへの関心が高い」を検証する。

そのためには、演劇を観に行く頻度が高い人がどれほど幼少期に文化資本を示すものにふれているかを調べてみればよい。具体的には、「あなたが 15 歳だったころ（中学卒業時）、お宅には次にあげるもののうち何がありましたか。あてはまるものをいくつでも選んでください。」という質問を行い、「1 持ち家」「2 田畑・山林」「3 自分専用の部屋」「4 パソコン・ワープロ」「5 電話（携帯電話・PHS を含む）」「6 応接間」「7 文学全集」「8 ピアノ」「9 一眼レフ・ビデオカメラ」「10 DVD レコーダー（テレビ内蔵型含む）」「11 テレビ」「12 百科事典」「13 自家用車」「14 美術品・骨董品」「15 ゲーム機（携帯ゲーム機を含む）」「16 別荘」「17 学習机」「18 オーディオ機器」の中から当てはまるものをすべて選んでもらう。演劇を観に行く頻度と、これらの文化資本を示すもの所有の有無との相関をとったのが次の表である。

表 3：演劇を観に行く頻度と文化資本指標との相関行列

	演劇に行く
演劇に行く	1.000
持ち家	0.090
田畑・山林	.136**
自分専用の部屋	0.019
パソコン・ワープロ	-0.062
電話（携帯電話・PHS）	0.022
応接間	0.046
文学全集	.112*
ピアノ	.111*
一眼レフ・ビデオカメラ	-0.010
DVD レコーダー（テレビ内蔵型含む）	-0.013
テレビ	-0.072
百科事典	0.060
自家用車	-0.049
美術品・骨董品	0.060
ゲーム機（携帯ゲーム機含む）	-.098*
別荘	.120**
学習机	-0.067
オーディオ機器	0.065

表 3 を見ると、演劇を観に行く頻度と田畑・山林、文学全集、ピアノ、別荘の所持には高い相関関係があることがわかる。これらの文化資本指標に共通しているのは経済資本・文化資本とともに高い階層(地主・社長など)が所有しているものであることだ。逆に、オーディオ機器やカメラなど比較的手に入りやすい文化資本はあまり高い相関を示していない。これらのことから考えると、仮説 2 の「演劇を鑑賞する人は幼少期から文化的なものへの関心が高い」は半分正しく半分間違っているといえる。より正しくは、「演劇に行く頻度が高い人ほど経済資本・文化資本ともに高い」ということがいえる。

4 まとめと考察

今回の分析によって演劇を観に行く頻度が高い人はアニメ文化への親和性が高い、そして演劇を観に行く頻度が高い人は経済資本・文化資本ともに高いという 2 つの結論を出すことができる。しかし今回の分析には不十分な点がある。それは、2.5 次元舞台に代表される現代型商業演

劇を好む層とオペラなど従来的な演劇を好む層とともに「演劇に行く頻度が高い人」として扱ってしまった点だ。前者と後者の間には文化的傾向・経済資本とともに大きな違いがあることは想像に難くない。今回のアンケートではその質問項目の性質上両者を分けて分析することは不可能だった。演劇を好む人々をジャンルごとに分割し、それぞれについてより詳しい分析を行えば現代において演劇をどのような人々が好んでいるかについてより詳細に知ることができるに違いない。「いつでも・どこでも」の娯楽があふれる中で、「今・ここ」という特別な価値を創出できる演劇はこれから重要度を増していくだろう。今回のような分析をさらに発展させていくことで、さらに多くの人に演劇の魅力を届ける助けになることを私は確信している。

文献

鈴木国男、2011、「現代日本演劇における世界の構築(2)：ミュージカル『テニスの王子様』」『共立女子大学文芸学部紀要』57、1-15

美術鑑賞に親和的な文化活動

—京大生へのアンケート調査に基づいて—

今村 光一郎

1 はじめに

近年、学校・美術館を含めた美術教育の領域で、「鑑賞教育」、言い換えれば作品の鑑賞を楽しむスキルや志向の育成に焦点を当てた実践がブームになり、継続されている（赤木・森・山口 2006）。しかしながら、鑑賞習慣は一朝一夕に身につくものではなく、幼少期以来の文化実践の蓄積が、教育課程を経てからの美術鑑賞の程度を左右する。美術鑑賞ははたして、どのような人びとによって受容されている文化実践なのであろうか。内閣府の平成 28 年の「文化に関する世論調査」によれば、「美術（絵画、版画、彫刻、工芸、陶芸、書、写真など）」を直近 1 年間に「鑑賞したことがある」と答えた者の割合は 22.5%であった。これは中長期的に見て微減傾向であり、とりわけ若年層に限れば、若者の美術館離れが指摘される例もある。鑑賞教育が青年期以後の人びとにとってどのように影響しており、美術愛好者がどのように分布しているのかを分析し、より魅力的な美術鑑賞実践の方策を探っていくことは有意義な学問的实践であろう。

筆者はまた、美術館訪問が他の文化実践との親和性を示すものであって、それら文化実践の受容が美術鑑賞習慣に効果的でないと推論する。美術館は静謐な空間であり、館内は無音あるいはクラシック音楽を基本とした優美なバックグラウンドミュージックが流れている場合が多い。そうした空間である美術館を頻繁に訪れることは、静謐で優美な文化活動に日常的に触れている、あるいは触れた経験があることと因果関係があるのではないだろうか。本稿ではこれを仮定して、美術鑑賞愛好者は静謐で優美な音楽を日常的に聴取しており、かつ幼年期にも静謐な文化実践に親しんでいるために、青年期以降に静謐な空間である美術館に足を運ぶことを明らかにする。

以上の現代の状況と所感を踏まえ、どのような層が美術鑑賞に対して積極的であり、鑑賞教育の成果 —すなわち鑑賞教育を施されたために好んで美術鑑賞を行うという成果が得られやすいのか— を分析することを本稿の射程とする。この目的意識から筆者は、以下の仮説の検証を試みる。

[仮説 1] 大学生のうち、女子大学生は男子大学生よりも頻繁に美術鑑賞を行っている。

[仮説 2] 大学生では、文系大学生と理系大学生の間で美術鑑賞の頻度に大差はない。

[仮説 3] ジャズまたはクラシックに親しむ大学生は、美術鑑賞頻度が高い傾向にあり、これらの音楽視聴は美術鑑賞に親和的である。

[仮説 4] 男女および所属学部（研究科）のいずれにおいても、学齢期までの美術鑑賞経験が多いほど、現在の美術鑑賞頻度は高くなる。

本稿は以上の仮説を順に検証し、どのような人びと——本稿の調査の特性上、大学生のみの分析になる——が美術鑑賞に親和的であるのかを明らかにする。

2 データと変数

2.1 データ

今回用いたデータは京都大学の学部生および大学院生を対象として行った「文化活動に関する意識調査」から得られたものである。有効サンプルサイズは 465 であった。

2.2 従属変数

美術館での美術鑑賞については、「週に一回以上」「月に数回ぐらい」「年に数回ぐらい」「ほとんど行かない」の四択で尋ねた。このデータの加工については、1 年あたりの文化活動の実践回数に換算し、適切な間隔にすべくコーディングを施した。すなわち、「週に一回以上」を 60、「月に数回ぐらい」を 20、「年に数回ぐらい」を 5、「ほとんど行かない」を 0.5 とコーディングした。後述の 3.1、3.3 の分析に際してはこのコーディングを用いている。一方、3-2 の音楽視聴頻度との関係を用いる分析の際には、美術鑑賞に対する積極的な層と消極的な層の画定を厳格に行い分析する意図から、月に数回以上の層（N=28）を積極的な層=1、年に数回以下の層（N=437）=0 とコーディングした。

2.3 独立変数

現在の属性を表す独立変数については性別、所属学部（研究科）を用いた。性別については男性を 1、女性を 2 としており、所属学部（研究科）については筆者が「学部入試時点での文系／理系」の区別を施した。性別、所属学部（研究科）ともに、無回答や区別の難しい回答については欠損値として扱った。

現在の音楽視聴習慣の指標としては、「あなたは以下のような音楽を好んで聴いていますか」という問いを用いた。これに対し、「よく聞く」「ときどき聞く」「あまり聞かない」「まったく聞かない」の 4 択で回答を求め、順に 4, 3, 2, 1 とコーディングを行った。後述の 3.2 では、「ジャズおよびクラシック」と「ポップス・ロック・アニソン」の 2 類型に分けて統計分析を行っている。ここではコーディングした変数の和を求め、分類の前者では変数を 2 で割った商を（ジャズとクラシックの 2 変数を用いたことによる）、また分類の后者では変数を 5 で割った商を（J-POP、洋楽 POP、邦楽ロック、洋楽ロック、アニソンの 5 変数を用いたことによる）、それぞれ算出している。

また、過去の文化実践が現在の美術鑑賞に与える影響について探るべく、過去の文化実践についても調査を行った。「あなたが 15 歳までに、次のようなことをご両親にしてもらったことがあ

りますか。」という問いに「よくある」「ときどきある」「あまりない」「まったくない」の4択で回答を求め、順に4, 3, 2, 1とコーディングを行った。対象とした文化実践の内容は、「美術館・博物館に連れて行く」「勉強を教えてもらう」「本の読み聞かせ」「山登りに連れて行く」「地域のイベントに連れて行く」の5項目であった。

3 結果

3.1 美術鑑賞頻度と回答者の属性の関係

まず、美術鑑賞頻度と回答者の属性の関係についての結果を明らかにする。性別と美術鑑賞頻度の相関係数を求めると、0.112の値が5%の有意水準で得られ、先述のコーディングのため、女子学生の方が男子学生よりも美術鑑賞を行う頻度が高いということが明らかであった。(表1) 続いて、学部(研究科)との間の相関係数も同様に分析した。-0.151の値が1%の有意水準で得られ、先述のコーディングより、理系であることが美術鑑賞頻度と負の相関にあることが明らかになった。(表2) 更に、その学部(研究科)の文理別による美術鑑賞頻度の平均値をエラーバー表示したのが図1である。文系が年間平均3.8回美術鑑賞を行う一方、理系は平均2.3回の鑑賞にとどまる。表2の結果を裏づけするエラーバー表示になっている。この結果は[仮説1]を裏付け、大学生のうち、女子大学生は男子大学生よりも頻繁に美術鑑賞を行うことが如実に示されている。一方[仮説2]は反証され、美術鑑賞は理系よりは文系大学生の間で受容されている文化実践であって、両者の間では隔たりがあることが確認された。

表1：美術鑑賞頻度と性別の相関係数

		性別
美術鑑賞頻度	Pearson の相関係数	.112*
	有意確率(両側)	0.016
	度数	463

* 相関係数は 5% 水準で有意(両側)

表2：美術鑑賞頻度と学部(研究科)の文理との相関係数

		美術鑑賞頻度
学部・文理その他	Pearson の相関係数	-.151**
	有意確率(両側)	0.002
	度数	438

** 相関係数は 1% 水準で有意(両側)

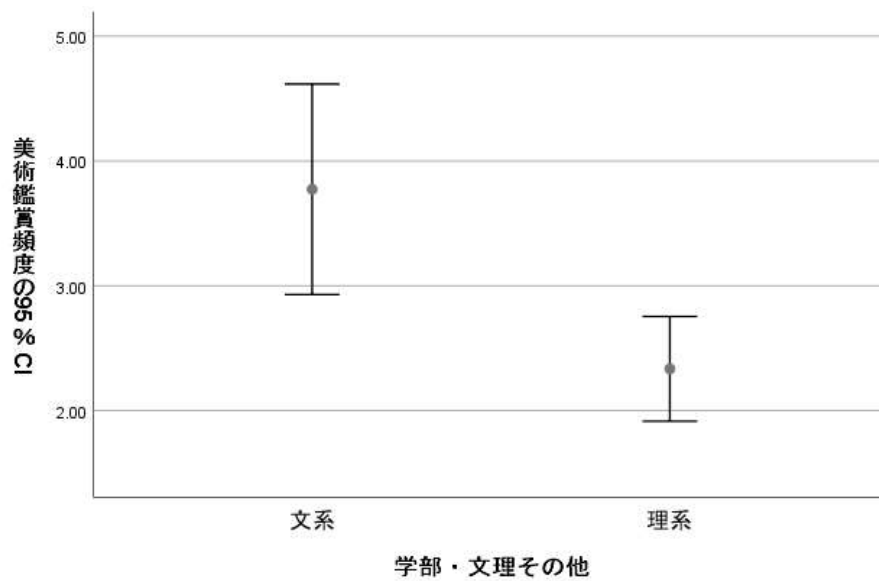


図 1：学部(研究科)の文理別による美術鑑賞頻度の平均値（エラーバー表示、95%信頼区間）

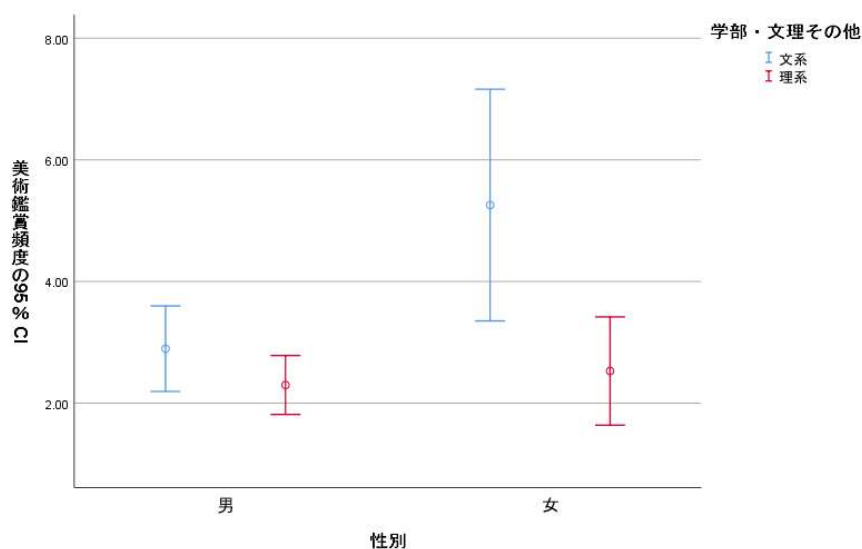


図 2：性別および学部（研究科）別による美術鑑賞頻度の平均値（エラーバー表示、95%信頼区間）

最後に[仮説 1][仮説 2]の総括として、図 2 で性別および学部(研究科)別による美術鑑賞頻度の平均値を表した。表 1, 2 および図 1 の結果を総括した図になっていることが確認できる。この図から新たに明らかになるのは、女子学生の間での美術鑑賞頻度の文理間の隔たりが男子学生と比して大きいこと、文系学生の間での美術鑑賞頻度の隔たりは男子学生の方が女子学生より大きいこと、の二点である。

3.2 美術鑑賞頻度と音楽視聴嗜好の関係

続いて、現在の音楽視聴の習慣との関係をまとめる。まず、静謐で美術鑑賞に親和的な音楽と位置づけたジャズおよびクラシック視聴が、恣意的な音楽カテゴライズをもとにしていることは否めない。そこで、邦楽ロック、洋楽ロック、ジャズ、クラシックの4カテゴリーを、美術鑑賞頻度とともに主成分分析にかけ、結果を見る。なお、q5q2は美術館に行く頻度、q2t3、q2t4、q2t5、q2t6はそれぞれ、邦楽ロック、洋楽ロック、ジャズ、クラシックの視聴頻度を表している。2次元の結果（図3）を見ると、第2成分までの累積説明率は62.094%で、第1から第3主成分の初期固有値は、1.89、1.12、0.96であった。また、q2t3とq2t4、q2t5とq2t6がそれぞれ近く、この二タイプ間の間には隔たりがあることが明らかである。

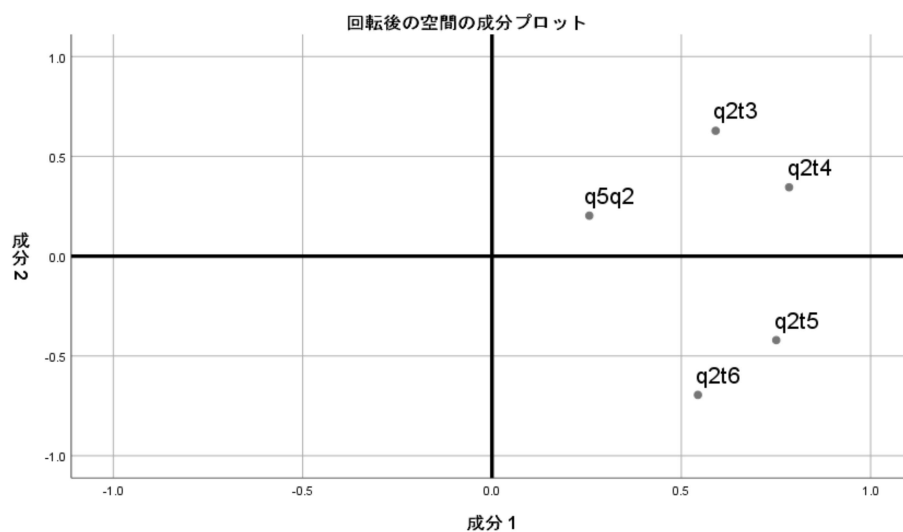


図3：美術鑑賞頻度と4カテゴリーの音楽視聴頻度との主成分分析

以上の主成分分析から、筆者の恣意的なカテゴライズであった「ジャズおよびクラシック」と「その他音楽」の構図が妥当しうるものであることが明らかになった。これを根拠に、美術鑑賞頻度と音楽視聴の嗜好の相関を見ていく。

先述のように、美術鑑賞に対する積極的な層と消極的な層の画定を厳格に行い分析する意図で、回答者を二層化するコーディングを施した。ジャズおよびクラシックの視聴頻度との相関係数は1%有意水準で0.299と強い正の相関を示した。一方、邦楽・洋楽を含むポップス・ロック・アニソンの視聴頻度との相関係数は0.058であり、有意ではなかった（表3および表4）。これら二つの相関の分析から、ポップス・ロック・アニソンの視聴頻度が美術鑑賞頻度と相関関係をもたないのに対し、ジャズおよびクラシックの視聴頻度が美術鑑賞の習慣に正の相関をもつことが明らかになった。

表 3：美術鑑賞頻度とジャズおよびクラシック視聴の相関係数

	ジャズおよびクラシック視聴
Pearson の相関係数	.299**
有意確率（両側）	0.000
度数	
** 相関係数は 1% 水準で有意（両側）	

表 4：美術鑑賞頻度とポップス・ロック・アニソン視聴の相関係数

	ポップス，ロックおよびアニソン視聴
Pearson の相関係数	0.058
有意確率（両側）	0.209
度数	465

3.3 過去の美術館訪問経験が現在の美術鑑賞に与える影響

続いて、男女および学部（研究科）ごとに、現在の大学生の美術鑑賞を促す過去の文化実践について重回帰分析を行う。「15 歳時点までに親にしてもらったこと」のうち 5 項目を強制投入法で重回帰分析にかけ、文系男子、文系女子、理系男子、理系女子の 4 タイプでそれぞれ有意となる文化実践を探った。結果は以下の表 5 から表 8 の通りである。「美術館・博物館に連れて行く」という両親の働きかけが、文理・男女を問わず現在の美術鑑賞に正の効果を与えていることが確認できる。それぞれ正の標準化係数を示しているが、その値は 0.3 前後を示す文系男子と理系女子に対し、0.2 未満にとどまる文系女子および理系男子、という二極化が見られる。この傾向は本稿末尾の考察で再度議論の俎上に載せたい。また、「勉強を教えてもらう」ことは、文系女子では 10%の有意水準で負の効果があり、「地域のイベントに連れて行く」ことは、理系男子では 5%の有意水準で正の効果がある。さらに、「本の読み聞かせ」をしてもらうことは、理系女子では 5%の有意水準で負の効果がある。

表 5：文系男子の美術鑑賞頻度の重回帰分析（ $R^2=.135$ ）

	標準化係数	標準誤差	t 値
（定数）		1.562	-1.156
美術館・博物館	0.282***	0.377	2.84
勉強	0.02	0.376	0.194
読み聞かせ頻度	-0.042	0.413	-0.419
山登り頻度	0.129	0.371	1.339
地域のイベント頻度	0.106	0.374	1.128

*** $p < .01$, ** $p < .05$, * $p < .1$

表 6：文系女子の美術鑑賞の重回帰分析 ($R^2=.089$)

	標準化係数	標準誤差	t 値
(定数)		4.448	2.558
美術館・博物館	0.19*	1.11	1.429
勉強	-0.24*	1.025	-1.977
読み聞かせ頻度	-0.034	1.148	-0.247
山登り頻度	-0.056	0.93	-0.448
地域のイベント頻度	-0.133	1.264	-0.994

***p<.01,**p<.05,*p<.1

表 7：理系男子の美術鑑賞の重回帰分析 ($R^2=.072$)

	標準化係数	標準誤差	t 値
(定数)		0.988	0.477
美術館・博物館	0.17**	0.289	1.996
勉強	0.1	0.272	1.187
読み聞かせ頻度	-0.089	0.313	-1.002
山登り頻度	-0.132	0.303	-1.618
地域のイベント頻度	0.177**	0.272	2.327

***p<.01,**p<.05,*p<.1

表 8：理系女子の美術鑑賞の重回帰分析 ($R^2=.242$)

	標準化係数	標準誤差	t 値
(定数)		2.251	1.911
美術館・博物館	0.311**	0.471	2.16
勉強	-0.084	0.438	-0.611
読み聞かせ頻度	-0.34**	0.492	-2.59
山登り頻度	0.13	0.462	0.891
地域のイベント頻度	-0.032	0.468	-0.242

***p<.01,**p<.05,*p<.1

4 結果のまとめと考察

4.1 結果のまとめ

本稿では、美術鑑賞を行う者にとって、属性や過去の経験が正負含めどのような効果をもつものであるかということ、共音大学の学生へのアンケート調査を元に検討してきた。まとめる

と、以下ようになる。男子学生と女子学生では、女子学生の方が美術鑑賞の頻度が高く、また男女ともに文系学生の方が理系学生よりも美術鑑賞の頻度が高い。現在の音楽の嗜好との相関関係では、筆者が恣意的に提示した「ジャズおよびクラシック」の視聴が、他の音楽分野と別のカテゴリーに分類することが適切であり、かつこれらの視聴が美術鑑賞との間に正の相関関係をもつことが確認された。更に、現在の美術鑑賞の文化実践に対して、過去の美術館・博物館を訪れた経験がもたらす影響は、男女および文理でカテゴリー化した4つの学生タイプにおいていずれも正の影響があったが、その程度は文理および男女の間で隔たりが見られた。

4.2 考察および課題

3.3 では、過去に美術館・博物館に連れて行ってもらった経験が、現在の美術鑑賞習慣に正の影響を持つことが、正の標準化係数が示されることで明らかになったが、その値は0.3前後を示す文系男子と理系女子に対し、0.2未満にとどまる文系女子および理系男子、という二極化が見られる、と述べ、更に前者では説明力を表す R^2 値が後者よりも大きいことを指摘した。この統計分析から考察を行うと、以下ようになる。文系男子と理系女子とでは、その美術鑑賞頻度の多寡は、過去の美術鑑賞経験によるところが大きい。 R^2 値が大きく、重回帰分析の説明力が大きいことから、彼ら／彼女らの現在の美術鑑賞の実践は、多分に過去の美術鑑賞教育の程度に拠っている、という指摘が可能になる。翻って図2と照合すると、興味深い点が見られる。文系男子と理系女子は美術鑑賞頻度において平均値が近く、頻度の高い文系女子、低い理系男子と比して中程度のグループである。過去に受けた美術教育の習慣を内面化する形をとり、学齢期までの美術館訪問経験の多寡が、現在の美術鑑賞習慣にダイレクトに影響するとみてよいだろう。その一方で、文系女子と理系男子では、上述のような傾向は弱まることが窺える。根拠としては二点で、正の値を示す標準化係数が比較的小さいことと、重回帰分析の説明力を示す R^2 値が小さいことである。前者からは、文系男子と理系女子に見られたようなダイレクトな影響は弱まる。想定される動きを挙げるとすれば、美術鑑賞頻度が際立って高い文系女子は、過去の鑑賞教育的な習慣の多寡に関わらず、大学在学中に美術館に足を運ぶようになるのかもしれない。また、理系男子も専門分野との関連性の乏しさゆえに、過去の鑑賞教育的な習慣の多寡に関わらず、美術館から足が遠のくのかかもしれない。こうした4種類の違いが見られたことは、更なる因果の考察がなされる余地を残しているとみてよいだろう。

最後に本稿の課題を、一点示して結びとしたい。男女および学部（研究科）の文理と美術鑑賞の因果関係の論理的妥当性についてである。今回の統計分析では4類型に大学生を当てはめることで3-3のような指摘を行い、統計的に有意な結果を得るにいたった。しかしながら、過去の美術鑑賞、鑑賞教育の影響が当人の進学の学部と与える影響として有意である、という設定には無理がある。芸術学や美術史の研究が文学部をはじめとしたいわゆる「文系受験」を課す学部（研究科）に集中していることを部分的説明とできるかもしれないが、文系男子や理系女子の学生に

とって過去の美術館訪問経験が効果的である、というのは論理性に乏しく、擬似相関になっている潜在可能性に満ちている。

文献

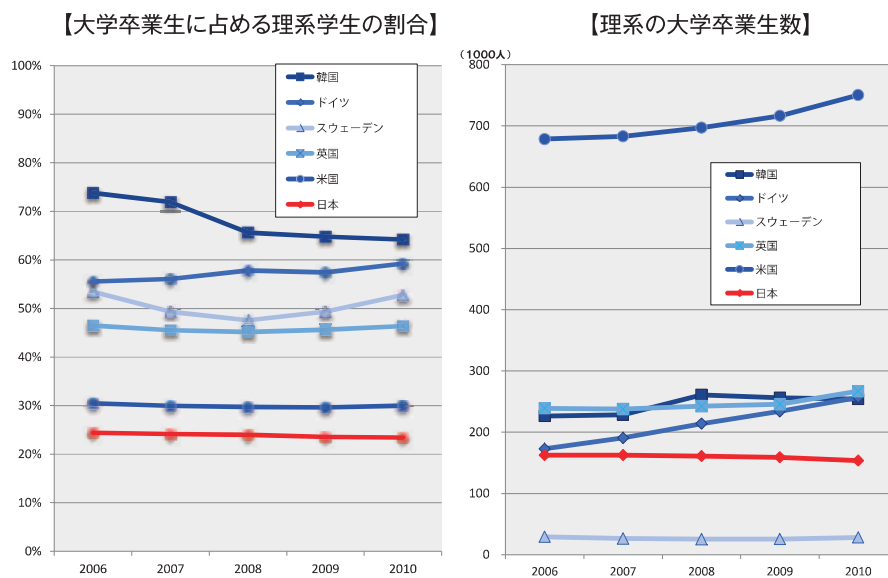
赤木里香子・森弥生・山口健二, 2006, 「美術鑑賞教育のタイポロジー」『美術教育』289: 8-15.
文化に関する世論調査 (<https://survey.gov-online.go.jp/h28/h28-bunka/2-1.html>, 2019/01/09 最終確認)

理系の女性と文化資本の関係性

高垣 嶺

1 はじめに

IT 化が進む現在、日本では理系の人材不足が問題となっている。経済産業省によれば、2030 年には 59 万人不足するという。実際に、他国と比較すると、日本に理系の大学生の割合は非常に低く、数でも下位である。



(出典) 総務省平成 25 年版情報通信白書

なぜ理系の人材が少ないのか。日本では現在、文系が比較的理系よりも多い。これには、大学の理系学部を設置することが難しいことや、高校教育の過程で数学、理科を苦手とする学生が増えるからといった様々な理由が考えられる。私は、この問題の 1 つの大きな原因が、女性の大半が文系を選択することにあると考えた。日本で多くの女性が文系を選択する理由は、「女性＝文系、家政」、「理系＝男性」という思い込みがあるからだという。

では、どのような女性が、京都大学の理系学部に入るのか。京都大学理系女子にはどのような傾向があるのか、を調査しようと思う。今回は、文化資本が彼女たちを理系に導いたのではないだろうかという仮定に基づいて、「理系を選択する女子であれば、文化資本は高い」という仮説を検証してみたいと思う。

2 方法

2.1 独立変数

文化資本の高さを示すものとして、一つの指標だけでは不十分と考えたので、まず、文化資本の尺度として使う音楽のジャンルを、文化資本の尺度としてよく用いられる「クラシック」音楽の他にも決定する。用いる変数は次の通りである。「あなたは以下のような音楽を好んで聴いていますか」という質問で、「J-POP」「洋楽 POP」「邦楽ロック」「洋楽ロック」「ジャズ」「クラシック」「アニソン」の7つに関して、「よく聞く」「ときどき聞く」「あまり聞かない」「まったく聞かない」の4択で尋ね、それぞれに1～4の数値を割り振っている。「クラシック」音楽とその他6つのジャンルの音楽との相関係数を示したものが、表1である。

表1：クラシック音楽視聴頻度とその他の音楽の視聴頻度の相関

		クラシック
J-pop	Pearson の相関係数	-0.081
	有意確率 (両側)	0.080
	度数	470
洋楽 pop	Pearson の相関係数	.111*
	有意確率 (両側)	0.017
	度数	469
邦楽ロック	Pearson の相関係数	-0.006
	有意確率 (両側)	0.893
	度数	470
洋楽ロック	Pearson の相関係数	.171**
	有意確率 (両側)	0.000
	度数	470
アニソン	Pearson の相関係数	.147**
	有意確率 (両側)	0.001
	度数	470
ジャズ	Pearson の相関係数	.501**
	有意確率 (両側)	0.000
	度数	469

*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。**. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

この表によると、「クラシック」音楽と最も強く相関するのは、「ジャズ」である。「ジャズ」を視聴する頻度を文化資本の高さを示す指標として用いても問題はなさそうである。

音楽だけでも不十分だと考え、その他の文化活動にも用いることができそうな分野についても、調べてみる。用いる変数は次のようである。「あなたは以下の文化活動をどれくらいの頻度で行いますか」という質問で、「演劇を見に行く」「美術館に行く」「映画館に行く」の3つに関して、「週に一回以上」「月に数回ぐらい」「年に数回ぐらい」「ほとんど行かない」の4択で尋ね、それぞれに1～4の数値を割り振っている。これらと「クラシック」の視聴頻度との相関係数を示したものが表2である。

表2：クラシック音楽視聴頻度とその他の文化活動の頻度の相関

		クラシック
演劇	Pearson の相関係数	.249**
	有意確率 (両側)	0.000
	度数	468
美術館	Pearson の相関係数	.237**
	有意確率 (両側)	0.000
	度数	468
映画館	Pearson の相関係数	-0.011
	有意確率 (両側)	0.816
	度数	467

*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。**. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

この表によれば、「ジャズ」程ではないが、「演劇」「美術館」もある程度相関がみられるので、「演劇」「美術館」へ行く頻度も文化資本の尺度として使うことにする。

2.2 従属変数

学部について尋ねる項目は、各学部のコードを用いて表される (例：文学部=1 など)。各学部の度数分布を示したものが表3である。

表 3：各学部の数値分布

		度数	パーセント
	総合人間学部	26	5.6
	文学部	98	20.9
	教育学部	7	1.5
	法学部	62	13.2
	経済学部	25	5.3
	理学部	39	8.3
	医学部	22	4.7
	薬学部	22	4.7
	工学部	99	21.2
	農学部	57	12.2
	文学研究科	2	0.4
	工学研究科	4	0.9
	人間・環境学研究科	2	0.4
	地球環境学堂	2	0.4
	経営管理研究部	1	0.2
	合計	468	100.0

このうち、総合人間学部や人間・環境学研究科などの文系・理系の区別がつかないものは欠損値として排除した。そして、それを文系・理系に分類し、男女別にしたものが表 4 である。

表 4：文系・理系・男女別度数分布

		度数	有効パーセント
有効	文系男子	119	27.5
	理系男子	186	43.0
	文系女子	73	16.9
	理系女子	55	12.7
	合計	433	100.0
欠損値	システム欠損値	41	
合計		474	

京都大学においても理系の女子は少ないことがわかる。

3 調査結果

文化資本の高さを示す変数として、「クラシック」「ジャズ」「演劇」「美術館」を足し合わせた新たな変数「文化資本」を作る。また、高さを示すものであるため、数値を反転させたほうが都合がよいと考えた。文系・理系・男女別の文化資本の高さの平均を示したものが、図1と表5である。

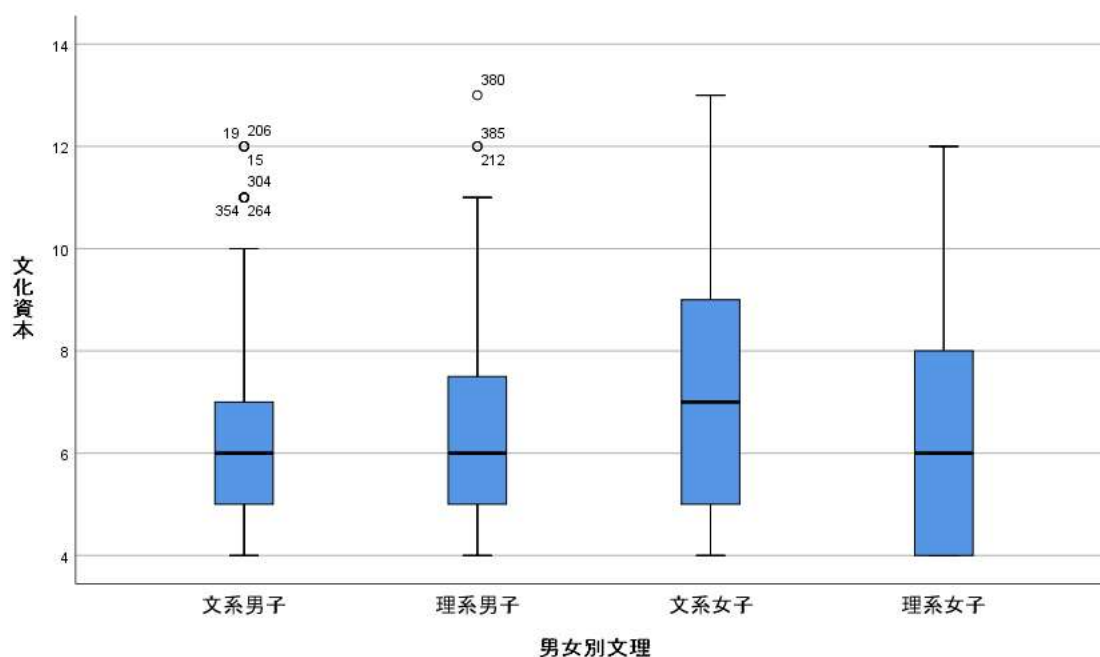


図1：文系・理系・男女別の文化資本の高さ

表5：文系・理系・男女別の文化資本の高さの平均値

男女別文理	平均値	度数	標準偏差	最大値	最小値
文系男子	6.32	118	2.087	12	4
理系男子	6.30	184	2.063	13	4
文系女子	7.03	72	2.136	13	4
理系女子	6.56	54	2.424	12	4
合計	6.46	428	2.139	13	4

予想に反して、7.03と最も平均が高いのは、文系女子であった。図1によると第一四分位数が最も低いのは理系女子である。男子よりも女子のほうが、文化資本が高いということは間違いないさそうである。

では、文系と理系では、文化資本の高さはどうだろう。表 6 がその平均値を示したものである。

表 6：文理別の文化資本の高さの平均

文理	平均値	度数	標準偏差	最大値	最小値
文系	6.58	193	2.115	13	4
理系	6.34	240	2.149	13	4
合計	6.45	433	2.135	13	4

4 考察

理系の女子であれば、文化資本は高いのではないだろうか、という考えは誤りであったことが示された。今回は、文化資本が高ければ、音楽の好みや文化活動にもその影響が表れるはずだとして、分析を行ったが、実際にはそれら以外のものが文理選択に影響を及ぼしているかもしれない。幼少期の活動について、具体的な調査が必要だと感じた。

また、文系の方が、女子の方が、文化資本が高いという結果が出た。安直に文系を選んでしまう人が多いと第 1 節では記述したが、理系以上の文化資本の高さを持つ上で文系を選択していることから、京都大学はよく考えた上で文系を選ぶ人が多いということのかもしれない。

男女で、文理選択に何が影響を及ぼしているのか。幼少期に、文理選択に影響を与えるものは何なのか。多くの疑問が解決せぬまま終わってしまったので、これから調査していきたいと思う。

文献

総務省平成 25 年版情報通信白書『第 3 節 ICT によるイノベーションを推進する研究開発』

<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h25/html/nc133150.html>

徳島新聞『理系女子なぜ少ない？「女子は文系」根強い』2018/2/7

<https://this.kiji.is/333894347140007009?c=62479058578587648>

第 2 部

親の音楽嗜好性と子供の文化資本

西村 基

1 はじめに

一般に音楽は、その人の「好み」や「趣味」を知る上で最も重要な領域であると考えられている。音楽の好みを問うことで、趣味と社会階層の間にどのような関係があるか明らかにできるとされている。例えば、音楽の嗜好と本人の学歴の間には、かなり明確な対応関係があり、高学歴層が好んで聴く音楽ジャンルと中学卒が好んで聴く音楽ジャンルが明確に分化している。音楽の好みと本人の社会階層との間に関係があるのはわかったが、では、その音楽の好みはどのような要因によって規定されるのであろうか。

以下では、一般的に文化的威信の評価が高いとされているクラシックのように文化資本の尺度として妥当な音楽ジャンルを検討し、その文化資本が親の文化的嗜好性、社会的背景にどのように影響されるのかを検討する。

本研究では、「親の音楽の嗜好性が高いほど、本人の文化資本が高い」、「親の学歴と本人の文化資本との間には正の相関関係がある」という二つの仮説を立て、調査結果を分析していく。

2 使用する変数

音楽の視聴頻度の指標として、以下の質問項目を用いる。

問2「あなたは以下のような音楽を好んで聴いていますか。」という質問で、J-POP、洋楽POP、邦楽ロック、洋楽ロック、ジャズ、クラシック、アニソンの7つに関して、

1. よく聞く
2. ときどき聞く
3. あまり聞かない
4. まったく聞かない

と尋ねている。本分析では、これらの回答を反転させ、数字が大きいほど、視聴頻度が高くなるようにしてある。

まず、音楽の視聴頻度に関して、クラシック音楽の視聴頻度とその他の音楽ジャンルの相関係数を計算することで、文化資本の尺度として妥当なものを検討する。

クラシック音楽の視聴頻度とその他の音楽ジャンルの視聴頻度の相関係数を計算したものが表1である。

表 1：クラシック音楽の視聴頻度とその他の音楽ジャンルの視聴頻度の相関係数

		クラシック視聴
J-POP視聴	Pearson の相関係数	-0.068
	有意確率（両側）	0.144
	度数	468
洋楽POP視聴	Pearson の相関係数	.124**
	有意確率（両側）	0.007
	度数	467
邦楽ロック視聴	Pearson の相関係数	-0.017
	有意確率（両側）	0.711
	度数	468
洋楽ロック視聴	Pearson の相関係数	.153**
	有意確率（両側）	0.001
	度数	468
ジャズ視聴	Pearson の相関係数	.480**
	有意確率（両側）	0.000
	度数	467
クラシック視聴	Pearson の相関係数	1
	有意確率（両側）	
	度数	468
アニソン視聴	Pearson の相関係数	.121**
	有意確率（両側）	0.009
	度数	468

**．相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

*．相関係数は 5% 水準で有意（片側）です。

表 1 の結果から、クラシックとの相関が最も高いのはジャズで.480 である。あとはそれほど高くないが、洋楽 POP、アニソン、洋楽ロックで有意な正の相関がみられた。文化資本の指標としてはジャズがもっとも有望で、洋楽 POP、アニソン、洋楽ロックも多少は文化資本と関連があるのかもしれない。よって以下の分析では、ジャズを文化資本の指標として検討していく。

次に、ジャズの視聴頻度がどのような要因によって影響されるのか重回帰分析を用いて検討する。

従属変数

ジャズの視聴頻度。尋ね方と選択肢は上記の通りである。

独立変数

独立変数には、「子供の頃にクラシック音楽のコンサートに連れて行ってもらったことがあるか」、「15 歳時に家にオーディオ機器があったか」、「15 歳時に家にピアノがあったか」を用いる。それぞれの尋ね方と選択肢は以下の通りである。

- 子供の頃にクラシック音楽のコンサートに連れて行ってもらったことがあるか
問 7 「あなたが 15 歳までに、次のようなことをご両親にしてもらったことがありますか」
 1. よくある
 2. ときどきある
 3. あまりない
 4. まったくない本分析ではこれらの回答を反転させ、数字が大きいほど、頻度が高くなるようにしてある。
- オーディオ機器とピアノが 15 歳時に家にあったかどうか
問 10 「あなたが 15 歳だったころ（中学卒業時）、お宅には次にあげるもののうち何がありましたか」
 0. なかった
 1. あった

最後に父母の学歴別のジャズ視聴頻度を調べる。父母の学歴については以下問項目を用いる。

- 問 9 あなたの親が最後に行った学校は次のどれにあたりますか。
 1. 中学校
 2. 高校
 3. 高専
 4. 短大
 5. 大学
 6. 大学院
 7. わからない

本分析では、

1. 父母両方とも大学以上
2. 一方が大学以上で他方は短大以下
3. 両方とも短大以下

の 3 つのグループにわけると変数を作る。また、7 わからない は欠損値としている。

3 分析結果

重回帰分析の結果は表 2 のようになった。

表 2：重回帰分析の結果

	係数	標準誤差	
(定数)	1.183	0.102	***
ピアノ	-0.108	0.087	
オーディオ機器	0.201	0.091	*
子供の頃クラシック音楽のコンサートに連れていく	0.287	0.046	***

***p<,001,**p<,01,*p<,05

表 2 を見ると、子供の頃クラシック音楽のコンサートに連れていくという項目が有意な効果を示している。また、オーディオ機器の所有も比較的有意な効果を示している。つまり、子供の頃クラシック音楽のコンサートに連れて行ってもらったことがある人ほど、現在ジャズをよく聞いており、子供の頃オーディオ機器が家にあったほうが、現在ジャズをよく聞いていることがわかる。

ジャズの視聴頻度と父母の学歴の相関関係は表 3 のようになった。

表 3：ジャズの視聴頻度と父母の学歴の相関

		ジャズ視聴	父母の学歴
ジャズ視聴	Pearson の相関係数	1	0.071
	有意確率 (両側)		0.142
	度数	467	430
父母の学歴	Pearson の相関係数	0.071	1
	有意確率 (両側)	0.142	
	度数	430	434

父母の学歴別のジャズ視聴頻度をグラフにしたものが図 1 である。

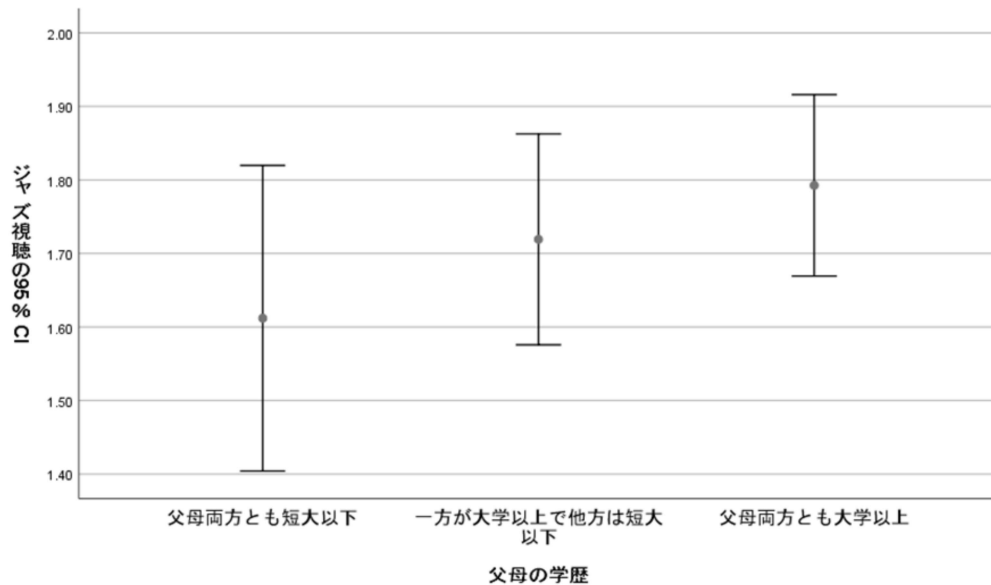


図 1：父母の学歴部別のジャズ視聴頻度（エラーバーは 95%信頼区間）

図 1 を見ると、父母の学歴が高いほど、ジャズ視聴頻度が高いことがわかる。両者の相関係数は表 3 を見るに、0.071 と大きくはないが、弱い正の相関があることが分かった。

4 考察と課題

本分析では、親の音楽の嗜好性の尺度として、「本人が子供の頃クラシック音楽のコンサートに連れて行ってもらったことがあるか」、「本人が子供の頃家にピアノやオーディオ機器があったかどうか」を用いた。重回帰分析の結果から、「本人が子供の頃クラシック音楽のコンサートに連れて行ってもらったことがあるか」、「家にオーディオ機器があったかどうか」とは有意な効果がみられた。よって「親の音楽の嗜好性が高いほど、本人の文化資本が高い」という仮説はある程度成立すると考えられる。また「親の学歴と本人の文化資本との間には正の相関関係がある」という仮説は上記のグラフの結果から成立すると言える。これらは正当文化の再生産プロセスが、親から子供への文化資本の相続を通じて実現されているということである。以上の分析から、文化資本の再生産のプロセスが確認できた。

しかし、課題として、本分析では「本人が子供の頃クラシック音楽のコンサートに連れて行ってもらったことがあるか」、「本人が子供の頃家にピアノやオーディオ機器があったかどうか」という項目がそもそも親の音楽の嗜好性と直接結びつけていいものかという検討はできなかった。また、本人の性別を分けて検討することができなかった。文化資本の再生産においては、男女の違いによる差が大きな意味を持つてくる。これらを加味して分析することで、よりよい分析結果を得られると考えられる。

文献

ブルデュー, ピエール, 1990, 『ディスタンクシオン I・II』, 石井洋二郎訳, 藤原書店.

片岡栄美, 1998, 「音楽愛好者の特徴と音楽ジャンルの親近性——音楽の好みと学歴・職業」『関東学院大学人文科学研究所報』(22): 147-162.

親を含む家庭環境、または先天的・後天的要素による

文化資本への影響

青塚 楓

1 はじめに

一般に、文化資本は親から子へと受け継がれ、再生産されると考えられている。これはピエール・ブルデューによる議論で、親の持つ文化資本によって、子供の文化資本が規定され、またそれが教育の場で評価されるためにも、文化的資本が連鎖していくとした。

しかし実際には、文化資本は親子相続以外にも様々な影響を受けている。確かに幼少時においては親の持つ文化資本、つまり家庭環境が大きな影響力をもち、それはまた、成長してからも根幹に大きくかかわっているものではある。しかし、年齢を重ねるにつれ、家以外にも社会との接点は増え始め、そうした外部の思想や文化に触れつつみずから独自の文化領域を選択し始めることになる。そうしたときには、文化資本を形成するにあたって、家庭環境以外の新たな要素が生まれてくるといえよう。あるいはもっと時間をさかのぼって、まず生まれつきの性質も文化資本に影響を持っているのではないだろうか。内在する志向は、育つ環境の中でも、自ら受け入れる文化を選択しているだろう。それならば、文化資本の形成には必ずしも親・家庭の影響だけに関わってくるということとは言えないのではないだろうか。

以上を踏まえ、本論文では、親を含む家庭環境という中間的な要因を土台として、さらに先天的、後天的な要素の影響について検討する。具体的には、

- (1) 親を含め、家庭環境から子への文化資本の影響はあるのか
- (2) あるとすれば、それは先天的な要素、後天的な要素によってどれだけの影響を受けるのか

を分析課題としたい。

また、本論文の構成は以下のとおりである。まず、第二節にて使用するデータと分析手順について確認し、第三節で分析結果を示す。さらに、第四節で分析結果に対する考察を行う。

2 データと方法

2.1 データの概要

本論文で用いたのは、社会学実習にて実施したアンケート調査のデータである。アンケートのテーマは「文化活動に関する意識調査」とし、京都大学に在学する学生約 500 名を対象として、2018 年 11 月に行われた。なお、対象者は無作為に選ばれた。

2.2 使用する変数

本論文では、第一に、親・家庭環境の持つ文化資本と子供の文化資本との相関関係を調べ、第二に、それらの相関関係を子供のもつ先天的な性質と後天的な性質で分類し、さらに分析を加える。そこで、第一の分析に関しては、従属変数に「子供が現在行っている文化活動」を、独立変数に「親が子供に対して行った文化活動」「家庭にあった文化的家財」を置いたモデルを設定する。第二の分析に関しては、先天的な性質として性別を用いることとし、後天的な性質に関しては学部を用いる。

次に、検討対象の変数とデータの設問の対応関係を説明する。従属変数としては「ジャズの視聴頻度」「クラシックの視聴頻度」「文芸書の読書頻度」「専門書の読書頻度」「観劇頻度」「美術館の鑑賞頻度」を用いる。また、独立変数においては、親に関して「親が子供を、美術館・博物館／クラシックコンサートに連れていった頻度」、「一緒に天体観測をした頻度」を用い、家庭環境に関しては「家に文学全集／ピアノ／美術品・骨董品があったかどうか」を用いる。

なお、それぞれの設問について、質問文は以下の通りである。

まず、第一の分析における、従属変数の設問について説明する。ジャズ、クラシックの視聴頻度については以下のようなワーディングで尋ねられている。「あなたは以下のような音楽を好んで聴いていますか」。選択肢は「4 よく聞く」「3 ときどき聞く」「2 あまり聞かない」「1 まったく聞かない」の4つである。次に、文芸書、専門書の読書の頻度については以下のようなワーディングで尋ねられている。「あなたは以下のジャンルの本をどれくらいの頻度で読みますか」。選択肢は「5 週に3回以上」「4 週に1, 2回ぐらい」「3 月に数回ぐらい」「2 年に数回ぐらい」「1 ほとんど読まない」の5つである。最後に、演劇、美術館の鑑賞頻度については、以下のようなワーディングで尋ねられている。「あなたは以下の文化活動をどれくらいの頻度で行いますか」。選択肢は、「4 週に1回以上」「3 月に数回ぐらい」「2 年に数回ぐらい」「1 ほとんど行かない」の4つである。

次に、独立変数の設問について説明する。親に関する三つの尺度（親が子供を美術館・博物館／クラシックコンサートに連れていった頻度、親が子供と一緒に天体観測をした頻度）については、以下のようなワーディングで尋ねられている。「あなたが15歳までに、次のようなことをご両親にしてもらったことがありますか」。選択肢は「4 よくある」「3 ときどきある」「2 あまりない」「1 まったくない」の四つである。また、家庭環境に関する三つの尺度（文学全集、ピアノ、美術品・骨董品）については以下のようなワーディングで尋ねられている。「あなたが15歳だったころ（中学卒業時）、お宅には次にあげるもののうち何がありましたか。あてはまるものをいくつでも選んでください」。選択肢は上にあげた三つを含む18個の家財である。

最後に、第二の分析で用いる変数の設問について説明する。まず、学部と性別については、以下のようなワーディングで尋ねられている。「あなたの所属する学部/研究科と性別を教えてください」。学部については文系と理系に分けて分析に用いた。以下にその表を載せる。なお、赤が文系、青が理系、無色はその他である。その他については数が少なかったため、分析対象として

扱うのが難しいと判断し、今回は検討に入れなかった。性別について、選択肢は「1 男」「2 女」「3 その他」の三つだが、「3 その他」については、学部と同じく、数が圧倒的に少なかったため、今回は分析対象に入れなかった。

表 1：学部とその分類

0 総合人間学部	9 農学部		
1 文学部	10 文学研究科	19 人間・環境学 研究科	25 地球環境学堂 /学舎
2 教育学部	11 教育学研究科		26 公共政策連携 研究部/教育部
3 法学部	12 法学研究科	20 エネルギー 科学研究科	(公共政策大学院)
4 経済学部	13 経済学研究科		
5 理学部	14 理学研究科	21 アジア・アフリ カ地域研究研究科	27 経営管理研究部 /経営管理教育部
6 医学部	15 医学研究科	22 情報学研究科	(経営管理大学院)
7 薬学部	16 薬学研究科	23 生命科学研究科	28 法科大学院
8 工学部	17 工学研究科	24 総合生存学館 (思修館)	
	18 農学研究科		

2.3 方法

まず、第一の分析に関して説明する。この分析では、親・家庭の持つ文化資本が子供の文化資本に与える影響を測るが、その方法として、正の相関に着目したい。つまり、ある程度の文化資本を有する親・家庭の子供は、成長してから比較的文化活動に対して積極的になるという仮説を設定し、それを検討することとする。先の節で述べたように、従属変数には「ジャズの視聴頻度」「クラシックの視聴頻度」「文芸書の読書頻度」「専門書の読書頻度」「観劇頻度」「美術館の鑑賞頻度」を、独立変数には親が子供を「美術館・博物館」「クラシックコンサート」「写真館」に連れていった頻度、「一緒に天体観測をした」頻度を用い、相関分析にかける。

以上で得られた結果をもとに、さらに第二の分析を行う。まず、文化資本の相関関係について、データを男性と女性で分け、それぞれについてもう一度相関分析にかける。また、学部についてもこれと同様の作業を行う。なお、学部は個別に分けるのではなく、文系と理系の二つで組分けを行う。

3 分析結果

まず、第一の分析として、親・家庭環境の持つ文化資本と子供の文化資本について相関分析を行った結果を表 2 に示した。

表 2：親・家庭環境の持つ文化資本と子供の文化資本との相関

		ジャズ	クラシック	文芸書	専門書	演劇を 見に行く	美術館 へ行く
美術館・博物館 に連れていく	Pearson の相関係数	.166**	.249**	.178**	.260**	.208**	.314**
	有意確率 (両側)	0	0	0	0	0	0
	度数	461	462	465	463	465	465
クラシック コンサート に連れていく	Pearson の相関係数	.296**	.380**	.094*	0.083	.300**	.245**
	有意確率 (両側)	0	0	0.042	0.074	0	0
	度数	460	461	464	462	464	464
一緒に 天体観測する	Pearson の相関係数	.108*	0.014	.119*	0.071	.142**	.137**
	有意確率 (両側)	0.02	0.757	0.01	0.128	0.002	0.003
	度数	459	460	463	461	463	463
文学全集	Pearson の相関係数	.168**	.193**	0.057	.138**	.150**	.177**
	有意確率 (両側)	0	0	0.225	0.003	0.001	0
	度数	457	458	461	459	461	461
ピアノ	Pearson の相関係数	0.043	.230**	0.004	0.002	.144**	0.028
	有意確率 (両側)	0.362	0	0.94	0.971	0.002	0.55
	度数	457	458	461	459	461	461
美術品・骨董品	Pearson の相関係数	0.075	0.08	-0.044	0.056	0.074	0.076
	有意確率 (両側)	0.108	0.089	0.349	0.23	0.115	0.101
	度数	457	458	461	459	461	461
** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)							
* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)							

表 2 を見ると、独立変数のうち上から 5 つは、子供の現在の文化活動と高い相関関係を示している。とりわけ「美術館・博物館に連れていく」は、最も高く、子供の現在の文化活動のすべてにおいて 1% 水準での有意が確認できる。また、残る二つの独立変数について、「美術品・骨董品」は有効な相関がみられなかったが、「ピアノ」は、「クラシックの視聴頻度」と「演劇の鑑賞頻度」に影響を示した。以上から、ある程度の文化資本を有する親・家庭の子供は、成長してから文化活動に対して比較的積極的になると読み取れるため、親・家庭の文化資本は子供の文化資本に影響を持つと言えよう。

次に、第二の分析として、場合分けをして再び相関分析を行った結果を表 3～6 に示した。具体的には、男性の場合を表 3、女性の場合を表 4、文系の場合を表 5、理系の場合を表 6 とした。さらに、表 2～6 をまとめ、表 7 とした。

表 3：男性

		ジャズ	クラシック	文芸書	専門書	演劇を 見に行く	美術館 へ行く
美術館・博物館 に連れていく	Pearson の相関係数	.121*	.217**	.123*	.319**	.167**	.303**
	有意確率 (両側)	0.033	0	0.028	0	0.003	0
	度数	312	313	316	314	316	316
クラシック コンサート に連れていく	Pearson の相関係数	.250**	.343**	0.02	.145*	.322**	.252**
	有意確率 (両側)	0	0	0.726	0.01	0	0
	度数	311	312	315	313	315	315
一緒に 天体観測する	Pearson の相関係数	.159**	-0.012	0.092	0.097	0.082	.204**
	有意確率 (両側)	0.005	0.839	0.104	0.085	0.148	0
	度数	311	312	315	313	315	315
文学全集	Pearson の相関係数	.129*	.184**	-0.004	.208**	0.096	.140*
	有意確率 (両側)	0.023	0.001	0.943	0	0.089	0.013
	度数	310	311	314	312	314	314
ピアノ	Pearson の相関係数	0.09	.282**	-0.008	0.066	.124*	0.028
	有意確率 (両側)	0.115	0	0.888	0.244	0.028	0.624
	度数	310	311	314	312	314	314
美術品・骨董品	Pearson の相関係数	0.051	0.059	-0.014	0.072	0.037	0.058
	有意確率 (両側)	0.366	0.303	0.811	0.202	0.511	0.309
	度数	310	311	314	312	314	314
** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)							
* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)							

表 4：女性

		ジャズ	クラシック	文芸書	専門書	演劇を 見に行く	美術館 へ行く
美術館・博物館 に連れていく	Pearson の相関係数	.273**	.353**	.265**	0.164	.247**	.328**
	有意確率 (両側)	0.001	0	0.001	0.051	0.003	0
	度数	142	142	142	142	142	142
クラシック コンサート に連れていく	Pearson の相関係数	.388**	.453**	.191*	0.001	.206*	.174*
	有意確率 (両側)	0	0	0.023	0.994	0.014	0.038
	度数	142	142	142	142	142	142
一緒に 天体観測する	Pearson の相関係数	0.01	0.077	.180*	0.017	.234**	0.024
	有意確率 (両側)	0.909	0.362	0.033	0.837	0.005	0.781
	度数	141	141	141	141	141	141
文学全集	Pearson の相関係数	.226**	.198*	0.124	0.048	0.16	.187*
	有意確率 (両側)	0.007	0.019	0.144	0.574	0.059	0.027
	度数	140	140	140	140	140	140
ピアノ	Pearson の相関係数	-0.071	0.101	-0.037	-0.126	0.095	-0.078
	有意確率 (両側)	0.404	0.236	0.666	0.139	0.263	0.359
	度数	140	140	140	140	140	140
美術品・骨董品	Pearson の相関係数	.171*	0.165	-.184*	0.01	0.16	0.107
	有意確率 (両側)	0.044	0.052	0.03	0.902	0.059	0.21
	度数	140	140	140	140	140	140
** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)							
* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)							

表 5 : 文系

		ジャズ	クラシック	文芸書	専門書	演劇を 見に行く	美術館 へ行く
美術館・博物館 に連れていく	Pearson の相関係数	.167*	.230**	.179*	.237**	.143*	.336**
	有意確率 (両側)	0.021	0.001	0.013	0.001	0.047	0
	度数	191	191	193	193	193	193
クラシック コンサート に連れていく	Pearson の相関係数	.341**	.423**	.164*	0.051	.252**	.256**
	有意確率 (両側)	0	0	0.023	0.483	0	0
	度数	190	190	192	192	192	192
一緒に 天体観測する	Pearson の相関係数	0.12	0.01	0.114	0.009	0.129	0.038
	有意確率 (両側)	0.098	0.888	0.115	0.904	0.074	0.603
	度数	190	190	192	192	192	192
文学全集	Pearson の相関係数	.230**	.242**	0.082	0.088	.178*	.205**
	有意確率 (両側)	0.001	0.001	0.257	0.226	0.014	0.004
	度数	190	190	192	192	192	192
ピアノ	Pearson の相関係数	0.058	.212**	0.053	-0.024	0.074	0.007
	有意確率 (両側)	0.424	0.003	0.464	0.744	0.311	0.927
	度数	190	190	192	192	192	192
美術品・骨董品	Pearson の相関係数	0.102	0.131	-0.068	0.096	0.096	0.103
	有意確率 (両側)	0.162	0.071	0.347	0.186	0.183	0.157
	度数	190	190	192	192	192	192
** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)							
* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)							

表 6 : 理系

		ジャズ	クラシック	文芸書	専門書	演劇を 見に行く	美術館 へ行く
美術館・博物館 に連れていく	Pearson の相関係数	.162*	.285**	.139*	.303**	.177**	.237**
	有意確率 (両側)	0.013	0	0.032	0	0.006	0
	度数	236	237	238	237	238	238
クラシック コンサート に連れていく	Pearson の相関係数	.264**	.353**	0.019	0.117	.265**	.183**
	有意確率 (両側)	0	0	0.775	0.073	0	0.005
	度数	236	237	238	237	238	238
一緒に 天体観測する	Pearson の相関係数	0.091	0.028	0.111	0.089	0.083	.136*
	有意確率 (両側)	0.162	0.666	0.088	0.172	0.201	0.036
	度数	236	237	238	237	238	238
文学全集	Pearson の相関係数	.133*	.172**	0.007	.152*	.152*	0.124
	有意確率 (両側)	0.041	0.008	0.916	0.019	0.019	0.056
	度数	235	236	237	236	237	237
ピアノ	Pearson の相関係数	0.059	.249**	-0.041	0.032	.197**	0.06
	有意確率 (両側)	0.371	0	0.529	0.624	0.002	0.361
	度数	235	236	237	236	237	237
美術品・骨董品	Pearson の相関係数	0.063	0.068	0.001	0.038	0.067	0.108
	有意確率 (両側)	0.335	0.295	0.993	0.566	0.302	0.099
	度数	235	236	237	236	237	237
** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)							
* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)							

表 7：表 2～6 のまとめ

		a. ジャズ	b. クラシック	c. 文芸書	d. 専門書	e. 演劇を見に行く	f. 美術館へ行く
A. 美術館 博物館 に連れていく	全体	.166**	.249**	.178**	.260**	.208**	.314**
	男性	.121*	.217**	.123*	.319**	.167**	.303**
	女性	.273**	.353**	.265**	0.164	.247**	.328**
	文系	.167*	.230**	.179*	.237**	.143*	.336**
	理系	.162*	.285**	.139*	.303**	.177**	.237**
B. クラシック コンサート に連れていく	全体	.296**	.380**	.094*	0.083	.300**	.245**
	男性	.250**	.343**	0.02	.145*	.322**	.252**
	女性	.388**	.453**	.191*	0.001	.206*	.174*
	文系	.341**	.423**	.164*	0.051	.252**	.256**
	理系	.264**	.353**	0.019	0.117	.265**	.183**
C. いっしょに 天体観測をする	全体	.108*	0.014	.119*	0.071	.142**	.137**
	男性	.159**	-0.012	0.092	0.097	0.082	.204**
	女性	0.01	0.077	.180*	0.017	.234**	0.024
	文系	0.12	0.01	0.114	0.009	0.129	0.038
	理系	0.091	0.028	0.111	0.089	0.083	.136*
D. 文学全集	全体	.168**	.193**	0.057	.138**	.150**	.177**
	男性	.129*	.184**	-0.004	.208**	0.096	.140*
	女性	.226**	.198*	0.124	0.048	0.16	.187*
	文系	.230**	.242**	0.082	0.088	.178*	.205**
	理系	.133*	.172**	0.007	.152*	.152*	0.124
E. ピアノ	全体	0.043	.230**	0.004	0.002	.144**	0.028
	男性	0.09	.282**	-0.008	0.066	.124*	0.028
	女性	-0.071	0.101	-0.037	-0.126	0.095	-0.078
	文系	0.058	.212**	0.053	-0.024	0.074	0.007
	理系	0.059	.249**	-0.041	0.032	.197**	0.06
F. 美術品 骨董品	全体	0.075	0.08	-0.044	0.056	0.074	0.076
	男性	0.051	0.059	-0.014	0.072	0.037	0.058
	女性	.171*	0.165	-0.184*	0.01	0.16	0.107
	文系	0.102	0.131	-0.068	0.096	0.096	0.103
	理系	0.063	0.068	0.001	0.038	0.067	0.108

表 7 を見ると、相関係数は各項目でおおむね一致している。しかし、所々でばらつきが出ている。例えば、相関係数の有意水準で見たとき、1%を満たすもの（アスタリスクが二つ）と 5%を満たすもの（アスタリスクが一つ）とが混在している項目がある。なお、便宜的に前者を星二つ、後者を星一つと表すことにする。具体的には、独立変数にピアノ、従属変数にクラシックをとったところ（E-b）で、ここでは男性、文系、理系が星二つなのに対し、女性は星がない。こ

のように、星二つ分の差が出ているところは他に三つ見られるが（A-d、C-a、C-e）、そのうち二つは女性の特異点となっており、女性にのみ有意差が認められる例が目立った。…（1）

また、男女間、文理間で相関係数を比べた時、全体を通して文理間でのほうがその差が少なかった。…（2）

男女間では、専門書に特徴的な傾向が出ており、A～Fを通して、男性のほうがその相関が高かった。…（3）

4 考察

以上から、考察をまとめたい。

まず、第一の分析において、ある程度の文化資本を有している親・家庭環境の子供は、現在も文化活動に積極的であったため、両者にはある程度の相関がみられることが分かった。

次に、第二の分析に関して述べる。まず、（1）で、女性のみが特異点となる項目が複数あることを述べた。中でも、上に述べたとおり、独立変数にピアノ、従属変数にクラシックを設定した項目（E-b）では、女性だけが低い相関を示しており、女性のほうが文化資本の影響を強く受けると考えていたために、これは意外な結果だった。このように、女性のみが特異点になってしまうのは、母数に男性が占める割合が大きいためと思われ、その条件を揃えたうえで、再び検討してみたい。

次に、（2）で、男女間のほうが相関係数に差があったと述べた。相関係数の差を具体的に見てみよう。有意水準1%を満たすものと、5%に満たないものを一つの組として考えたとき、この組がみられるのは、文理間においてはE-eだけで、各項目を通してほとんどその有意水準は一致している。それに対し、男女間においては、6組（A-d、C-a、e、f、D-d、E-b）も確認できる。以上から、後天的な要素よりも先天的な要素のほうが、文化資本の形成に大きな影響力を持っていると考えられる。

これは、（3）においても同等のことが言えるように思う。A～Eで、おなじだけの文化資本をもちながら、専門書に相関が高いのは常に男性である。

しかし一方で、このように男女間の相関差のほうが文理間よりも開いたのは、後天的な要素に学部という粗い基準しか設定できなかったことも関係しているように思う。これについてはまた、学生時代の部活動、幼少時の習い事など、もう少し文化的な影響力を持ち、かつ細分化された要素を設定しなおし、改めて検討してみたい。

映画館に行く頻度に応じた文化消費・家庭環境の差異

小島 啓

1 はじめに

本稿の目的は、映画館に行く頻度によって文化消費・家庭環境がどのように異なるのかを明らかにすることだ。文化的オムニボアの存在を指摘する研究者がもっぱら社会階層に注目する一方、筆者はある文化活動の消費のされ方それ自体に着目した。

筆者の感じるところによれば、「映画館に行く」という文化活動の消費のされ方は、「たしなむ」程度から「溺れる」ところまで様々である。つまり、ミーハーもオタクも存在している。そして、彼らは全く異なる文化消費・家庭環境の傾向を持っていると考えられる。そこで本調査では映画館に行く頻度を4段階（「映画館に行かない人」「ミーハー」「ライトなオタク」「ヘヴィなオタク」。3節に詳述）に分け、各グループが示す傾向を比較した。

それに際して考えられるのは、次のような仮説である。

1. 文化消費や家庭環境という点からみると、おおまかには「ミーハー」「ライトなオタク」の傾向が近く、「映画館に行かない人」や「ヘヴィなオタク」と異なっていると考えられる。そのうえで、「ミーハー」「ライトなオタク」の間にも何らかの点で差異がある。
2. 「ヘヴィなオタク」の示す傾向は特異である。

また、この調査にあたっては、次の二つの前提が再確認されるべきだろう。すなわち、「映画館に行く」ことはポピュラー・カルチャーである、この文化活動の消費のされ方は様々である、という二点だ。

前者について、ここで補足しておく。「映画を観る」ことがポピュラー・カルチャーであることは、先行研究が示している（橋本 1988）。もっとも、それは従来的な認識に過ぎない。かつて、「映画を観る」ことは「映画館に行く」ことであった。しかしながら、現在ではそのように言うことは難しいだろう。というのも、昨今発達著しい通信技術により、動画配信サービスが広く普及したからである。Netflix や Prime Video を利用すれば、我々は家にいながらにして膨大なコンテンツを視聴することが可能だ。いまや「映画を観る」ことは、「映画館に行く」ことと必ずしも合致しない。そのため、現状にあってもなお「映画館に行く」ことを選択する人は、そこに家での視聴にはない特別な価値を見出していると考えられる。例えば、大画面や高品質な音響といった上質の視聴環境、あるいは友人や恋人との交際的手段として、である。このような分離の結果、二つの活動に従事する人間の性質に差異が生じてくる可能性は指摘されてしかるべきだろう。

2 データの概要

本稿の分析では、以下の質問項目に対する答えを使用した。

問2 あなたは以下のような音楽を好んで聴いていますか

- q2x1 J-POP
- q2x2 洋楽 POP
- q2x3 邦楽ロック
- q2x4 洋楽ロック
- q2x5 ジャズ
- q2x6 クラシック
- q2x7 アニソン

q2x1～q2x7は「1 よく聞く」「2 ときどき聞く」「3 あまり聞かない」「4 まったく聞かない」の4点尺度で答える質問項目である。分析の際は、順に20、4、1、0のポイントを与えた（筆者の判断に拠る）。

問3 あなたは、どのぐらいの頻度でコンサートやライブに行きますか

- q3x1 J-POP
- q3x2 洋楽 POP
- q3x3 邦楽ロック
- q3x4 洋楽ロック
- q3x5 ジャズ
- q3x6 クラシック
- q3x7 アニソン

q3x1～q3x7は「1 一月に一回以上」「2 半年に一回程度」「3 一年に一回程度」「4 数年に一回程度」「5 行ったことがない」の5点尺度で答える質問項目である。分析の際は、順に36、6、3、1、0のポイントを与えた（実際の頻度に拠る）。

問4 あなたは以下のジャンルの本をどれぐらいの頻度で読みますか

- q4x1 文芸書（小説・エッセイ・詩など）
- q4x2 実用書（料理、趣味、スポーツ、美容、冠婚葬祭など）
- q4x3 ビジネス・経済・経営書
- q4x4 学習参考書（資格対策書、語学書、辞書など）
- q4x5 専門書（人文科学、社会科学、理工科学、医学、芸術など）

q4x6 雑誌

q4x1～q4x6 は「1 週に三回以上」「2 週に一、二回ぐらい」「3 月に数回ぐらい」「4 年に数回ぐらい」「5 ほとんど読まない」の 5 点尺度で答える質問項目である。分析の際は、順に 180、72、36、3、0.5 のポイントを与えた（実際の頻度に拠る）。

問 5 あなたは以下の文化活動をどれくらいの頻度で行いますか

q5x1 演劇を観に行く

q5x2 美術館へ行く

q5x3 映画館へ行く

q5x1～q5x3 は「1 週に一回以上」「2 月に数回ぐらい」「3 年に数回ぐらい」「4 ほとんど行かない」の 4 点尺度で答える質問項目である。分析の際は、順に 72、36、3、0.5 のポイントを与えた（実際の頻度に拠る）。

問 6 あなたが 15 歳のころ（中学卒業時）、あなたのお宅には本がどのくらいありましたか。雑誌、新聞、教科書、漫画、コミックは含めないでお答えください

q6x1 同上

q6x1 は「1 家に本はなかった」「2 10 冊以下」「3 11 冊～25 冊」「4 26 冊～50 冊」「5 51 冊～100 冊」「6 101 冊～200 冊」「7 201 冊～500 冊」「8 501 冊以上」の 8 点尺度で答える質問項目である。分析の際は、順に 1、2、3、4、5、6、7、8 のポイントを与えた（質問項目の点数に拠る）。

問 7 あなたが 15 歳までに、次のようなことをご両親にしてもらったことがありますか

q7x1 本の読み聞かせ

q7x2 勉強を教えてもらう

q7x3 美術館・博物館に連れて行く

q7x4 クラシック音楽のコンサートに連れて行く

q7x5 海外旅行に連れて行く

q7x6 地域のイベントに連れて行く

q7x7 写真館に連れて行く

q7x8 山登りに連れて行く

q7x9 いっしょに天体観測する

q7x10 いっしょにバードウォッチングする

q7x1～q7x10 「1 よくある」「2 ときどきある」「3 あまりない」「4 まったくない」の4点尺度で答える質問項目である。分析の際は、各項目の性質を鑑み、q7x1においては順に96、24、2、0のポイントを、q7x2においては順に12、3、1、0のポイントを、q7x3～q7x4、q7x6、q7x8～q7x10においては順に30、5、1、0のポイントを、q7x5とq7x7においては順に8、3、1、0のポイントを与えた（筆者の判断に拠る）。

問10 あなたが15歳だったころ(中学卒業時)、お宅には次にあげるもののうち何がありましたか。あてはまるものをいくつでも選んでください

- q10x1 持ち家
- q10x2 田畑・山林
- q10x3 自分専用の部屋
- q10x4 パソコン・ワープロ
- q10x5 電話（携帯電話・PHSを含む）
- q10x6 応接間
- q10x7 文学全集
- q10x8 ピアノ
- q10x9 一眼レフ・ビデオカメラ
- q10x10 DVDレコーダー（テレビ内蔵型含む）
- q10x11 テレビ
- q10x12 百科事典
- q10x13 自家用車
- q10x14 美術品・骨董品
- q10x15 ゲーム機（携帯ゲーム機を含む）
- q10x16 別荘
- q10x17 学習机
- q10x18 オーディオ機器

q10x1～q10x18は「あった」「なかった」の二つから答える質問項目である。分析の際は、順に1、0のポイントを与えた。

3 分析

3.1 前提の確認

表 1：映画館に行く頻度（q5x3）の度数分布表

映画館に行く頻度		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	ほとんど行かない	102	21.5	21.7	21.7
	年に数回ぐらい	294	62.0	62.7	84.4
	月に数回ぐらい	68	14.3	14.5	98.9
	週に一回以上	5	1.1	1.1	100.0
	合計	469	98.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	5	1.1		
合計		474	100.0		

表 1 から、「映画館に行く」という文化活動がさまざまな度合いで消費されていることが分かる。これにより、「1. はじめに」で述べた前提のうち、後者は確認されたとと言える。

次に、もう一つの前提である『映画館に行くこと』はポピュラー・カルチャーである」という点を確認しよう。大衆文化活動は共通文化となっており、その経験に階層差はない（片岡 2000）。そこで、文化資本の有無と「映画館に行くこと」とに相関がないことを示せれば、『映画館に行くこと』はポピュラー・カルチャーである」と言えよう。

それにあたっては、まず文化資本の測定尺度と考えられているクラシックの視聴頻度（q2x6）と相関する質問項目を選び出し、次にそれらと映画館に行く頻度（q5x3）との相関を確認する。

表 2：クラシックの視聴頻度と相関係数が高い項目一覧

		ジャズの 視聴頻度	ジャズの ライブに 行く頻度	クラシッ クのライ ブに行く 頻度	親と美術 館・博物 館に行っ た頻度	親とクラ シックの コンサー トに行っ た頻度	文学全集 の有	ピアノの 有無
ク ラ シ ッ ク の 視 聴 頻 度	Pearson の相関 係数	.376**	.209**	.477**	.209**	.328**	.213**	.230**
	有意確 率 (両 側)	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
	度数	467	466	465	462	461	458	458

**．相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

*．相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

表 2 は、クラシックの視聴頻度 (q2x6) と 0.2 以上の相関を示した質問項目の一覧である。これらは、全体として文化資本の測定尺度と言ってよいだろう。

表 3：映画館に行く頻度と文化資本の測定尺度となる項目との相関

		クラシックの視聴頻度	ジャズの視聴頻度	ジャズのライブに行く頻度	クラシックのライブに行く頻度	親と美術館・博物館に行った頻度	親とクラシックのコンサートに行った頻度	文学全集の有無	ピアノの有無
映画館に行く頻度	Pearson の相関係数	0.035	0.079	.114*	0.074	-0.006	0.013	.145**	-0.052
	有意確率 (両側)	0.447	0.091	0.014	0.111	0.895	0.774	0.002	0.262
	度数	465	464	466	465	464	463	460	460

**．相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

*．相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

表 3 は、映画館に行く頻度 (q5x3) と上記の質問項目との相関を示した図である。これによれば、『映画館に行くこと』はポピュラー・カルチャーである」と言っても問題はないだろう。以上から、調査の前提は確認された。

3.2 映画館に行く頻度に応じた文化消費・家庭環境の差異

3.2.1 映画館に行く頻度に応じた文化消費・家庭環境の差異 (結果)

映画館に行く頻度 (q5x3) ごとの各質問項目 (2 節に示した全 52 項目) における平均値・測定誤差を可視化した。また、ここでは、「ほとんど行かない」に該当する人々を「映画館に行かない人」、「年に数回ぐらい」に該当する人々を「ミーハー」、「月に数回ぐらい」に該当する人を「ライトなオタク」、「週に一回以上」に該当する人々を「ヘヴィなオタク」と呼ぶ。

各グループにおける平均値の 95% 区間に明確な差異や特筆すべき結果が現れたのは、音楽の視聴頻度に関する質問項目 (q2x1、q2x2、q2x3、q2x6)、ライブへの参加頻度に関する質問項目 (q3x3)、書籍を読む頻度に関する質問項目 (q4x6)、15 歳までに親にしてもらったことに関する質問項目 (q7x4、q7x8、q7x10)、15 歳のときに家にあったものに関する質問項目 (q10x1、q10x6) の、全 11 項目である。なお、「ヘヴィなオタク」に該当する者はたった 5 名であるので、本グループについての結果は参考程度とされたい。

紙幅の関係上、上記以外の質問項目の平均値・測定誤差は記載しない。

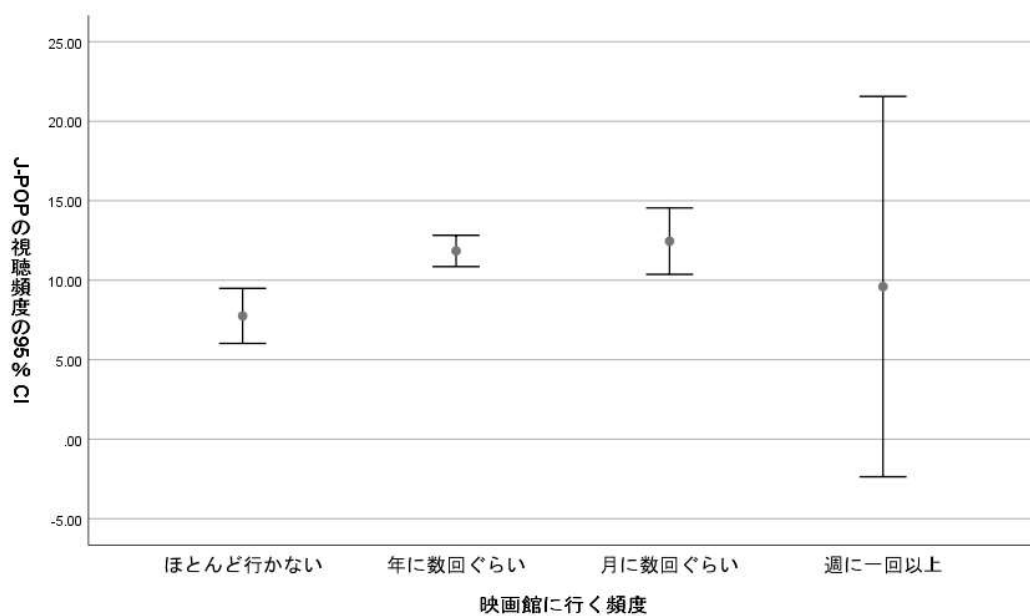


図 1：映画館に行く頻度別の J-POP の視聴頻度の平均値（エラーバーは 95%信頼区間）

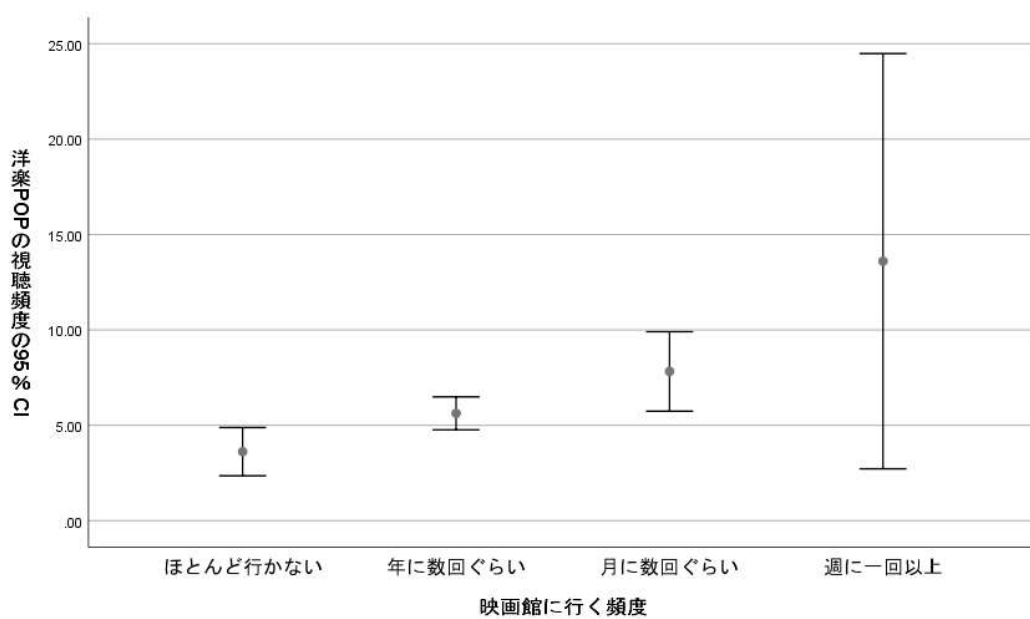


図 2：映画館に行く頻度別の洋楽 POP の視聴頻度の平均値（エラーバーは 95%信頼区間）

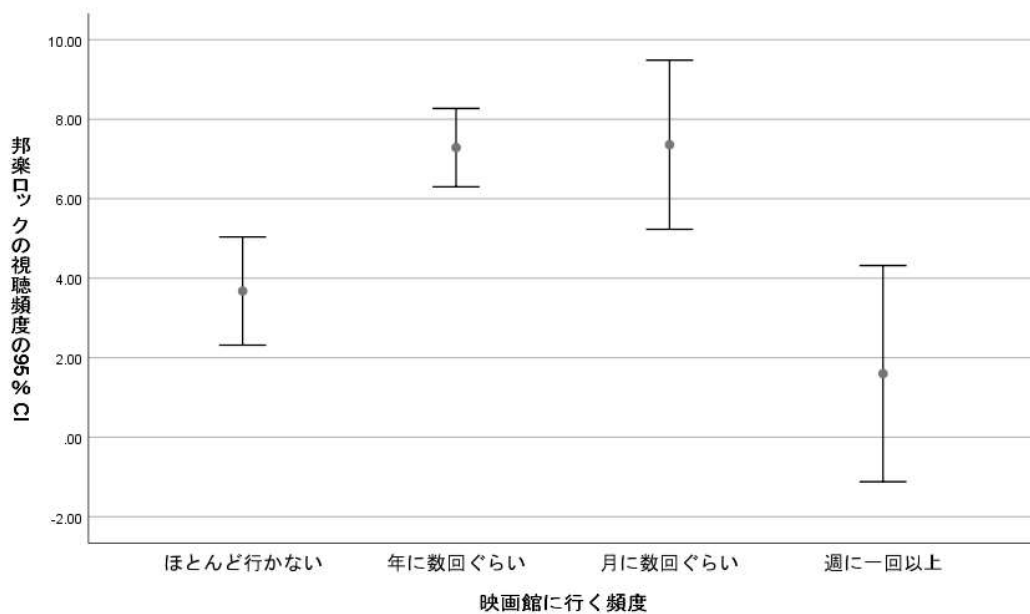


図 3：映画館に行く頻度別の邦楽ロックの視聴頻度の平均値（エラーバーは 95%信頼区間）

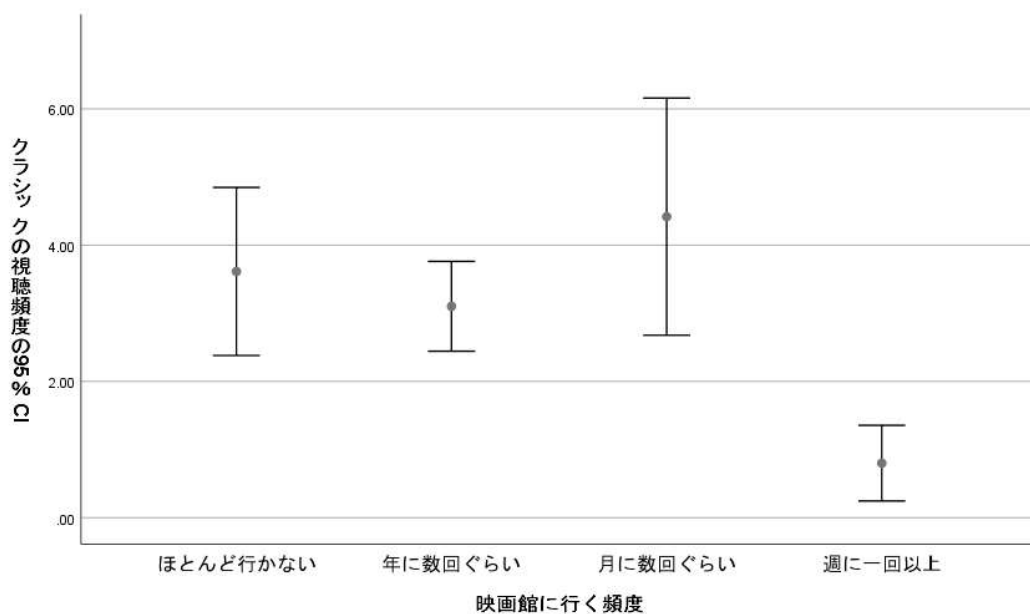


図 4：映画館に行く頻度別のクラシックの視聴頻度の平均値（エラーバーは 95%信頼区間）

「ミーハー」「ライトなオタク」における J-POP の視聴頻度は「映画館に行かない人」より高く、「ライトなオタク」における洋楽 POP の視聴頻度は「映画館に行かない人」より高い。また、「ミーハー」「ライトなオタク」における邦楽ロックの視聴頻度は「映画館に行かない人」「ヘヴィなオタク」より高い。加えて、「ヘヴィなオタク」におけるクラシックの視聴頻度は他の 3 グループより低い。洋楽ロック、ジャズ、クラシック、アニソンについては、グループ間で視聴頻度の明確な違いは認められなかった。

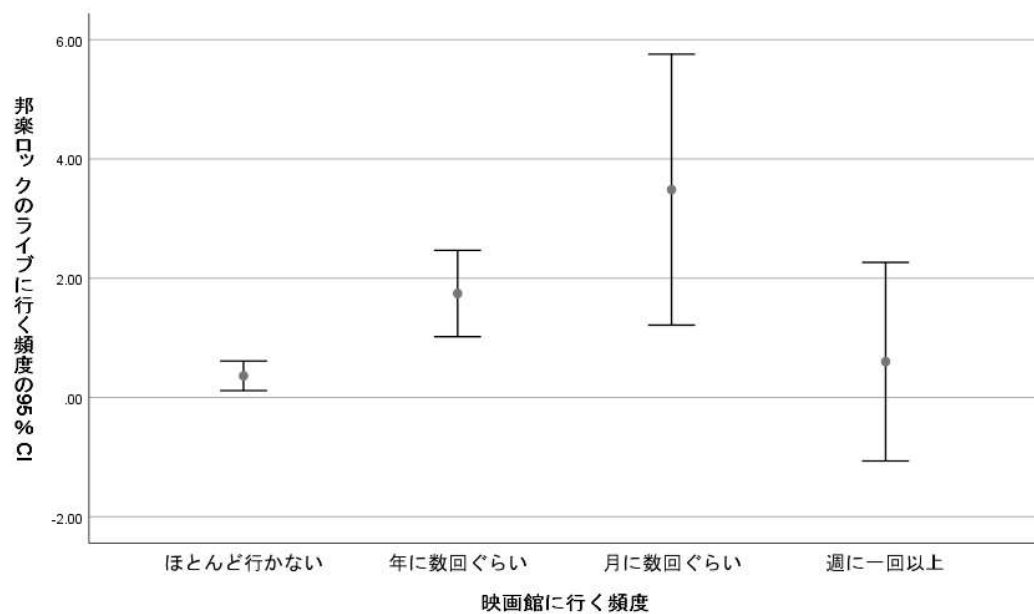


図 5：映画館に行く頻度別の邦楽ロックのライブに行く頻度の平均値
(エラーバーは 95%信頼区間)

「ミーハー」「ライトなオタク」における邦楽ロックのライブに行く頻度は「映画に行かない人」より高い。J-POP、洋楽 POP、洋楽ロック、ジャズ、クラシック、アニソンについては、グループ間でライブに行く頻度の違いは認められなかった。

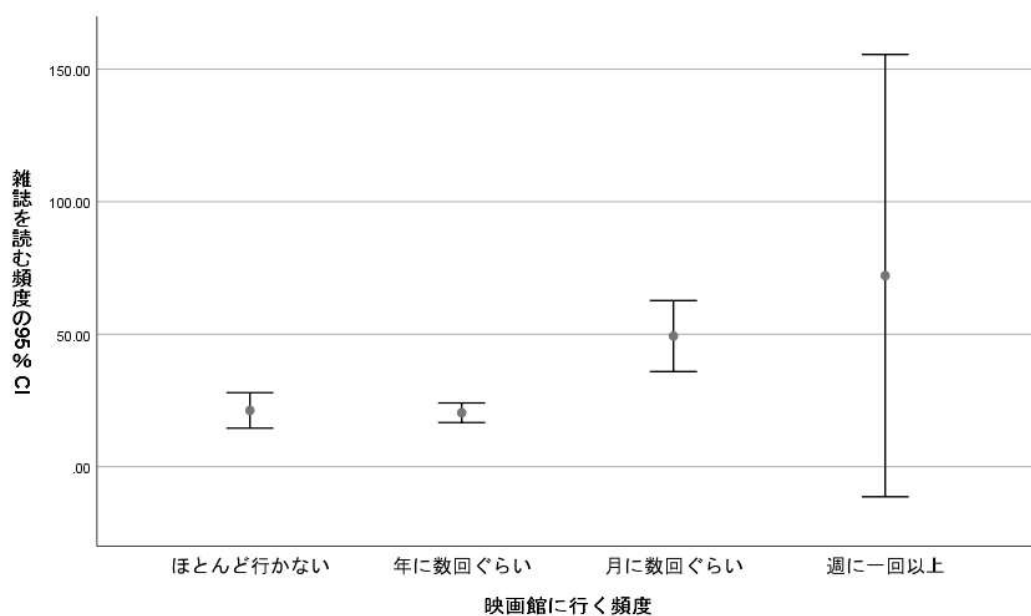


図 6：映画館に行く頻度別の雑誌を読む頻度の平均値 (エラーバーは 95%信頼区間)

「ライトなオタク」における雑誌を読む頻度は「映画館に行かない人」「ミーハー」より高い。文芸書、実用書、ビジネス書、学習参考書、専門書については、グループ間で読む頻度の明確な違いは認められなかった。

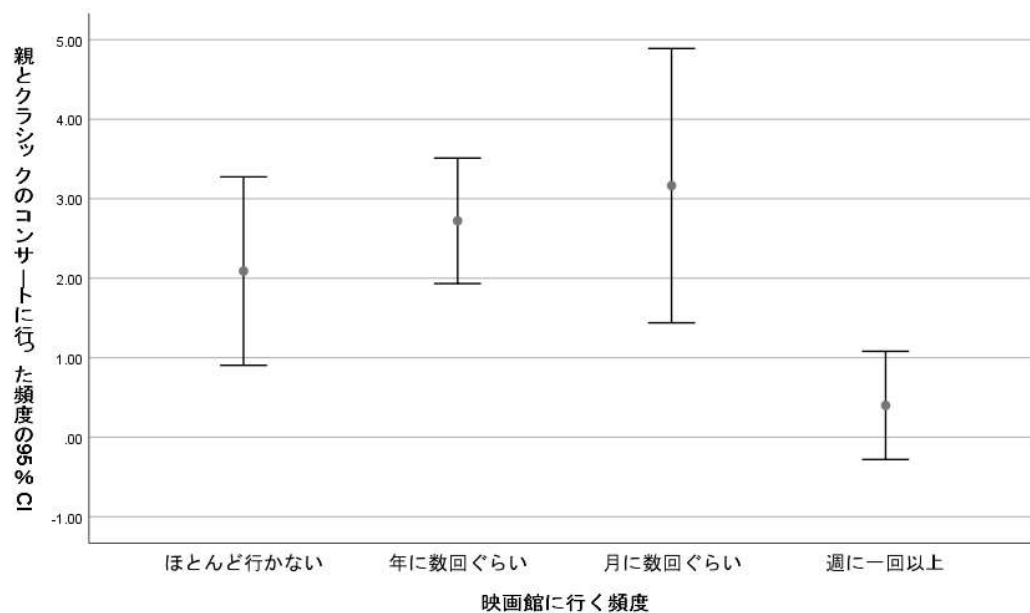


図 7：映画館に行く頻度別の親とクラシックのコンサートに行った頻度の平均値
(エラーバーは 95%信頼区間)

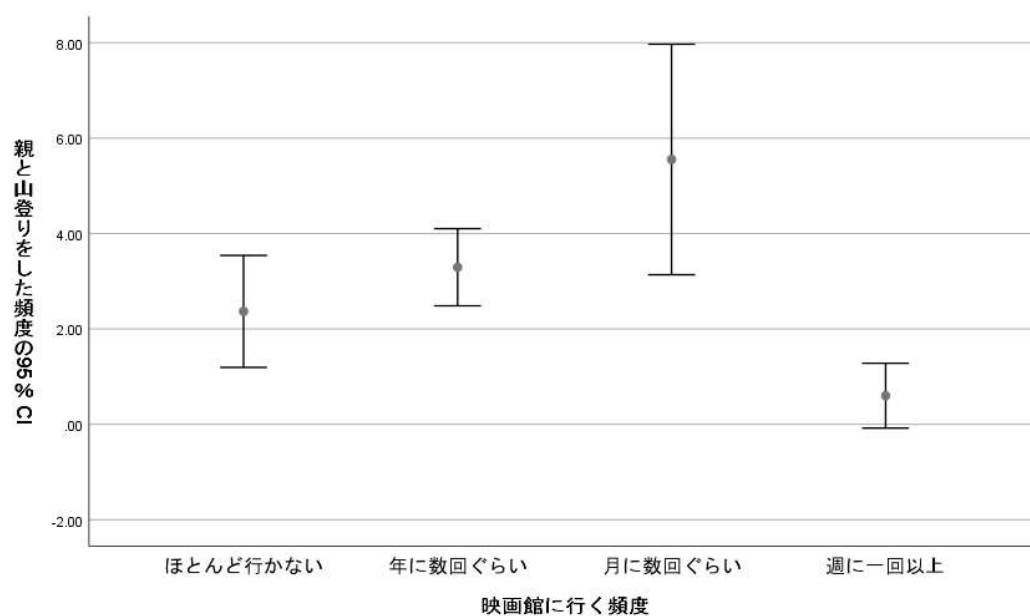


図 8：映画館に行く頻度別の親と山登りをした頻度の平均値 (エラーバーは 95%信頼区間)

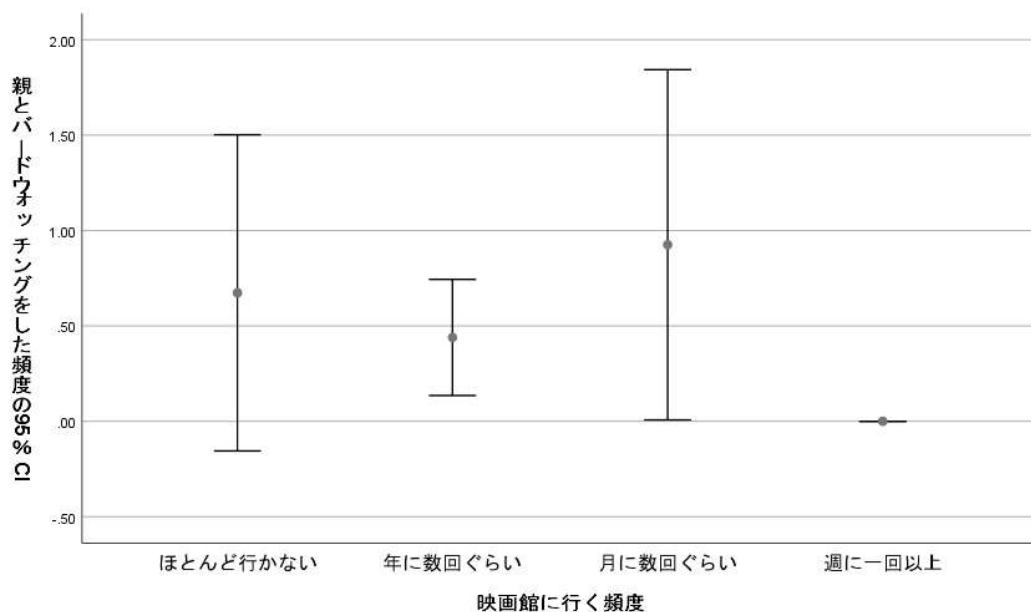


図9：映画館に行く頻度別の親とバードウォッチングをした頻度の平均値
(エラーバーは95%信頼区間)

「ヘヴィなオタク」において親とクラシックのコンサートに行った頻度、親と山登りをした頻度は「映画館に行かない人」「ミーハー」「ライトなオタク」より低い。また、「ヘヴィなオタク」が親とバードウォッチングをした頻度は0である。親に本の読み聞かせをしてもらった、親に勉強を教えてもらった、親と美術館・博物館に行った、親と海外旅行に行った、親と地域のイベントに行った、親と写真館に行った、親と天体観測をした頻度については、グループ間で明確な違いは認められなかった。

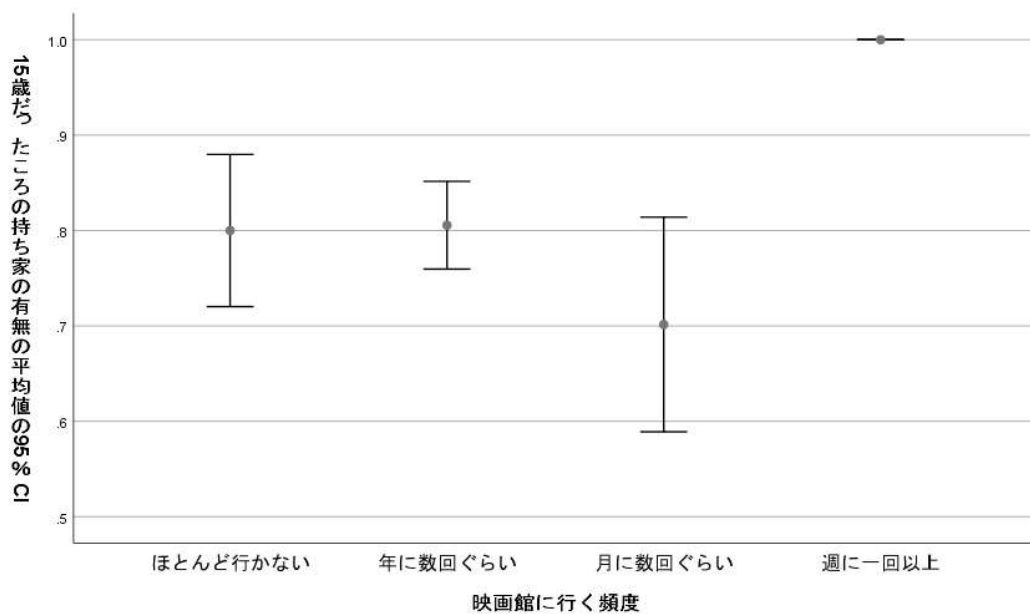


図 10：映画館に行く頻度別の 15 歳だったころの持ち家の有無の平均値
(エラーバーは 95%信頼区間)

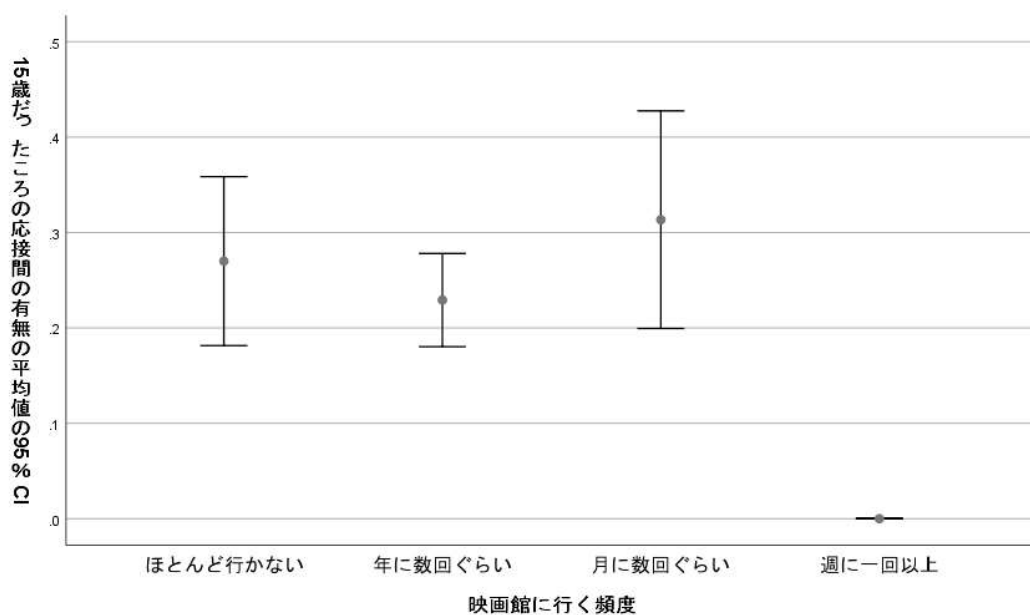


図 11 映画館に行く頻度別の 15 歳だったころの応接間の有無の平均値
(エラーバーは 95%信頼区間)

「ヘヴィなオタク」においては、全員が持ち家に住んでいた一方、応接間があった者はいなかった。田畑・山林、自分専用の部屋、パソコン・ワープロ、電話、文学全集、ピアノ、一眼レフ・ビデオカメラ、DVDレコーダー、テレビ、百科事典、自家用車、美術品・骨董品、ゲーム機、別荘、学習机、オーディオ機器の有無については、グループ間で明確な違いは認められなかった。

また、演劇を見に行く頻度、美術館へ行く頻度、15歳のころ家にあった本の冊数については、グループ間で明確な違いは認められなかった。

3.2.2 映画館に行く頻度に応じた文化消費・家庭環境の差異（小括）

調査の結果、大きく分けて三つのことが明らかになった。一つ目は、「ミーハー」「ライトなおタク」と「映画館に行かない人」との間の差異である。図1～図3、図5にあるように、それは音楽の視聴頻度（J-POP、洋楽POP、邦楽ロック）、ライブへの参加頻度（邦楽ロック）を問う質問で現れた。ここにおいて「ライトなおタク」は「映画館に行かない人」よりも常に高い平均値を示した。「ミーハー」もほとんど同様であった。二つ目は、「ライトなおタク」と「映画館に行かない人」「ミーハー」との間の差異である。図6にあるように、それは書籍を読む頻度（雑誌）を問う質問で現れた。ここにおいて、「ライトなおタク」は「映画館に行かない人」「ミーハー」よりも高い平均値を示した。三つめは、「ヘヴィなおタク」の特異性である。図4、図7によれば、「ヘヴィなおタク」は他の3グループと比べてクラシックに関心が薄い。また、図8～図9によれば、「ヘヴィなおタク」は他の3グループと比べて野外活動に消極的である。そして、図10～図11によれば、「ヘヴィなおタク」は全員持ち家に住んでおり、その家には応接間がなかった。

4 考察と課題

本稿では、映画館に行く頻度に注目し、これに応じて文化消費・家庭環境がどのように異なるのかを検証した。それにあたって「全体的には「ミーハー」「ライトなおタク」が傾向を一としており、そのうえで、両者にも何らかの差異がある」「ヘヴィなおタク」の示す傾向は特異である」という仮説を立てた。分析の結果、映画館に行く頻度によって「ライトなおタク」「ミーハー」と「映画館に行かない人」の間、「ライトなおタク」と「ミーハー」「映画館に行かない人」の間にそれぞれ差異があることが分かった。また、「ヘヴィなおタク」とほかの3グループの間には差異があると推定された（該当者が少ないため）。したがって、仮説のうち前者は証明され、後者は証明できる可能性が認められた。

以下、この結果について考察する。

今回の調査では、音楽の視聴頻度（J-POP、洋楽POP、邦楽ロック）やライブへの参加頻度（邦楽ロック）における「ミーハー」「ライトなおタク」と「映画館に行かない人」の間の境界、書籍を読む頻度（雑誌）における「ライトなおタク」と「映画館に行かない人」「ミーハー」の間の境界が発見された。そこで、便宜上前者の境界を「境界1」、後者の境界を「境界2」としたうえで、この境界がなんであるのかを考えてみると、境界1はアクセスが極めて容易な共通文化に対する積極性、境界2はアクセスが比較的容易な共通文化に対する積極性であると推測される。というのも、上記3種類の音楽は人を選ばず親しまれているだろうし、おそらく漫画週刊誌であろう雑誌も非常にポピュラーだからである。両者の違いは、音楽が携帯端末さえあれば

時間や場所をほとんど選ぶことなく容易に楽しめる一方で、漫画週刊誌は定期的に店舗で購入せねばならず、携行もしづらいことだろう。境界 1 と境界 2 の性質を分けるのはそのような微細な点である。そしてこれらよりもアクセスのハードルが高い共通文化や、そもそも共通文化ではないものは、境界となり得ないのだと思われる。これは、家庭環境についての質問項目が一切差異とならなかった結果とも符合する。もっとも、この推測のもとでは邦楽ロックへの参加頻度だけが差異として現れた理由や、文芸書を読む頻度が差異として現れなかった理由を説明できない。

また、「ヘヴィなオタク」の特異な点からは、このグループに共通する像が推定される。それは、一般家庭に生まれ、都市部の戸建て住宅で育った、屋内型の人間である。というのも、「映画館に行くこと」に深く親しんでいる以上、その生まれは映画館へのアクセスが容易な都市部であると考えられるからである。また、クラシックへの関心が薄いことから、出身階層は高いわけでもない。家に応接間がないことは、こうした状況に合致する。もっとも、繰り返しになるが、本グループの該当者は 5 名である。

最後に、今回の調査対象が京都大学の学生であったことを指摘しておく。

以上から、今後の課題としては各文化活動へのアクセシビリティを数値化すること、より大規模な調査によって「ヘヴィなオタク」の傾向を詳しく明らかにすることが挙げられる。

文献

- 橋本健二, 1988, 「文化評価の構造と文化の階層性」『静岡大学教養部研究報告（人文・社会篇）』第 24 巻第 2 号, pp.151-166.
- 片岡栄美, 2000, 「文化的寛容性と象徴的境界」, 今田高俊編『社会階層のポストモダン』（日本の階層システム 5）東京大学出版会, pp.81-220.

文化資本と父母の子育てへの参加態度の関係

小野 紘子

1 問題設定

文化資本は親の子育てへの参加態度とどの程度関係があるのだろうか。文化資本が親から子へ受け継がれる傾向にあることは広く知られている。しかし、財産やモノなどの客体化された形態の文化資本ならともかく、制度化された形態の文化資本や、身体化された形態の文化資本は機械的に受け継がれることはないだろう。父母の子育てへの能動的な参加があつてこそ、子どもはどのような文化資本を獲得する機会を得るのではないだろうか。また、現代の日本では、幼少期の教育がその後の子どもの発達や教養にとって重要であることは自明であるように思われる。そこで本稿では、父母の子育てが手厚いほど子どもの文化資本は高くなると仮定し、以下、この仮説が正しいかどうかを統計的手法を用いて分析する。

2 分析方法

2.1 データ

2018 年 10 月に京都大学の学生を対象に質問紙調査「文化活動に関する意識調査」を実施した（有効回答数 474）。

2.2 使用する変数

従属変数を「文化資本の高さ」、独立変数を「父母の子育てへの参加具合」とする。

文化資本の高さの指標として、一般的にクラシック音楽の視聴頻度が挙げられる。そこで本分析では以下の質問項目を用いる。

問 2 あなたは以下のような音楽を好んで聴いていますか。

VI クラシック

「1 よく聞く」「2 ときどき聞く」「3 あまり聞かない」「4 まったく聞かない」の四点尺度で尋ねた。

本分析では数字が大きくなるほど視聴頻度が高くなるように数字を反転させている。

父母の子育てへの参加具合については、以下の指標を用いる。

問 7 あなたが 15 歳までに、次のようなことをご両親にしてもらったことがありますか。

- I 本の読み聞かせ
- II 勉強を教えてもらう
- III 美術館・博物館に連れて行ってもらう

すべて「1 よくある」「2 ときどきある」「3 あまりない」「4 まったくない」の4点尺度で尋ねている。

ここでも質問項目に加工を行った。それぞれの回答において、数字が大きくなるほど父母が上記のことを積極的に行ったことを表すように数字を反転させている。

また、父親の家事や子育てに関する質問項目も利用する。

問8 あなたが15歳だったころ、あなたの父親は次のどのタイプでしたか。

回答は「1 家事も子育ても母親任せ」「2 家事は母親まかせ、子育てには協力的」「3 家事には協力的、子育ては母親まかせ」「4 家事も子育ても協力的」「5 そのとき父はいなかった」の五択である。

本分析では、家事、子育てへの参加具合に応じて1は1点、2と3は2点、4は3点を割り当てた。5は分析上の都合で欠損値として除外している。また、表記の都合上この質問項目は以下「父親のタイプ」と記す。

これら4変数の記述統計量は以下の表1のとおりである。

表1：父母の子育てへの参加具合の記述統計量

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
本の読み聞かせ	466	1	4	3.191	0.92283
勉強を教えてもらう	466	1	4	2.5751	1.02639
美術館・博物館に連れていく	466	1	4	2.588	0.99341
父親のタイプ	427	1	3	1.9906	0.77515

また、これら4変数の相関は以下のようになった。

表2：父母の子育てへの参加具合の相関

		本の読み聞かせ	勉強を教えてもらう	美術館・博物館に連れていく	父親のタイプ
本の読み聞かせ	Pearson の相関係数	1	.392**	.368**	0.055
勉強を教えてもらう	Pearson の相関係数	.392**	1	.368**	.139**
美術館・博物館に連れていく	Pearson の相関係数	.368**	.368**	1	0.09
父親のタイプ	Pearson の相関係数	0.055	.139**	0.09	1

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

父母の子育てへの参加具合の指標としてこの4変数を足し合わせたものを使用する。

3 分析結果

父母の子育てへの参加具合と文化資本の高さの重回帰分析の結果は表3のようになった。

表3：重回帰分析の結果

	係数	標準誤差	有意確率
(定数)	1.304	0.224	0
本の読み聞かせ	-0.025	0.06	0.676
勉強を教えてもらう	0.074	0.056	0.185
美術館・博物館に連れていく	0.226	0.056	0
父親のタイプ	0.03	0.064	0.636

a 従属変数 クラシック

父母の子育てへの参加具合とクラシック音楽の視聴頻度の相関関係は表4のようになった。

表4：父母の子育てへの参加具合とクラシック音楽の視聴頻度の相関関係

		父母の子育てへの 参加具合	クラシック 視聴頻度
父母の子育てへの参加具合	Pearson の相関係数	1	.204**
クラシック視聴頻度	Pearson の相関係数	.204**	1

また、父母の子育てへの参加具合別のクラシック音楽の視聴頻度のエラーバーは以下の図1のようになった。

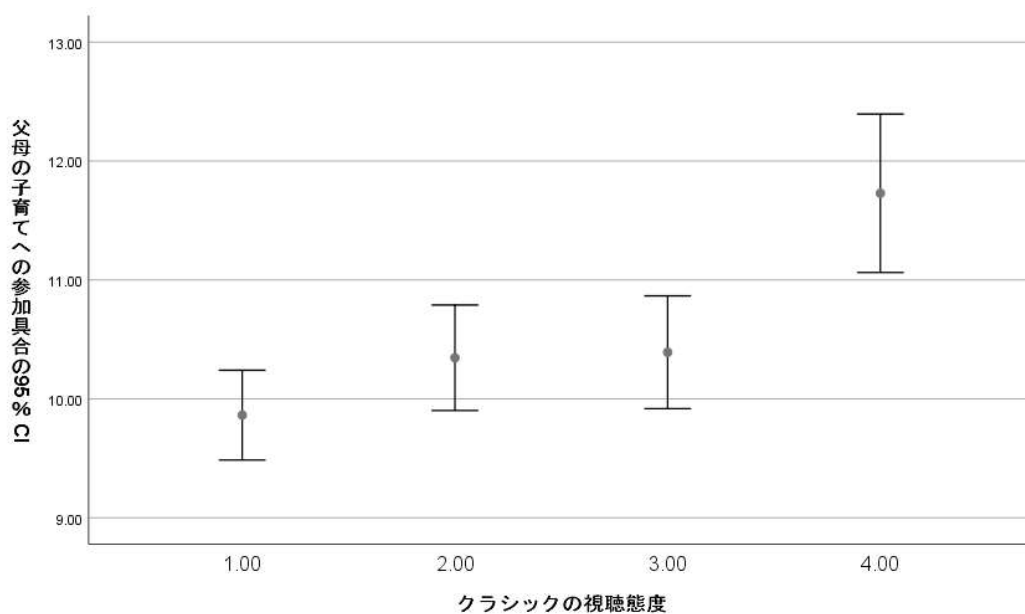


図 1： 父母の子育てへの参加具合別のクラシック音楽の視聴頻度（エラーバーは 95%信頼区間）

図 1 を見ると、父母の子育てへの参加具合が高いほどクラシック音楽の視聴頻度が高い傾向にある。両者の相関係数は 0.204 で高いとは言えないが、弱い正の相関が認められる。

4 考察

予想通り、父母の子育てへの参加具合が高いほど、子どもは文化資本を獲得する傾向にあるようだ。しかし、今回の調査では京都大学の学生を対象にしているため、そもそも一般の人々とは性質が異なっており、かなりの偏りがあると推測される。今後、より普遍的な人々に対する文化資本と子育てに関する調査についても検討していく必要があるだろう。

文献

松岡亮二・中室牧子・乾友彦（2014）「縦断データを用いた文化資本相続過程の実証的検討」『教育社会学研究』 95: 89-110.

本間千尋（2013）「戦後日本におけるクラシック音楽に関する研究——文化資本としてのクラシック音楽と近代的聴衆の崩壊」『三田学会雑誌』 106(2): 297-319.

両親の学歴と家族イベントの開催頻度との関係

吉住 愛

1 Introduction

幼少期の親とのかかわり方が、子供の人格形成に広く影響するという事は、心理学の分野の共通認識であり、世間一般の常識としても広く知られていることである。そこで親たちは、子供に社会経験を積ませたり、子供の情緒やコミュニケーション能力の発達を促したりするために、時間を割いて様々な文化的活動をさせようとする。本調査では、幼少期に親が子供といっしょに家庭内で、あるいは外出してともに文化的活動に励むことを、「家族イベント」と定義する。では、この家族イベントの開催頻度に影響する要因は何であろうか。一つの案として、「親の学歴」というものが考えられる。なぜなら、高学歴であるほど文化的活動への意欲が高く、子供にも文化的経験をさせようとする意欲が高いと考えられるからである。また、高学歴であるほど経済的な余裕があり、費用の掛かる文化的活動にも積極的に取り組む余裕があると予想される。仮にこの仮説が正しいとしたら、親の学歴によって、子供に与える文化的経験の頻度に差が出てしまっているという課題の存在があらわになる。これは、格差の再生産にもつながりかねない問題である。そこで、本研究では、京大生 474 名に対して行った、文化活動経験についての質問紙調査の結果をもとに、親の学歴と家族イベントの開催頻度との関係性について分析していく。

2 Method

今回用いる質問紙中の質問は、家庭で行われた家族イベントの種類や頻度について尋ねた問 7:「あなたが 15 歳までに、次のようなことをご両親にしてもらったことがありますか」と、両親の最終学歴について尋ねた問 9:「あなたの親が最後に言った学校は次のどれに当たりますか」である。

問 7 では、以下の 10 種類の家族イベントについての開催頻度を訪ねている。

1. 本の読み聞かせ
2. 勉強を教えてもらう
3. 美術館・博物館に連れていく
4. クラシック音楽のコンサートに連れていく
5. 海外旅行に連れていく
6. 地域のイベントに連れていく
7. 写真館に連れていく
8. 山登りに連れていく
9. いっしょに天体観測する

10. いっしょにバードウォッチングする

頻度は、「よくある」：1、「時々ある」：2、「あまりない」：3、「全くない」：4で回答してもらったが、今回の分析では開催した家族イベントの種類が多く、頻度が高いほど大きな数値を割り当てる必要があるため、「よくある」：3、「時々ある」：2、「あまりない」：1、「まったくない」：0となるよう値の再割り当てを行った。これにより、問7の1～10にすべて回答した場合の合計値は、どの家族イベントも全く開催しなかった場合には最小値0、すべての家族イベントをよく開催した場合最大値30をとるように設定された。さらにわかりやすくするため、このうち、数値が1～10となったグループを、「家族イベントの開催種類や頻度が比較的少ないグループ」として、値「1」をわりあて、数値が11～20となったグループを、「家族イベントの開催種類や頻度が中間であるグループ」として値「2」を割り当て、数値が21～30となったグループを「家族イベントの開催種類や頻度が比較的多いグループ」として値「3」を割り当てた。これにより、各回答者の家庭での家族イベントの開催頻度に対して、少ないほうから1、2、3という3段階の数値が割り当てられた。最終的な問7の値の度数分布表は表1のとおりである。

表1：家族イベント開催頻度の度数分布表

	値	度数	パーセント
家族イベントの開催頻度少	1	12	2.5
頻度中	2	252	53.2
頻度高	3	199	42
	合計	463	97.7
欠損値	システム欠損値	11	2.3
合計		474	100

次に問9に関しては、質問紙上では父親、母親のそれぞれの最終学歴について、「中学校」：1、「高校」：2、「高専」：3、「短大」：4、「大学」：5、「大学院」：6と回答してもらった。両親の学歴をひとまとめにして分類して点数化するために、両親ともに短大以下であれば「1」、一方が短大以下で他方が大学以上の場合「2」、両親ともに大学以上であれば「3」という値をとるよう値の再割り当てを行った。最終的な問9の値の度数分布表は表2のとおりである。

表 2：両親の学歴の度数分布表

	値	度数	パーセント
両親ともに短大以下	1	68	14.3
一方が短大以下、他方が大学以上	2	147	31
両親ともに大学以上	3	219	46.2
	合計	434	91.6
欠損値	システム欠損値	40	8.4
合計		474	100

3 Results

両親の学歴と家族イベントの多さのクロス集計表は表 3 のとおりである。

表 3：両親の学歴と家族イベントのクロス集計表

		家族イベントの多さ			合計
		1	2	3	
両親の学歴	1	1	24	42	67
	2	2	78	66	146
	3	5	139	75	219
合計		8	241	183	432

両親の学歴が 1（比較的低い）のグループは、家族イベントの開催頻度が 2（高頻度）である人が最も多いのに対し、両親の学歴が 2, 3（中程度、比較的高い）のグループは、ともに家族イベントの開催頻度が 2（中程度）である人が最も多く、両親の学歴が高くなるほど家族イベントの開催頻度が高くなる傾向はあまり見られない。

また、両親の学歴と家族イベントの開催頻度の相関は表 4 のとおりである。

表 4：家族イベントと両親の学歴の相関

		家族イベントの多さ	両親の学歴
家族イベントの多さ	Pearson の相関係数	1	-.195**
	有意確率 (両側)		0
	度数	463	432
両親の学歴	Pearson の相関係数	-.195**	1
	有意確率 (両側)	0	
	度数	432	434

相関係数はマイナスの値をとっており、有意な正の相関は見られないことがわかる。

また、両親の学歴と家族イベントの開催頻度の関係を表すエラーバーは図1のとおりである。

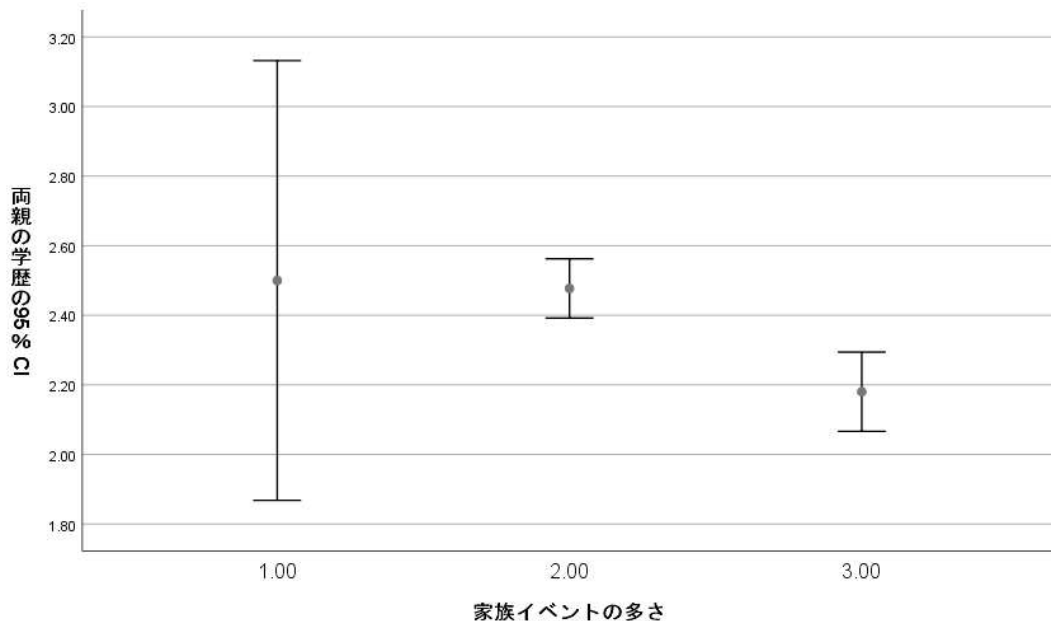


図1：家族イベントの多さ別、両親の学歴

家族イベントの開催頻度が中程度のグループの両親の学歴は、家族イベントの開催頻度が高いグループの両親の学歴より高くなっており、両親の学歴の高さと家族イベントの開催頻度との間に相関は見られない。

4 Discussion

本調査によると、意外にも両親の学歴と家族イベントの開催頻度の間には、有意な相関は見られなかった。よって、冒頭でたてた「親の学歴が高いほど家族イベントの開催頻度が高い」という仮説は誤りであることが分かった。

今回の調査では、調査対象が全員京大生であり、家族イベントの開催頻度が少ないグループに分類された人数が全体の2.5%にしか満たなかった。つまり、家族イベントの開催頻度が中程度以上の家庭で育った人の割合が非常に高かった。また、両親の学歴に関しても、両親ともに短大以下と答えた人の割合は14.3%にとどまった。これに対し、社会全体について考えると、家族イベントの開催頻度や両親の学歴は京大生だけを抽出した場合とは異なる分布になると考えられる。今後の課題としては、一つの大学に所属する学生に限定せず、幅広い集団から対象者をランダムにピックアップし、同様の調査を行い、異なる結果が出るのかどうか確かめる必要があるだろう。

文献

松岡亮二・中室牧子・乾友彦, 2014, 「縦断データを用いた文化資本相続過程の実証的検討」『教育社会学研究』 95: 89-110.

池上淳, 2006, 「格差社会における人間発達の課題——文化資本蓄積による教育改革の展望を中心として」『教育学研究』 73(4): 324-335.

親の学歴による本人の文化資本のジェンダー差

友田 朝子

1 はじめに

近年、格差問題が世界中の様々な国で注目を集めており、日本も例外ではない。その格差問題の一つとして、教育格差があげられる。「親の学歴や収入が高いほど子供の学力は高くなる」ということを示す調査はこれまで数多く行われており、P. ブルデューも文化的再生産論において、階層は世代間で再生産されていくとし、その原因を文化資本の格差に見出した。また、教育におけるジェンダー格差についても様々な調査が行われている。寺沢（2008）は社会環境・家庭環境が日本人の英語力に与える影響に関する調査において、女性の英語力のほうが、男性よりも環境から影響を受けやすいと述べている。そこで本稿では、ジェンダーによって親の学歴を通じた文化資本の相続に差があるのかということに注目し、本人の文化資本について、男性よりも女性のほうが親の学歴の影響を受けやすいか否かを検証する。ここでは、親の学歴の高低は、男性よりも女性に対してより大きな影響を与えるという仮説を立て、以下でこの仮説を検証していく。

2 方法

2.1 独立変数

独立変数には親の学歴を使用する。「あなたの親が最後に行った学校は次のどれにあたりますか」という質問に対し、父親と母親それぞれにおいて、「1 中学」「2 高校」「3 高専」「4 短大」「5 大学」「6 大学院」「7 わからない」までの7点尺度で答える質問項目である。これを、「1 短大以下」「2 大学以上」の2つに分類し、「7 わからない」と答えている回答は欠損値として排除した。

2.2 従属変数

次に、従属変数に使用する質問を選ぶために、しばしば文化資本の尺度として使われるクラシック音楽の視聴頻度と、その他の音楽の視聴頻度、文化活動の頻度との相関係数を計算し、主成分分析を行うことで、文化資本の尺度として有効な変数の候補をいくつか選んでいく。

2.2.1 変数の説明

以下の質問に対する回答を用いる。

「あなたは以下のような音楽を好んで聞いていますか」という質問で、J-POP、洋楽 POP、邦楽ロック、洋楽ロック、ジャズ、クラシック、アニソンの7つに関して、「よく聞く」「ときどき

聞く」「あまり聞かない」「まったく聞かない」の4択で尋ね、それぞれに1～4の数値を割り振っている。また、文化活動の頻度に関する質問では、「あなたは以下の文化活動をどれくらいの頻度で行いますか」という質問で、「演劇を観に行く」「美術館へ行く」「映画へ行く」の3つに関して、「週に1回以上」「月に数回ぐらい」「年に数回ぐらい」「ほとんど行かない」の4択で尋ね、それぞれに1～4の数値を割り振っている。

2.2.2 分析結果

まず、相互の相関関係を表1に表す。

表1：相関行列

	J-POP	洋楽POP	邦楽ロック	洋楽ロック	ジャズ	クラシック	演劇を観に行く	美術館へ行く	映画館へ行く
J-POP	1	0.304	0.343	0.066	-0.008	-0.08	-0.041	-0.088	0.225
洋楽POP	0.304	1	0.183	0.439	0.197	0.106	0.14	0.069	0.228
邦楽ロック	0.343	0.183	1	0.496	0.161	-0	0	0.025	0.162
洋楽ロック	0.066	0.439	0.496	1	0.391	0.177	0.112	0.159	0.176
ジャズ	-0.008	0.197	0.161	0.391	1	0.506	0.246	0.208	0.021
クラシック	-0.082	0.106	-0.001	0.177	0.506	1	0.253	0.232	-0.014
演劇を観に行く	-0.041	0.14	0	0.112	0.246	0.253	1	0.406	0.11
美術館へ行く	-0.088	0.069	0.025	0.159	0.208	0.232	0.406	1	0.194
映画館へ行く	0.225	0.228	0.162	0.176	0.021	-0.01	0.11	0.194	1

表1より、クラシックの視聴頻度と最も相関が高いのはジャズで.506である。さらに、「演劇を観に行く」「美術館へ行く」との相関係数もそれぞれ.253、.232であり、クラシックの視聴頻度との相関をある程度見込めると考えられる。これを主成分分析にかけた結果の固有値と累積説明率が表2である。それを2次元空間にプロットしたのが図1である。

表 2：固有値と累積説明率

成分	固有値	説明率	累積説明率
1	2.451	27.229	27.229
2	1.709	18.985	46.214
3	1.16	12.892	59.107
4	0.86	9.559	68.666
5	0.775	8.614	77.28
6	0.731	8.123	85.403
7	0.555	6.171	91.573
8	0.459	5.097	96.67
9	0.3	3.33	100

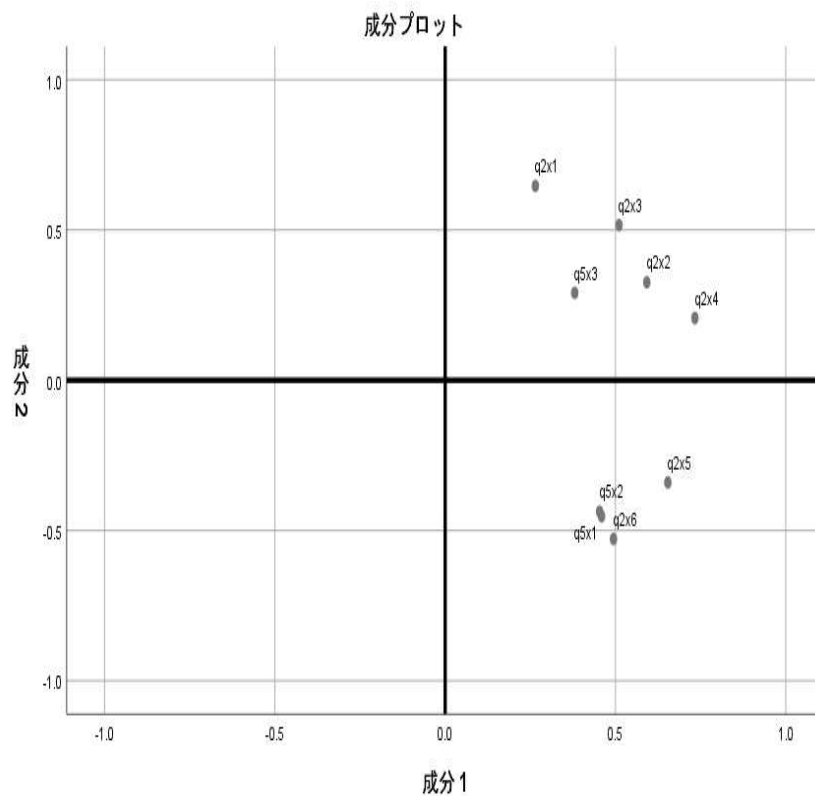


図 1 主成分分析の結果

※ q2x1J-POP、q2x2 洋楽 POP、q2x3 邦楽ロック、q2x4 洋楽ロック、q2x5 ジャズ、
q2x6 クラシック、q2x7 アニソン、q5x1 演劇、q5x2 美術館、q5x3 映画館

図 1 を見ると、q2x6 クラシックと近いのは q5x1 演劇を観に行くのと q5x2 美術館へ行くであり、q2x5 ジャズも比較的近くに位置している。以上から文化資本の指標としてはジャズの視聴頻度、「演劇を観に行く」「美術館へ行く」頻度が有望であるといえる。ここでは、クラシックの

視聴頻度に加え、ジャズの視聴頻度、演劇を見に行く頻度を文化資本の尺度として利用することとする。

3 結果

親の学歴別にみた本人の文化資本の平均値をそれぞれ男女ごとに計算し、グラフにしたのが、図2、図3、図4、図5、図6、図7である。文化資本の尺度として使用している質問について、ここでは数値が大きくなるほど頻度が増えるように変数を反転させている。

3.1 クラシック音楽の視聴頻度と親の学歴

図2、図3を見ると、男女とも、親の学歴が高いほどクラシック音楽の視聴頻度は高くなっているが、男子よりも女子のほうが、親の学歴が短大以下である場合と大学以上の場合で大きな差が出ていることが分かる。

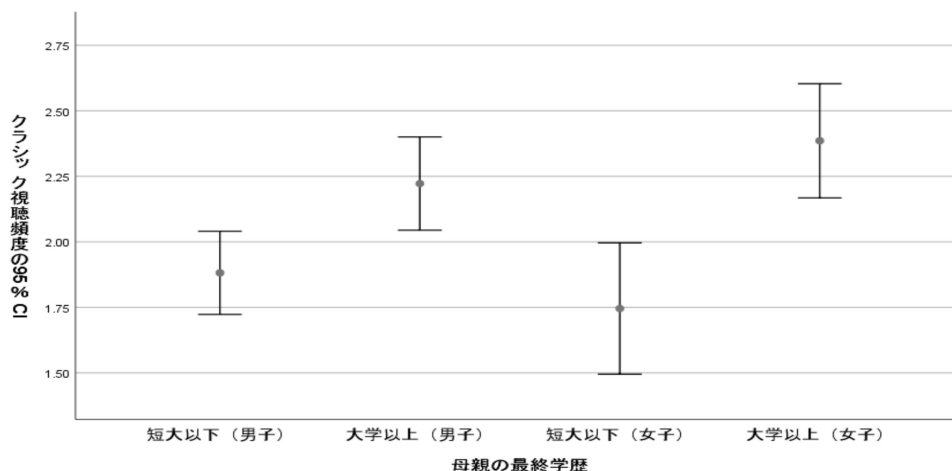


図2：母親の学歴別クラシック音楽視聴頻度の平均値

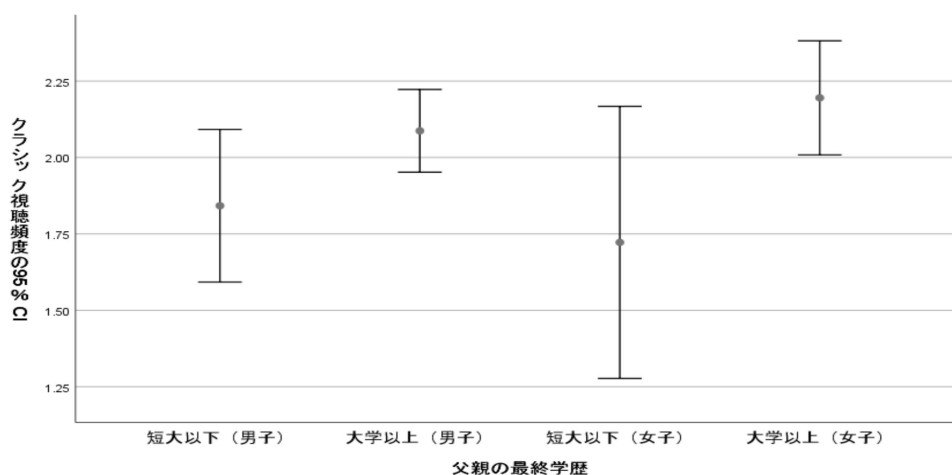


図3：父親の学歴別クラシック音楽視聴頻度の平均値

3.2 ジャズ音楽の視聴頻度と親の学歴

図4、図5を見ると、親の学歴が短大以下である場合と大学以上の場合で、男子のジャズの視聴頻度の差はわずかなものである。一方、女子の場合は、親の学歴によってその差は明らかに大きいといえる。

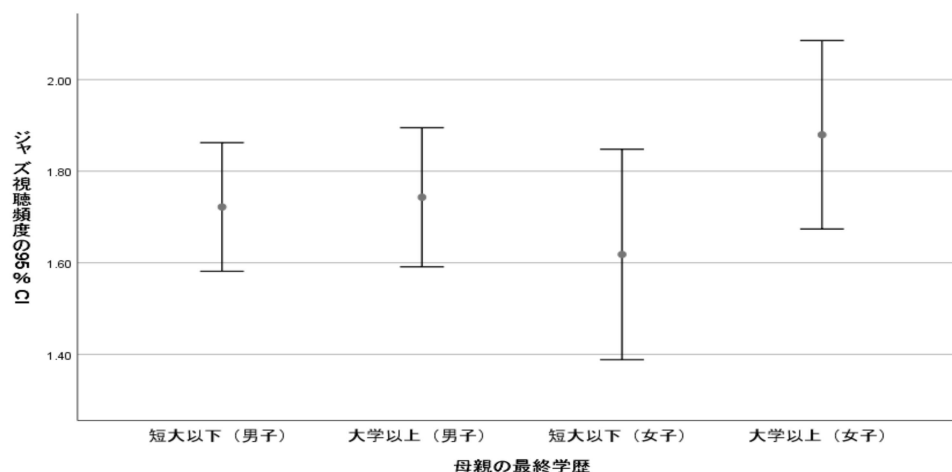


図4：母親の学歴別ジャズ音楽視聴頻度の平均値

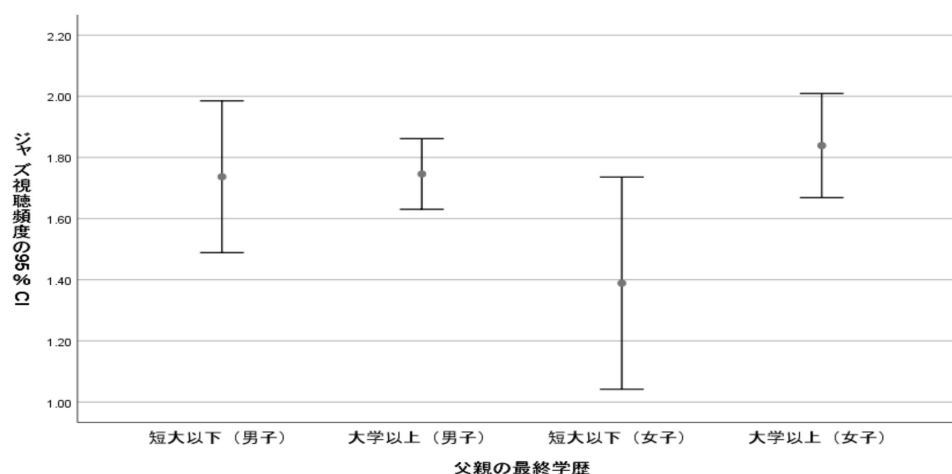


図5：父親の学歴別ジャズ音楽視聴頻度の平均値

3.3 演劇を見に行く頻度と親の学歴

図6、図7を見ると、親の学歴が短大以下である場合と大学以上の場合で、男子の演劇を見に行く頻度の差は小さく、さらに、わずかではあるが、父親の最終学歴が短大以下の場合のほうが、大学以上である場合よりも演劇を見に行く頻度の平均値が高くなっている。一方、女子においては、親の学歴が高いほうが演劇を見に行く頻度が多く、親の学歴による差は男子に比べて明らかに大きいといえる。

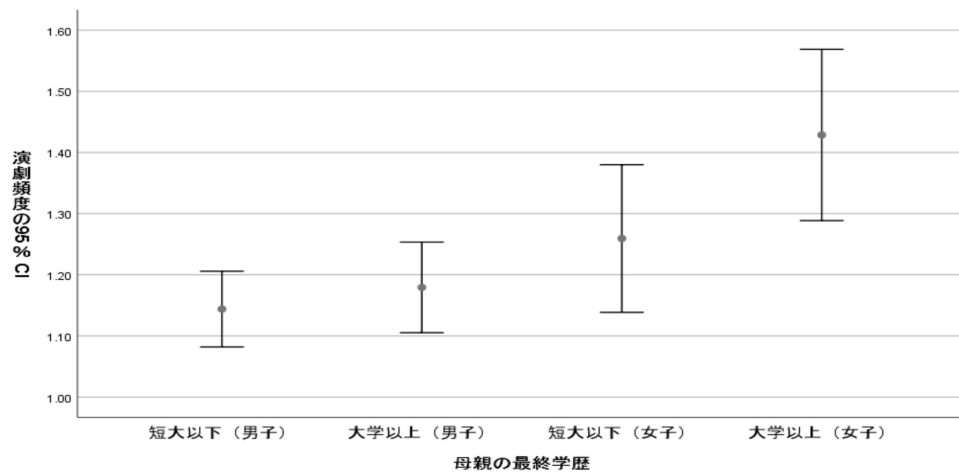


図 6：母親の学歴別演劇へ行く頻度の平均値

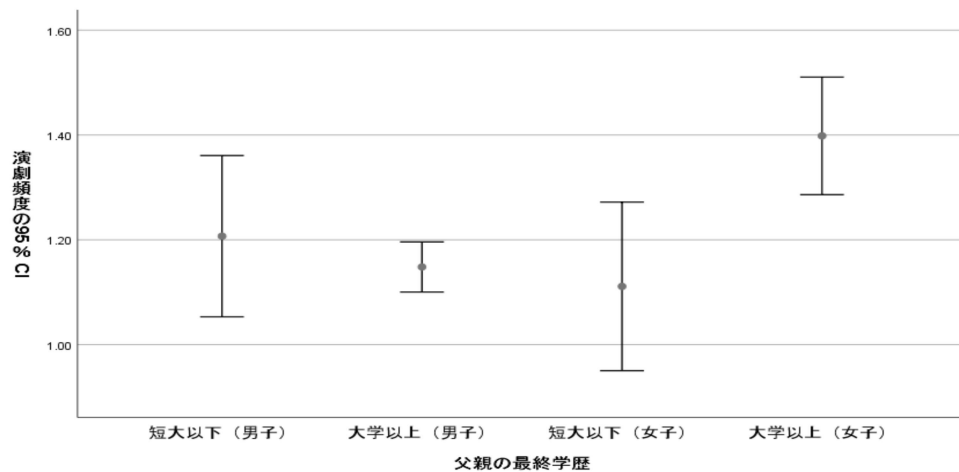


図 7：父親の学歴別演劇へ行く頻度の平均値

図 2、図 3、図 4、図 5、図 6、図 7 をみると、親の学歴が短大以下の場合と大学以上の場合で、男子よりも女子のほうが文化資本に大きな差が出ている。つまり、男子の場合、親の学歴が短大以下でも大学以上でも本人の文化資本にそれほど大きな差はみられないが、女子の場合、親の学歴が短大以下の場合に比べて、大学以上の場合のほうが本人の文化資本はかなり高くなるということがいえる。

4 考察

今回の分析結果を見ると、両親の学歴が短大以下の場合と大学以上の場合で、男子よりも女子のほうが文化資本に大きな差が出ている。つまり、男子の場合、親の学歴が短大以下でも大学以上でも本人の文化資本にそれほど大きな影響を与えないが、女子の場合、親の学歴が短大以下の場合に比べて、大学以上の場合のほうが本人の文化資本はかなり高くなるということがわかった。よって、本人の文化資本について、男性よりも女性のほうが親の学歴の影響を受けやすいという仮説はかなり支持できるものであるといえる。また本稿では、親の学歴が高くなるほど本人

の文化資本も高くなるということは自明のこととして、親の学歴別のジェンダー差に注目して分析を行ったのだが、男子の演劇を見に行く頻度については、父親の学歴が高いほうがその頻度が低くなるという意外な結果が出た。そのことをふまえ、男子の文化資本について図2と図3、図4と図5、図6と図7を比較してみると、わずかではあるが、学歴が高い母親をもつ男子のほうが、学歴が高い父親を持つ男子よりも、本人の文化資本が高くなっていることがわかる。以上のことより、今後の課題として、父親の学歴よりも母親の学歴のほうが本人の文化資本に大きな影響を与えるという仮説を検証していくことがあげられる。

文献

寺沢拓敬、2008、「社会環境・家庭環境が日本人の英語力に与える影響——JGSS-2003の2次分析を通して」『日本版 General Social Surveys 研究論文集[8]』107-120.

片岡栄美、1998、「音楽愛好者の特徴と音楽ジャンルの親近性——音楽の好みと学歴・職業」『関東学院大学人文科学研究所報』(22): 147-162.

子供時代の文化活動による影響の性別差

—大学生時の音楽的志向との関係において—

岡田 祐佳

1 Introduction

1.1 研究の背景

近年は、子供の教育に熱心な親が非常に多い。幼いころから様々な教育や文化活動を行うことによって、立派に育てようと躍起になっているようにも見えるが、果たして、その中のどれだけの努力が、子供に実際に影響を与えているのだろうか。あくまで子供の成長には個人差があり、親の教育以外にも様々な要素が関係しているため、明確な答えを出すことは困難である。しかし、本レポートにおいては、子供時代の文化活動が大学生になってからの音楽的志向にいかに関与するのか、ということについて、男女差の観点から分析することで、一つの示唆としたい。

1.2 仮説

子供時代の文化活動の経験の量が、現在の文化的志向に与える影響は、男性よりも女性に関しての方が大きいのではないかと考える。なぜなら、子供のいる家族の中で、文化的な活動を牽引しているのは、父親より母親であることが多いからである。それが正しいと仮定すると、母親と同姓の子供に対して、より強く影響を与えると考えて違和感はない。

2 Method

2.1 変数の加工

使用する変数は、性別（男・女・その他）、6種類の音楽ジャンルの視聴頻度（洋楽 POP・邦楽ロック・洋楽ロック・ジャズ・クラシック・アニソン）、15歳までに両親にしてもらったことの頻度（本の読み聞かせ、クラシックコンサートなど10種）の変数である。

まず、性別の変数は、今回の分析の簡略化のため、男性・女性の回答のみを採用した変数に加工する。次に、7種類の音楽ジャンルに関する変数を、1から4の値の順番を逆にし、よく聞く＝4、まったく聞かない＝1となるように変更した。その上で、文化活動との関連が深そうな3種類（ジャズ、クラシック、洋楽 POP）を足し合わせた変数を作成し、「音楽 A 群」とした。

また、子供時代の文化活動に関する変数を、1から4の値を逆の順番に変更し、その中で、知的な文化活動や情操教育に関わる文化活動と思われる5種類（読み聞かせ、勉強指導、美術館・博物館、クラシックコンサート、海外旅行）を足し合わせて「文化活動 A 群」とし、新しい変数を作成した。

さらに、これら4種類の新しい変数を、男性、女性についてそれぞれ足し合わせた変数を作成し、「男の（女の）活動A群」「男の（女の）音楽A群」とした。

2.2 変数の分析

子供時代の文化活動の、現在の音楽的志向への影響度合いを測るため、「活動A群」「音楽A群」の相関係数を計算し、続いて男女それぞれについて、「活動A群」と「音楽A群」の相関係数を計算し、比較した。

次に、「音楽A群」と、10種類の子供時代の文化活動の相関を、近接行列の分析によって求め、その中で特に有意な相関がみられる2変数について、男女それぞれの相関の比較を行った。

3 Results

表1：文化活動A群と音楽A群の相関

		音楽A群
文化活動A群	Pearson の相関係数	-0.003
	有意確率（両側）	0.953
	度数	461

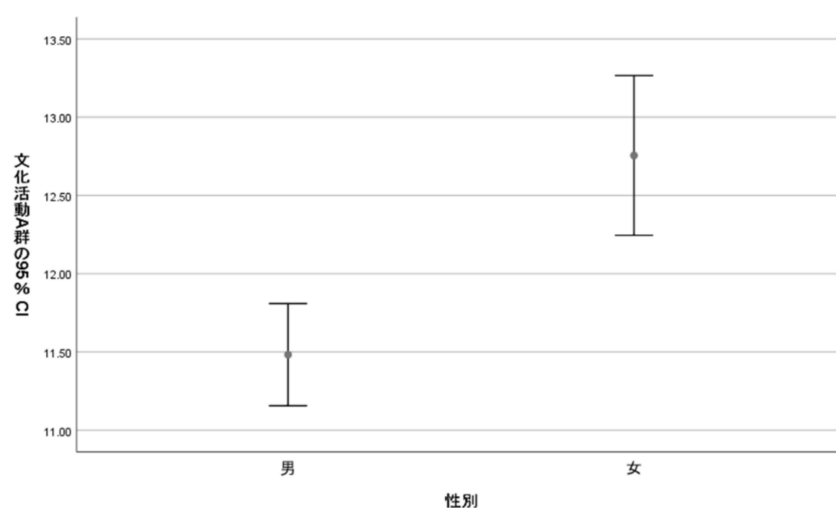


図1：文化活動A群の男女別平均値

文化活動A群の平均値は、男性の方が女性より大幅に低い。

表 2：男性の文化活動 A 群と音楽 A 群の相関

		男の音楽A 群
男の活動A 群	Pearson の 相関係数	-0.037
	有意確率 (両側)	0.509
	度数	312

表 3：女性の文化活動 A 群と音楽 A 群の相関

		女の音楽A 群
女の活動A 群	Pearson の 相関係数	0.036
	有意確率 (両側)	0.673
	度数	142

「文化活動 A 群」と「音楽 A 群」の男女合わせた相関はマイナスであるが、男女それぞれについて相関を見ると、男性に関してはマイナス、女性に関してはプラスの相関が見られることがわかる。

表 4：音楽 A 群と子供時代の文化活動 10 項目の近接行列

	値のベクトル間の相関									
	読み聞かせ	勉強指導	美術館・博 物館	クラシック コンサート	海外旅行	地域イベン ト	写真館	山登り	天体観測	バード ウォッチン グ
音楽A群	-0.070	-0.009	0.056	0.109	-0.094	0.022	0.052	0.017	-0.047	-0.031
音楽A群										

これは類似行列です

子供時代の文化活動の中で、「音楽 A 群」と正の相関関係にあるのは、「美術館・博物館」「クラシックコンサート」「地域イベント」「写真館」「山登り」である。その中でも、特に相関が大きいのは「美術館・博物館」と「クラシックコンサート」である。

表 5：男性の子供時代のクラシックコンサート、美術館・博物館の経験と
クラシック音楽視聴頻度の相関

		男のクラ シックコン サート	男の美術館 博物館
男の音楽A 群	Pearson の 相関係数	0.091	0.033
	有意確率 (両側)	0.108	0.558
	度数	312	313
**. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。			

表 6：女性の子供時代のクラシックコンサート、美術館・博物館の経験と
クラシック音楽視聴頻度の相関

		女のクラ シックコン サート	女の美術館 博物館
女の音楽A 群	Pearson の 相関係数	0.113	0.097
	有意確率 (両側)	0.180	0.249
	度数	142	142
**. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。			

表 4 の分析において、特に相関が大きかった 2 項目について、男女で相関の違いを見ると、やはり、どちらの項目についても、男性より女性の方が相関が大きいことがわかる。

4 Discussion

今回の分析結果から、子供時代の文化活動が大学生の音楽的志向に与える影響は、男性よりも女性について、より大きいということが考察される。

まず、表 1 で、「文化活動 A 群」と「音楽 A の群」の相関がマイナスを示していたことは意外であった。しかし、表 2、表 3 を見ると、それは男性において、この 2 変数が大きくマイナスの相関であることが原因であるとわかった。男性に関して、子供時代の知的な、もしくは情操教育に関わる文化活動（読み聞かせ、勉強指導、美術館・博物館、クラシックコンサート、海外旅行）は現在の文化的な音楽志向（ジャズ、クラシック、洋楽 POP）にあまり影響を与えていないようである。一方で、特に、「音楽 A 群」との強い相関関係にある「クラシックコンサート」「美術館・博物館」の経験に関して、女性の場合は非常に大きい「音楽 A 群」への相関が見られる。

仮説の通り、女性の方がより、子供時代の文化活動による影響を受けていると考えられる。そのため、女子の子供の場合は男子の子供に比べて、熱心に文化活動に参加させることの意義はより大きいのではないかという示唆が得られた。

しかし、それが、仮説で述べたように、子供時代の文化活動を主導していたのが母親であったからなのかを知るためには、今回は使用しなかった質問項目である、「15歳の頃の父親のタイプ（家事、子育ては母親任せ、など）の変数を用いて分析することが出来ると思う。このように、さらなる課題の追求のためには、子供時代の親との関係や、さらに細かくカテゴライズされた文化活動と現在の趣味嗜好との関係について調べるのが、今後必要になるだろうと予想される。加えて、今回の分析に際しては、図1にもあるように、そもそも男性は子供時代の文化活動（今回A群とした5種）の参加頻度が女性と比べて低いことがわかるため、男性の場合には、どのような子供時代の活動がより現在の志向に影響を与えるのか、またはそのような活動はないのかを判明させることも、今後非常に重要な課題である。

親子の性差は文化資本相続に影響を及ぼすのか？

——京大生を対象とするアンケート調査結果を用いた検討——

佐藤 慧

1 問題設定

社会学では、文化資本の相続において性差があるとする議論がある（片岡 1997; 片瀬 2004; 松岡ほか 2014; 中西 2017）。具体的には、子が女性の場合、母親の学歴が父親の学歴よりも子の文化資本保有量により強い効果を持つとする片岡（1997）の説がある。松岡ほか（2014）もこの説を支持する実証結果を得ている。一方、片瀬（2004）は、仙台市の高校生を対象とする調査をもとに、親または子の性別による効果は文化資本の種類によって異なるとしている。本論では京大生を対象とした調査結果を用いて、文化資本の相続の際の親および自身の性別の影響を文化資本の種類別に検討することを目的とする。

2 理論的背景

これまでの議論では、文化資本の相続について図1のような関係が想定されている。

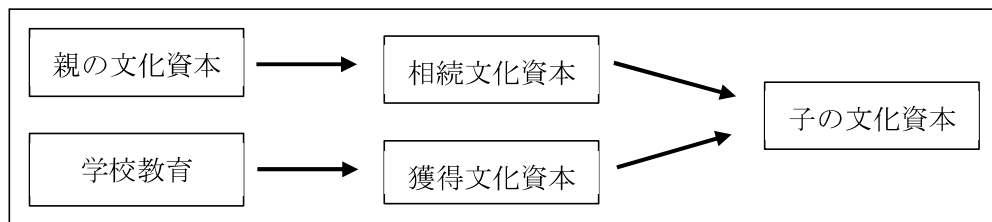


図1：文化資本の相続に関する概念図

相続文化資本は家庭内で獲得される文化資本、獲得文化資本は学校教育を通じて獲得される文化資本である。今回は上の変数のうち、親の文化資本と相続文化資本との間の相関の強さを男女別に分析する。

両親の文化資本の指標は父親学歴と母親学歴の二変数とする。学歴は文化資本の議論の中では「客体化された文化資本」に数えられる。また、子の相続文化資本の指標は片瀬（2004）にならって芸術文化資本と読書文化資本の二つを用意し、質問紙上の項目としては、前者は15歳時文化体験、後者は15歳時家庭蔵書量を用いることにする。

3 用いる変数の説明

3.1 両親の文化資本の指標

両親の文化資本の指標には父親の学歴（q9x1）と母親の学歴（q9x2）を変換した変数を用いる。質問紙上では「あなたの親が最後に行った学校は次のどれにあたりますか」と尋ね、「1 中学校」「2 高校」「3 高専」「4 短大」「5 大学」「6 大学院」「7 わからない」の七段階で回答を求めた。分析上では「7 わからない」は欠損値扱いである。

父親の学歴を示す変数 q9x1 と、母親の学歴を表す変数 q9x2 の度数分布表は以下のようになる。

表 1：父親の学歴

	度数	相対度数
中学校	2	0.4
高校	56	12.6
高専	10	2.2
短大	9	2
大学	290	65.2
大学院	78	17.5
合計	445	100

表 2：母親の学歴

	度数	相対度数
中学校	2	0.5
高校	59	13.3
高専	8	1.8
短大	142	32
大学	212	47.7
大学院	21	4.7
合計	444	100

表 1 と表 2 より、上の二変数は正規分布に従っていないことが明白である。この問題に対処するため、「短大以下」を 0、「大学以上」を 1 となるようにコーディングし直し、両変数を二値変数に変換する。各変数の記述統計量と相関行列は以下の通りである。

表 3：両親の文化資本の指標となる変数の記述統計量

	度数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
父親の学歴	460	0.83	0.37	0＝短大以下	1＝大学以上
母親の学歴	459	0.54	0.50	0＝短大以下	1＝大学以上

表 4：両親の文化資本の変数間の相関行列

	母親学歴
父親学歴	.381**

**p<.01

3.2 相続文化資本の指標

相続文化資本の指標として用いるのは、芸術文化資本を表す 15 歳時文化体験(q7)と読書文化資本を表す 15 歳時家庭蔵書量 (q6) の二変数である。

3.2.1 芸術文化資本

芸術文化資本の指標となるのは 15 歳時文化体験である。質問紙上では「あなたが 15 歳までに、次のようなことをご両親にしてもらったことがありますか」と尋ねた。回答となる頻度は「1 よくある」「2 ときどきある」「3 あまりない」「4 まったくない」の四段階に設定し、これを「Ⅰ、本の読み聞かせ」「Ⅱ、勉強を教えてもらう」「Ⅲ、美術館・博物館に連れて行く」「Ⅳ、クラシック音楽のコンサートに連れて行く」「Ⅴ、海外旅行に連れて行く」「Ⅵ、地域のイベントに連れて行く」「Ⅶ、写真館に連れて行く」「Ⅷ、山登りに連れて行く」「Ⅸ、いっしょに天体観測する」「Ⅹ、いっしょにバードウォッチングする」の十項目について訊いた。

これらの項目の内容は多岐に亘っており、十項目の中には文化資本の指標として適当ではないものも含まれていると考えられる。そこで、文化資本の指標として適当な項目を選ぶために、文化資本論の既往研究において文化資本の指標として多く用いられるクラシック音楽の聴取頻度とこれら十項目との相関を求めた結果が表 5 である。クラシック聴取頻度 (q2x6) は質問紙上では「あなたは以下のような音楽を好んで聴いていますか」と尋ねた q2 のうちの二項目であり、「1 よく聞く」「2 ときどき聞く」「3 あまり聞かない」「4 まったく聞かない」の四段階で回答を求めた。分析にあたっては「よく聞く」が 4 になるように変数の向きを変更した。同時に、q7 の十変数も「よくある」が 4 になるように変数の向きを変更した。

表 5：15 歳時文化体験とクラシック音楽聴取頻度との相関行列

15 歳時文化体験	クラシック音楽聴取頻度
読み聞かせ	.094*
勉強指導	.139**
美術館・博物館	.243**
クラシックのコンサート	.363**
海外旅行	.002
地域のイベント	.007
写真館	.093*
山登り	.087
天体観測	.021
バードウォッチング	-.037

**p<.01, *p<.05

表 5 より、クラシック音楽の聴取頻度と有意な正の相関を示し、かつ相関係数が比較的大きい「美術館・博物館に連れて行く」「クラシック音楽のコンサートに連れて行く」が文化資本の指標として有望であることがわかる。したがって今回は、これら二項目の合計スコアを 15 歳時文化体験なканずく芸術文化資本の指標として用いることにする。

3.2.2 読書文化資本

読書文化資本の指標となるのは 15 歳時家庭蔵書量である。質問紙上では「あなたが 15 歳のころ（中学卒業時）、あなたのお宅には本がどのくらいありましたか。雑誌、新聞、教科書、漫画、コミックは含めないでお答えください」と尋ね、「1 家に本はなかった」「2 10 冊以下」「3 11 冊～25 冊」「4 26 冊～50 冊」「5 51 冊～100 冊」「6 101 冊～200 冊」「7 201 冊～500 冊」「8 501 冊以上」の八つの選択肢から回答を求めた。分析上では実際の蔵書量が反映されるよう、以下のようにコーディングを変更した。

1→0 2→1 3→11 4→26 5→51 6→101 7→201 8→501

3.2.3 相続文化資本の指標となる変数の記述統計量と相関行列

それぞれの変数の記述統計量と、変数間の相関行列は以下の通りである。

表 6：相続文化資本の指標となる各変数の記述統計量

	度数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
芸術文化資本	465	4.30	1.62	2	8
読書文化資本	467	109.76	139.99	0	501

表 7：相続文化資本の変数間の相関行列

	読書文化資本
芸術文化資本	.288**

**p<.01

4 結果

表 8 および表 9 に相関分析の結果を示す。

表 8：両親の文化資本と子の相続文化資本の相関（男性）

	相続文化資本	
	芸術文化資本	読書文化資本
父親学歴	.142*	.165**
	n=310	n=309
母親学歴	.210**	.175**
	n=309	n=308

**p<.01, *p<.05

表 9：両親の文化資本と子の相続文化資本の相関（女性）

	相続文化資本	
	芸術文化資本	読書文化資本
父親学歴	.241**	.124
	n=142	n=140
母親学歴	.254**	.200*
	n=142	n=140

**p<.01, *p<.05

これらの表をみると以下のようなことがわかる。

まず、統計的に有意な値が得られなかった女性の読書文化資本を除くすべての場合において有意な正の相関がみられ、親の学歴が高いほど子の相続文化資本は高まる。

次に、読書文化資本よりも芸術文化資本のほうが親の学歴と強く相関する。これは、読書文化資本よりも芸術文化資本のほうが親子間で伝達される傾向が強いことを示唆する。

第三に、両親学歴を比べると、統計的に有意な値が得られた項目ではすべて、母親学歴のほうが芸術文化資本および読書文化資本と強く相関している。このことは、母親学歴は父親学歴よりも世代間伝達されやすいことを示唆する。

第四に、男女間で比較すると、統計的に有意な値が得られた項目ではすべて、女性のほうが父親学歴および母親学歴と強く相関している。これは、女性のほうが文化資本の世代間伝達を受けやすいことを示唆する。

最後にすべての相関係数の絶対値を比べると、女性の芸術文化資本と両親学歴の間の相関が突出して強く、なかでも母親学歴と特に強く相関していることがわかる。これは、上述の通り読書文化資本よりも芸術文化資本のほうが、父親学歴よりも母親学歴のほうが、そして男性よりも女性のほうが文化資本の世代間伝達により強く関わっていることを示している。

5 考察

ここでは、以上で得られた結果を先行研究と照らし合わせたうえで解釈してみたい。まず、今回得られた結果を以下の三つの命題に整理する。

- ① 読書文化資本よりも芸術文化資本のほうが相続文化資本としての性格を強くもつ。
- ② 父親学歴よりも母親学歴のほうが相続文化資本の世代間伝達に強く関係している。
- ③ 男性よりも女性のほうが相続文化資本の世代間伝達を受けやすい。

5.1 相続文化資本としての芸術文化資本

まず①については、仙台市の高校生の文化資本を調べた片瀬（2004）の分析結果と一致する。片瀬（2004）が指摘するように、この結果は読書文化資本のほうが獲得資本としての性格を強くもつということでもある。読書文化資本については、学校のカリキュラムを受ける過程で読書が習慣化し、その結果蔵書量が増えるという関係もありえるが、一般的にいて学校は芸術に触れる機会をそれほど提供していないため、芸術文化資本のほうが相続文化資本としての性格が強いものと考えられる。

片瀬（2004）と比べると、今回の結果では、男性の芸術文化資本がより高い傾向にある。これは、調査対象の違いに由来する。今回の調査対象である京大生は、学歴すなわち制度化された文化資本を多くもつ人々である。一般に、制度化された文化資本は芸術文化資本などの「身体化された文化資本」を多く持っているほうが獲得しやすいため、京大生の男性はそもそも15歳の時点で芸術文化資本を片瀬（2004）の調査対象者よりも多く持っていたのだと考えられる。

5.2 文化資本相続の性差の背景

次に、②と③は先行研究で繰り返し確認された「文化資本が最も多く相続されるのは母親から娘に相続されるときである」という知見を支持している。では、これら二つの結果の背後にあるプロセスはどのようなものなのだろうか。これについては片岡（1997）が以下のように整理している。

まず、文化資本相続の性差は、性別役割分業の強さと関係している。性別役割分業の強い社会では育児はもっぱら女性の仕事となるため、母親の文化資本は父親の文化資本よりも子の相続文化資本に強く影響する（②）。また、女性は男性に比べ経済資本を得る機会が少ないので、経済資本を多く獲得して階層上昇を果たすチャンスが少ない。したがって、経済資本の代わりに文化資本を多く得ることで、同程度の経済資本または文化資本をもつ男性と結婚する可能性を高め、階層を上昇させる戦略をとることになる。このような前提が共有されているため、家庭内においても娘には幼少期から習い事をさせるもしくは文化的体験をさせるなどして文化資本を獲得させる。その結果女性のほうが男性よりも相続文化資本が多くなる（③）。また、芸術に関連する習い事が多いことから、芸術文化資本が特に多くなる。

注目すべきは、片岡（1997）が書かれて二十年以上たった今日においても今回の結果③が片岡（1997）の発見した関係に当てはまることである。この間、女性の就業率が上昇するなど性別役割分業は以前ほど明白ではなくなっているにも関わらず、片岡（1997）の指摘した通り、女性の方が相続文化資本をより多く相続している。

この原因は、親世代の意識や態度にある。幼少時の相続文化資本は、子が自らの意思で獲得できる性質のものではなく、親の態度によって決まる部分が多い。したがって、文化資本の相続に性差があるとすれば、それは親世代が意識的にあるいは無意識的に子の性別によって教育の仕方を変えており、その結果相続される文化資本の量が変わるのではないかと考えられる。その前提には先ほども触れたように、性別役割分業の強い社会における女性の戦略がある。いまの大学生の親世代は、女性は婚姻によって階層上昇を果たすためにより多くの文化資本を身につけるべきという考え方が当然とされた時代に育ったため、娘には息子よりも多く習い事や文化体験をさせていると予想される。その結果、今回の分析においても文化資本の相続の性差が現れたのではないと思われる。

今回は両親学歴と15歳時の相続文化資本の関係のみを分析したが、本来であれば獲得文化資本や大学生の現在の文化資本をも視野に入れた分析をするべきであった。それは今後の課題としたい。

文献

片岡栄美, 1997, 「家族の再生産戦略としての文化資本の相続」『家族社会学研究』9(9): 23-38,

- 片瀬一男, 2004, 「文化資本と教育アスピレーション——読書文化資本・芸術文化資本の相続と獲得」『人間情報学研究』 9: 15-29.
- 松岡亮二・中室牧子・乾友彦, 2014, 「縦断データを用いた文化資本相続過程の実証的検討」『教育社会学研究』 95: 89-110.
- 中西啓喜, 2017, 「育児戦略の効果は母学歴によって異なるのか?——学力パネルデータを用いたハイブリッドモデルによる検証」『応用社会学研究』 59: 241-252.

調査票

文化活動に関する意識調査

この調査は文学部の社会学実習という授業（担当教員：太郎丸博）の課題のために行っています。データは匿名化したうえで部外秘として扱い、教育と研究以外の目的には一切利用しませんので、ご協力をお願いいたします。また、すでにこのアンケートに回答してくださった方は再び回答していただく必要はありません。

問1 あなたの所属する学部／研究科と性別を教えてください。

学部／研究科 <hr style="border: 0; border-top: 1px solid black; margin: 5px 0;"/>	1 男	2 女	3 その他
--	-----	-----	-------

問2 あなたは以下のような音楽を好んで聴いていますか。

	よく聞く	ときどき聞く	あまり聞かない	まったく聞かない
I J-POP	1	2	3	4
II 洋楽 POP	1	2	3	4
III 邦楽ロック	1	2	3	4
IV 洋楽ロック	1	2	3	4
V ジャズ	1	2	3	4
VI クラシック	1	2	3	4
VII アニソン	1	2	3	4

問3 あなたは、どのぐらいの頻度でコンサートやライブに行きますか。

	一月に一回以上	半年に一回程度	一年に一回程度	数年に一回程度	行ったことがない
I J-POP	1	2	3	4	5
II 洋楽 POP	1	2	3	4	5
III 邦楽ロック	1	2	3	4	5
IV 洋楽ロック	1	2	3	4	5
V ジャズ	1	2	3	4	5
VI クラシック	1	2	3	4	5
VII アニソン	1	2	3	4	5

問4 あなたは以下のジャンルの本をどれくらいの頻度で読みますか。

	週に三回以上	週に一、二回ぐらい	月に数回ぐらい	年に数回ぐらい	ほとんど読まない
I 文芸書（小説・エッセイ・詩など）	1	2	3	4	5
II 実用書（料理、趣味、スポーツ、美容、冠婚葬祭など）	1	2	3	4	5
III ビジネス・経済・経営書	1	2	3	4	5
IV 学習参考書（資格対策書、語学書、辞書など）	1	2	3	4	5
V 専門書（人文科学、社会科学、理工科学、医学、芸術など）	1	2	3	4	5
VI 雑誌	1	2	3	4	5

問5 あなたは以下の文化活動をどれくらいの頻度で行いますか。

	週に一回以上	月に数回ぐらい	年に数回ぐらい	ほとんど行かない
I 演劇を観に行く	1	2	3	4
II 美術館へ行く	1	2	3	4
III 映画館へ行く	1	2	3	4

問6 あなたが 15 歳のころ(中学卒業時)、あなたのお宅には本がどのくらいありましたか。雑誌、新聞、教科書、漫画、コミックは含めないでお答えください。

1 家に本はなかった	2 10 冊以下	3 11 冊～25 冊
4 26 冊～50 冊	5 51 冊～100 冊	6 101 冊～200 冊
7 201 冊～500 冊	8 501 冊以上	

問7 あなたが 15 歳までに、次のようなことをご両親にしてもらったことがありますか。

	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない
I、本の読み聞かせ	1	2	3	4
II、勉強を教えてもらう	1	2	3	4
III、美術館・博物館に連れて行く	1	2	3	4
IV、クラシック音楽のコンサートに連れて行く	1	2	3	4
V、海外旅行に連れて行く	1	2	3	4
VI、地域のイベントに連れて行く	1	2	3	4
VII、写真館に連れて行く	1	2	3	4
VIII、山登りに連れて行く	1	2	3	4
IX、いっしょに天体観測する	1	2	3	4
X、いっしょにバードウォッチングする	1	2	3	4

問8 あなたが 15 歳だったころ、あなたの父親は次のどのタイプでしたか。

1 家事も子育ても母親任せ	2 家事は母親まかせ、子育てには協力的
3 家事には協力的、子育ては母親まかせ	4 家事も子育ても協力的
5 そのとき父はいなかった	

問9 あなたの親が最後に行った学校は次のどれにあたりますか。

	中学校	高校	高専	短大	大学	大学院	分からない
父親の学歴	1	2	3	4	5	6	7
母親の学歴	1	2	3	4	5	6	7

問10 あなたが15歳だったころ(中学卒業時)、お宅には次にあげるもののうち何がありました

か。あてはまるものをいくつでも選んでください。

1 持ち家	2 田畑・山林	3 自分専用の部屋	4 パソコン・ワープロ	5 電話(携帯電話・PHSを含む)
6 応接間	7 文学全集	8 ピアノ	9 一眼レフ・ビデオカメラ	10 DVDレコーダー(テレビ内蔵型含む)
11 テレビ	12 百科事典	13 自家用車	14 美術品・骨董品	15 ゲーム機(携帯ゲーム機を含む)
16 別荘	17 学習机	18 オーディオ機器		

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

單純集計表

q1x1 学部/研究科

	n	%
0 総合人間学部	26	5.5
1 文学部	98	20.7
2 教育学部	7	1.5
3 法学部	62	13.1
4 経済学部	25	5.3
5 理学部	39	8.2
6 医学部	22	4.6
7 薬学部	22	4.6
8 工学部	99	20.9
9 農学部	57	12.0
10 文学研究科	2	0.4
17 工学研究科	4	0.8
19 人間・環境学研究科	2	0.4
25 地球環境学舎/学舎	2	0.4
27 経営管理研究部/経営管理教育部	1	0.2
回答無し	6	1.3
合計	474	100.0

q1x2 性別

	n	%
1 男	323	68.1
2 女	143	30.2
3 その他	3	0.6
回答無し	5	1.1
合計	474	100.0

q2x1 視聴 J-POP

	n	%
1 よく聞く	229	48.3
2 ときどき聞く	142	30.0
3 あまり聞かない	61	12.9
4 まったく聞かない	40	8.4

回答無し	2	0.4
合計	474	100.0

q2x2 視聴 洋楽 POP

	n	%
1 よく聞く	101	21.3
2 ときどき聞く	130	27.4
3 あまり聞かない	132	27.8
4 まったく聞かない	107	22.6
回答無し	4	0.8
合計	474	100.0

q2x3 視聴 邦楽ロック

	n	%
1 よく聞く	128	27.0
2 ときどき聞く	103	21.7
3 あまり聞かない	86	18.1
4 まったく聞かない	154	32.5
回答無し	3	0.6
合計	474	100.0

q2x4 視聴 洋楽ロック

	n	%
1 よく聞く	60	12.7
2 ときどき聞く	106	22.4
3 あまり聞かない	116	24.5
4 まったく聞かない	189	39.9
合計	471	99.4
回答無し	3	0.6
合計	474	100.0

q2x5 視聴 ジャズ

	n	%
1 よく聞く	26	5.5

2 ときどき聞く	68	14.3
3 あまり聞かない	133	28.1
4 まったく聞かない	240	50.6
回答無し	7	1.5
合計	474	100.0

q2x6 視聴 クラシック

	n	%
1 よく聞く	52	11.0
2 ときどき聞く	108	22.8
3 あまり聞かない	124	26.2
4 まったく聞かない	184	38.8
合計	468	98.7
回答無し	6	1.3
合計	474	100.0

q2x7 視聴 アニソン

	n	%
1 よく聞く	74	15.6
2 ときどき聞く	110	23.2
3 あまり聞かない	104	21.9
4 まったく聞かない	181	38.2
回答無し	5	1.1
合計	474	100.0

q3x1 コンサート J-POP

	n	%
1 一月に一回	12	2.5
2 半年に一回	31	6.5
3 一年に一回	39	8.2
4 数年に一回	91	19.2
5 行ったことがない	297	62.7
回答無し	4	0.8
合計	474	100.0

q3x2 コンサート 洋楽 POP

	n	%
1 一月に一回	3	0.6
2 半年に一回	4	0.8
3 一年に一回	11	2.3
4 数年に一回	19	4.0
5 行ったことがない	431	90.9
回答無し	6	1.3
合計	474	100.0

q3x3 コンサート 邦楽ロック

	n	%
1 一月に一回	14	3.0
2 半年に一回	26	5.5
3 一年に一回	33	7.0
4 数年に一回	35	7.4
5 行ったことがない	363	76.6
回答無し	3	0.6
合計	474	100.0

q3x4 コンサート 洋楽ロック

	n	%
1 一月に一回	4	0.8
2 半年に一回	8	1.7
3 一年に一回	9	1.9
4 数年に一回	20	4.2
5 行ったことがない	429	90.5
回答無し	4	0.8
合計	474	100.0

q3x5 コンサート ジャズ

	n	%
1 一月に一回	7	1.5

2 半年に一回	10	2.1
3 一年に一回	4	0.8
4 数年に一回	24	5.1
5 行ったことがない	424	89.5
回答無し	5	1.1
合計	474	100.0

q3x6 コンサート クラシック

	n	%
1 一月に一回	10	2.1
2 半年に一回	26	5.5
3 一年に一回	24	5.1
4 数年に一回	56	11.8
5 行ったことがない	352	74.3
回答無し	6	1.3
合計	474	100.0

q3x7 コンサート アニソン

	n	%
1 一月に一回	2	0.4
2 半年に一回	7	1.5
3 一年に一回	8	1.7
4 数年に一回	14	3.0
5 行ったことがない	437	92.2
回答無し	6	1.3
合計	474	100.0

q4x1 文芸書

	n	%
1 週に三回以上	53	11.2
2 週に一回ぐらい	68	14.3
3 月に数回ぐらい	118	24.9
4 年に数回ぐらい	144	30.4
5 ほとんど読まない	87	18.4

回答無し	4	0.8
合計	474	100.0

q4x2 実用書

	n	%
1 週に三回以上	21	4.4
2 週に一回ぐらい	47	9.9
3 月に数回ぐらい	93	19.6
4 年に数回ぐらい	115	24.3
5 ほとんど読まない	194	40.9
回答無し	4	0.8
合計	474	100.0

q4x3 ビジネス・経済・経営書

	n	%
1 週に三回以上	16	3.4
2 週に一回ぐらい	23	4.9
3 月に数回ぐらい	34	7.2
4 年に数回ぐらい	66	13.9
5 ほとんど読まない	330	69.6
回答無し	5	1.1
合計	474	100.0

q4x4 学習参考書

	n	%
1 週に三回以上	74	15.6
2 週に一回ぐらい	106	22.4
3 月に数回ぐらい	102	21.5
4 年に数回ぐらい	67	14.1
5 ほとんど読まない	120	25.3
回答無し	5	1.1
合計	474	100.0

q4x5 専門書

	n	%
1 週に三回以上	70	14.8
2 週に一回ぐらい	83	17.5
3 月に数回ぐらい	91	19.2
4 年に数回ぐらい	70	14.8
5 ほとんど読まない	154	32.5
回答無し	6	1.3
合計	474	100.0

q4x6 雑誌

	n	%
1 週に三回以上	17	3.6
2 週に一回ぐらい	57	12.0
3 月に数回ぐらい	118	24.9
4 年に数回ぐらい	110	23.2
5 ほとんど読まない	166	35.0
回答無し	6	1.3
合計	474	100.0

q5x1 演劇

	n	%
1 週に一回以上	2	0.4
2 月に数回ぐらい	9	1.9
3 年に数回ぐらい	81	17.1
4 ほとんどしない	378	79.7
回答無し	4	0.8
合計	474	100.0

q5x2 美術館

	n	%
1 週に一回以上	2	0.4
2 月に数回ぐらい	21	4.4
3 年に数回ぐらい	175	36.9
4 ほとんどしない	272	57.4

回答無し	4	0.8
合計	474	100.0

q5x3 映画館

	n	%
1 週に一回以上	5	1.1
2 月に数回ぐらい	68	14.3
3 年に数回ぐらい	294	62.0
4 ほとんどしない	102	21.5
回答無し	5	1.1
合計	474	100.0

q6 15 歳時蔵書数

	n	%
1 家に本はなかった	4	0.8
2 10 冊以下	37	7.8
3 11 冊~25 冊	72	15.2
4 26 冊~50 冊	71	15.0
5 51 冊~100 冊	82	17.3
6 101 冊~200 冊	89	18.8
7 201 冊~500 冊	69	14.6
8 501 冊以上	43	9.1
回答無し	7	1.5
合計	474	100.0

q7x1 15 歳まで 本の読み聞かせ

	n	%
1 よくある	217	45.8
2 ときどきある	155	32.7
3 あまりない	60	12.7
4 まったくない	34	7.2
回答無し	8	1.7
合計	474	100.0

q7x2 15 歳まで 勉強教える

	n	%
1 よくある	105	22.2
2 ときどきある	141	29.7
3 あまりない	137	28.9
4 まったくない	83	17.5
回答無し	8	1.7
合計	474	100.0

q7x3 15 歳まで 美術館・博物館

	n	%
1 よくある	92	19.4
2 ときどきある	171	36.1
3 あまりない	122	25.7
4 まったくない	81	17.1
回答無し	8	1.7
合計	474	100.0

q7x4 15 歳まで クラシック・コンサート

	n	%
1 よくある	25	5.3
2 ときどきある	79	16.7
3 あまりない	100	21.1
4 まったくない	261	55.1
回答無し	9	1.9
合計	474	100.0

q7x5 15 歳まで 海外旅行

	n	%
1 よくある	47	9.9
2 ときどきある	80	16.9
3 あまりない	71	15.0
4 まったくない	268	56.5
回答無し	8	1.7

合計	474	100.0
----	-----	-------

q7x6 15 歳まで 地域のイベント

	n	%
1 よくある	63	13.3
2 ときどきある	174	36.7
3 あまりない	152	32.1
4 まったくない	76	16.0
回答無し	9	1.9
合計	474	100.0

q7x7 15 歳まで 写真館

	n	%
1 よくある	7	1.5
2 ときどきある	28	5.9
3 あまりない	105	22.2
4 まったくない	325	68.6
回答無し	9	1.9
合計	474	100.0

q7x8 15 歳まで 山登り

	n	%
1 よくある	30	6.3
2 ときどきある	113	23.8
3 あまりない	105	22.2
4 まったくない	217	45.8
回答無し	9	1.9
合計	474	100.0

q7x9 15 歳まで 天体観測

	n	%
1 よくある	15	3.2
2 ときどきある	51	10.8
3 あまりない	112	23.6

4 まったくない	286	60.3
回答無し	10	2.1
合計	474	100.0

q7x10 15歳まで バードウォッチング

	n	%
1 よくある	5	1.1
2 ときどきある	12	2.5
3 あまりない	47	9.9
4 まったくない	400	84.4
回答無し	10	2.1
合計	474	100.0

q8 15歳時の父親の家事・育児

	n	%
1 家事も子育ても母親任せ	130	27.4
2 家事は母親任せ、子育てには協力的	136	28.7
3 家事には協力的、子育ては母親任せ	35	7.4
4 家事も子育ても母親任せ	126	26.6
5 そのとき父はいなかった	35	7.4
回答無し	12	2.5
合計	474	100.0

q9x1 父親の学歴

	n	%
1 中学校	2	0.4
2 高校	56	11.8
3 高専	10	2.1
4 短大	9	1.9
5 大学	290	61.2
6 大学院	78	16.5
7 分からない	15	3.2
回答無し	14	3.0
合計	474	100.0

q9x2 母親の学歴

	n	%
1 中学校	2	0.4
2 高校	59	12.4
3 高専	8	1.7
4 短大	142	30.0
5 大学	212	44.7
6 大学院	21	4.4
7 分からない	14	3.0
回答無し	16	3.4
合計	474	100.0

q10x1 持ち家

	n	%
0 なし	96	20.3
1 あり	366	77.2
回答無し	12	2.5
合計	474	100.0

q10x2 田畑・山林

	n	%
0 なし	399	84.2
1 あり	63	13.3
回答無し	12	2.5
合計	474	100.0

q10x3 自分専用の部屋

	n	%
0 なし	116	24.5
1 あり	346	73.0
回答無し	12	2.5
合計	474	100.0

q10x4 パソコン・ワープロ

	n	%
0 なし	49	10.3
1 あり	413	87.1
回答無し	12	2.5
合計	474	100.0

q10x5 電話

	n	%
0 なし	26	5.5
1 あり	436	92.0
回答無し	12	2.5
合計	474	100.0

q10x6 応接間

	n	%
0 なし	347	73.2
1 あり	115	24.3
回答無し	12	2.5
合計	474	100.0

q10x7 文学全集

	n	%
0 なし	393	82.9
1 あり	69	14.6
回答無し	12	2.5
合計	474	100.0

q10x8 ピアノ

	n	%
0 なし	199	42.0
1 あり	263	55.5
回答無し	12	2.5
合計	474	100.0

q10x9 一眼レフ・ビデオカメラ

	n	%
0 なし	184	38.8
1 あり	278	58.6
回答無し	12	2.5
合計	474	100.0

q10x10 DVD レコーダー

	n	%
0 なし	71	15.0
1 あり	391	82.5
回答無し	12	2.5
合計	474	100.0

q10x11 テレビ

	n	%
0 なし	18	3.8
1 あり	444	93.7
回答無し	12	2.5
合計	474	100.0

q10x12 百科事典

	n	%
0 なし	254	53.6
1 あり	208	43.9
回答無し	12	2.5
合計	474	100.0

q10x13 自家用車

	n	%
0 なし	74	15.6
1 あり	388	81.9
回答無し	12	2.5

合計	474	100.0
----	-----	-------

回答無し	12	2.5
合計	474	100.0

q10x14 美術品・骨董品

	n	%
0 なし	384	81.0
1 あり	78	16.5
回答無し	12	2.5
合計	474	100.0

q10x15 ゲーム機

	n	%
0 なし	91	19.2
1 あり	371	78.3
回答無し	12	2.5
合計	474	100.0

q10x16 別荘

	n	%
0 なし	446	94.1
1 あり	16	3.4
回答無し	12	2.5
合計	474	100.0

q10x17 学習机

	n	%
0 なし	32	6.8
1 あり	430	90.7
回答無し	12	2.5
合計	474	100.0

q10x18 オーディオ機器

	n	%
0 なし	138	29.1
1 あり	324	68.4

京大生の文化資本

京都大学文学部社会学研究室 2018 年度社会学実習 報告書

2019 年 3 月発行

編集・発行：太郎丸 博

京都大学文学部社会学研究室

〒606-8501 京都市左京区吉田本町
